

も、仁に違ひ去ることなく、常に能く仁に依れり。其餘の諸子は日に仁の域に至り、日月に仁の域に至ることあれども、暫くにして違ひ去り、顔回の如く能く久しく仁に依ること能はざるなりと。

【考異】其餘、仁齋は、文學政事の類を指すとなし、徂徠も亦其の説を補成して、其の心久しく仁に依りて違はざれば、其の他の衆徳は自然に來り集るをいふといへり。即ち此章は回を呼びて學問の法を語りたまひたるにて、其の心久しく仁を離ることなければ、其の他の文學政事等の業は、日月の經過すると共に、自然に成立するなりとの義とす。「其餘」の二字の例は泰伯篇にも「如有周公之才之美、使驕且吝、其餘不足觀而已」とありて、仁齋徂徠二子の解を優と爲し、且つ徂徠が其の心久しく仁に依れば、他の衆徳は自然に來り集るとの説は、禮記、儒行篇に「溫良者、仁之本也。敬慎者、仁之地也。寬裕者、仁之作也。孫接者、仁之能也。禮節者、仁之貌也。言談者、仁之文也。歌樂者、仁之和也。分散者、仁之施也。儒皆兼此而有之」とあるに同じく、頗る允當の解なれども、此篇に載する所の語、多くは人物の評論なれば、姑く何晏等の舊説に従ひて、顔回の徳を贊し、其餘の諸子を勵ましたまひたるものと爲して講ぜり。

○季康子問、仲由可使從政也。與。子曰、由也果。於從政乎何有。曰、賜也可使從政也。與。曰、賜也達。於從政乎何有。曰、求也可使從政也。與。曰、求也藝。於從政乎何有。

【釋讀】季康子問ふ、仲由は、政に從はしむ可きかと。子曰く、由や果なり。政に從ふに於てか何か有らんと。曰く、賜や政に從はしむ可きかと。曰く、賜や達なり。政に從ふに於てか何か有らんと。曰く、求や政に從はしむ可きかと。曰く、求や藝なり。政に從ふに於てか何か有らんと。

【章旨】季康子の問に因りて、三子各、所長あり、以て政に從ふに足ることを語りたまひたるなり。【字義】○季康子、魯の大夫、已に前(五六)に出づ。○從政、大夫と爲りて政に從ふ義。國君には爲政といひ、大夫には從政といふは、君臣によりて辭を異にするなり。○果、決斷なり。資性剛決、事に遇ひ能く斷するをいふ。○何有、之を易しとする辭、已に(二)に解せり。○賜、子貢の名、姓は端木。○達、事理に通するなり、心胸穎悟にして事理に通曉する。○求、冉有の名。○藝、才能多きなり。

【直解】孔子の門、政事には冉有季路の稱あり。季康子も亦孔門に學びて其の稱を熟聞すれども、所長の果して何れに在るか知らず。故に先づ年齢に従ひ、季路即ち仲由より問を起して曰く、仲由は大夫となして政事に從はしめて然るべき人なるかと。孔子答へてのたまはく、政に從ふには果斷を要す。果斷なれば、能く大疑を決して、大計を定むべし。之に反して優柔不斷(グツグ)の人は、事毎に遲疑すれば、政事を取扱はしむることは、中難きものなり。而るに由や資性剛決にして、事に遇ひて能く斷す。されば政に從はしむるに於て、何の難きことか之れ有らんやと。季康子又問ふ、賜(子貢)は政事に從はしめて然るべき人なるかと。孔子答へてのたまはく、政に從ふには、事理に通達せんことを要す。事理に通達すれば、方に能く事務の緩急輕重を審かにして、施設を誤ることなかるべし。賜や智識高明にして、事を料るに多く理に中る。されば之をして政に從はしむれば、

能く繁を理め、劇(ゲイツ)を治めて、澁滯(シヤウシヤウ)の患なし。故に政事を取扱はしむるに於て、何の難きことか之れ有らんやと。又問ふ、求(冉有)は政事に従はしめて然るべき人なるかと。孔子答へてのたまはく、政に従ふには才能の多からんことを要す。才能多ければ能く機に臨み變に應じて、事毎に處置の宜しきを得るなり。求や才能ありて、泛(ヒラ)く百般の事務に應用することを得べし。されば政に従はしむるに於て何の難きことか之れ有らんやと。

【餘義】人には各、所長あり、其の所長を取りて器使せば、皆用ふべきなり。孔子の此言、實に萬世人を用ふるの準繩(チキ)と爲すべし。

○季氏使閔子騫爲費宰。閔子騫曰、善爲我辭焉。如有復我者、則吾必在汶上矣。

【譯讀】季氏閔子騫をして費の宰たらしめんとす。閔子騫曰く、善く我が爲めに辭せよ。もし我を復する者有らば、則ち吾は必ず汶の上(ハ)に在らんと。

【章旨】閔子の賢にして出處去就を審かにせしことを記す。

【字義】○閔子騫 孔子の弟子、名は損、子騫は字、魯人、徳行を以て名を著す。○費 季氏の邑、魯の東鄙に在り。○善 委曲なり。○如 若なり。○復 重ねて來りて我を召すをいふ。○者 事の字の義に近し。○汶 水の名、齊の南、魯の北の境上に在り。

【直解】季氏、閔子の賢を聞き、之を用ひて己の領分なる費の邑宰と爲さんとし、使者をして之を召さ

しむ。而るに閔子は季氏の如き不臣の人物に仕ふることを欲せざりしかば、其の使者に向かひて曰く、善く委曲に我が爲めに、其の召を辭謝せられよ。若し復び來りて我を召すこともあらば、吾は必ず魯を去りて齊に至りて汶水の上に在らんと。其の始に「善爲我辭」といひしは、其の召を辭するの言頗る婉なれども、終に「如有復我者、則吾必在汶上矣」といひしは、豫め其の後の召を却くる言にして、之を絶つての意、甚だ決するを見るなり。

【考異】釋文に曰く、「一本ニ吾字無し」と。鄭本竝に史記、弟子傳には、則吾の二字なし。

【餘義】程子曰く、「仲尼ノ門、能ク大夫ノ家ニ仕ヘザル者ハ、閔子曾子ノ數人ノミ」と。然れども一概に大夫の家に仕ふるを非と爲すべきにあらず。孔子も亦未だ曾て諸弟子の季氏に仕ふるを以て不可と爲したまはざりき。孝經、諫争章に曰く、「大夫有争臣三人、雖無道不_レ失其家」と。季氏は固より無道なり。然れども其の亡びざる所以の者は、冉有季路の宰臣たるを以てなり。仲弓の季氏の宰たりしは、其の意季氏の失を救ひ、亂を撥して之を正に反さしめんと欲するに在り。閔氏の費の宰を辭せしは、季氏を以て救ふべからざるの人となし、危を持し顛を扶するの術なきを以てなり。其の或は仕へ、或は仕へざる所以の者は、亦各其の志を行ふのみ。謝顯道(良佐)が「閔子ノ季氏ノ不義ノ富貴ヲ視ルコト曾ニ犬彘ノミナラズ。又從ヒテ之ニ臣タルコトハ、豈其ノ心ナランヤ」といへるは、戰國の處士が、傲然として横議し、王侯大人を藐視(カロン)する者の見たるを免れず。斷じて訓と爲すべからざるなり。

○伯牛有疾。子問之。自牖執其手。曰、凶之命矣夫。斯人也而有斯疾、斯人也而有斯疾也。

【譯讀】伯牛疾有り。子之を問ふ。牖より其の手を執りたまふ。曰く、之を凶せん。命なるかな。斯の人にして斯の疾有る、斯の人にして斯の疾有るやと。

【章旨】孔子、伯牛の將に死せんとするを痛惜したまへることを記す。

【字義】○伯牛 孔子の弟子、姓は冉、名は耕、魯人。德行を以て顔閔二子と並稱せらる(三四) ○有疾 包咸曰く「伯牛ニ惡疾アリ、人ヲ見ルコトヲ欲セズ」と。淮南子、精神訓に「冉伯牛厲疾」と。即ち癩病なり。○牖 窗なり。○曰 出でて他人に向ひて曰ひたるなり。○凶 喪なり、死亡なり。

【直解】伯牛癩病の疾ありて、危篤に瀕せしかば、孔子之を見舞はれたれども、惡疾にて人に面會することを恥ぢらひたれば、孔子も其の意を酌みて室には入らず、牖より其の手を執りて永訣の意を致したまひ、さて退きて他の人に向かひてのたまはく、嗚呼痛ましきことなるかな、病勢もかく重りては本復は覺束なかるべし。されど天命なれば奈何とも爲し難し。かかる德行ある善人なるに、かかる惡疾に罹るとは、さてもさても歎かはしき事なるかなと。重ねてのたまひたるは、深く之を惜ませたまひたるなり。

【考異】牖 朱註に「牖ハ南牖ナリ、禮ニ、病者ハ北牖ノ下ニ居ル。君之ヲ視レバ、則チ南牖ノ下ニ遷シ、君ヲシテ以テ南面シテ己ヲ視ルコトヲ得シムト。時ニ伯牛ノ家、此禮ヲ以テ孔子ヲ尊ブ。孔子放

テ當ラズ(人君の禮に當らざるなり)故ニ其ノ室ニ入ラズシテ牖ヨリ其ノ手ヲ執リタマフ。蓋シ之ト永訣シタマフナリ」と。されども禮文の出づる所、今考ふべからず。或は儀禮註疏に「病者居北牖下、君視之、遷南牖下」とあるを論語註疏に引きて南牖に誤り、朱子も亦其の誤に沿ひたるものならんか。古人堂室の間、隔つるに牖(窓)を以てす、牖は牖と異れり。且つ伯牛の家、果して君臣の禮を以て孔子を過敬せしか、これ頗る疑ふべきなり。陳天祥曰く「姑ク人情ヲ以テ之ヲ推スニ、伯牛ハ純正ノ士ナリ。必ズ此ノ如ク輕卒ニ家人ヲシテ妄ニ僭上ノ禮ヲ以テ、孔子ヲ過尊セシメズ。設シコレアラシメバ、孔子必ズ其ノ失ヲ正シ、之レヲシテ更ニ其ノ位ヲ改メシムルコトモ、亦爲シ難カラズ。心ニ其ノ非ヲ知リテ默シテ言ハザルハ、師弟ノ間、豈此ノ如クナルベケンヤ。子路門人ヲシテ臣トナラシムルモ、夫子固ヨリ已ニ其ノ詐ヲ明言シテ之レヲ切責シタマフ(三九)況ヤ夫子未ダ嘗テ君ト爲ラズ、而ルニ伯牛人君ノ禮ヲ以テ之ヲ尊ブハ、其ノ詐又甚ダシ。子路ニ於テハ其ノ非ヲ正シ、伯牛ニ於テハ略一言ナキハ、恐ラクハ此ノ理ナシトス」と。此の説是なり。故に包註の「牛ニ惡疾アリ、人ヲ見ルコトヲ欲セズ。故ニ孔子牖ヨリ其ノ手ヲ執リタマフ」といふに従ふ。

○子曰、賢哉回也。一簞食、一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂、回不改其樂。賢哉回也。

【譯讀】子曰く、賢なるかな回や。一簞の食、一瓢の飲、陋巷に在り。人は其の憂に堪へず。回や其の樂を改めず。賢なるかな回や。

【章旨】顔回の道を樂みて貧窶の爲めに其の心を累さざるを美めたまひしなり。

【字義】○箠 箠なり、竹にて編みたる飯を入るる器。○食 音「シ」飯なり。○瓢 瓠なり、瓠の小なるを瓢といふ。○飲 「ノミモノ」水漿なり。○陋巷 狭くきたなき小路なり。俗にいふ「ウラダナ」なり。直にして廣き道筋を街といひ、曲りて狭き道筋を巷といふ。○在 居るなり。

【直解】孔子、顔回を贊歎してのたまはく、さてもさても賢人なるかな回は、平生食ふ所のものは一箠の飯、飲む所のものは、一瓢の水漿に過ぎず。其の上に狭くいぶせき路次の内に住めり。其の貧窶（ヤツヤツシク）なること此の如し。他人に在りては則ち貧苦の憂に堪へ難くあるべきに、回はかかる境遇に居りて、泰然として心を累さず。終始其の樂を改むることなし。蓋し顔回は學を好み、道を樂む。其の樂たるや深く且つ大いなるを以て、貧窶を以て其の心を累すことなきなり。重ねて賢哉回也とのたまひたるは、深く其の賢を歎美せられたるなり。

【餘義】顔回の賢と雖も、富貴を喜ばざるにはあらず。但當時の時勢、富貴を得んと欲せば、則ち曲學して世に阿り、其の樂む所を改めざるべからず。故に其の樂を改めて不義の富貴を求めんよりは、寧ろ貧賤に安んじて陋巷に窮居するの愈れるに如かずとするのみ。述而篇に「子曰、飯疏食、飲水、曲肱而枕之。樂亦在其中矣。不義而富且貴、於我如浮雲。」（九章）「子曰、富而可求也、雖執鞭之士、吾亦爲之。如不可求、從吾所好。」（述而）「其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至。」（述而）と。互に參考して其の義を發明すべきなり。

○冉求曰、非不説子之道、力不足也。子曰、力不足者、中道而廢。今女畫。

【譯讀】冉求曰く、子の道を説ばざるに非ず、力足らざるなりと。子曰く、力足らざる者は、中道にして廢す。今女は畫れり。

【章旨】學は自強を貴ぶことを語り、冉求の卑退を誡めたまひたるなり。

【字義】○冉求 字は子有、魯の人。孔子の弟子、孔子より少きこと二十九歳。○中道 猶ほ半途といふが如し。○廢 身心廢棄するなり。○畫 止なり、地を畫して自ら限るが如し。

【直解】冉求曰く、仰げば彌高き夫子の道を悦び慕ひて之を得んと欲せざるにあらざれども、唯我が精力足らざれば、到り及ぶこと能はざるなりと。蓋し冉求は性質謙退にして勇往の氣に乏し。故に「力不足」の歎を發せり。孔子因りて誡めてのたまはく、汝今力足らざるが故に到ること能はずといひたれども、元來力の足らざる人は、其の心は進まんを欲すれども、力及ばずして進むこと能はず、已むことを得ずして、半途に身心共に廢棄して、行くことを止むるなり。今汝は力の足らざるには、あらで、心に進むことを欲せずして自ら到ること能はずといひて學を爲さず、又力を用ひざるは、是れ地に線を畫して此れ迄と限り止まるが如きなり。決して力の足らざるにはあらざるなりと。

【餘義】冉求の言は、自ら心に感ずる所ありて發せり。胡氏が「夫子、顔回ノ其ノ樂ヲ改メザルヲ稱シタマフヤ、冉求之ヲ聞ク、故ニ是ノ言アリ」といふものは、臆説にして、従ふべからず。但此章冉

求を誠めたまひし言を以て前章を承けたるものは、編者用意の存する所を知るべきなり。

○子謂子夏曰、女爲君子、無爲小人、儒。

【譯讀】子、子夏に謂ひて曰く、女君子の儒と爲れ、小人の儒と爲ること無かれと。

【章旨】子夏に眞儒と爲れと教へたまひたるなり。

【字義】○子夏 ト商字は子夏、衛の人。孔子の弟子、孔子より少きこと四十四歳。○儒 皇侃曰く「儒ハ濡ナリ、夫レ習學事久シケレバ、則チ身中ヲ濡潤ス。故ニ久シク習フ者ヲ以テ儒ト爲スナリ」と。周禮、大司徒に師儒の稱あり。蓋し郷黨に居りて文學を以て子弟を教育する者を儒と謂ふ。

【直解】孔子、子夏に謂ひてのたまはく、儒に君子、小人の別あり、道を學びて、己を修め、兼ねて人を治むるは、君子の儒なり。汝須く君子の儒と爲らんことを期せよ。凡そ利の爲めにし、名の爲めにするは小人の儒なり。汝決して小人の儒と爲ることなかれと。程子曰く「君子ノ儒ハ己ノ爲メニシ（己の徳を修めんが爲めにする義）小人ノ儒ハ人ノ爲メニス（ひたすら人に知られんが爲めにする義）」と。説き得て最も穩當なり。學者豈猛省せざるべけんや。

【考異】仁齋曰く「君子、小人ハ位ヲ以テ言フ。君子ノ儒ハ、天下ヲ以テ己ガ任ト爲シ、而シテ物ヲ濟フニ志アル者ナリ。小人ノ儒ハ、纔ニ其ノ身ヲ善クスルニ足ルヲ取ルノミ。物ニ及ボスコト能ハザルナリ。子夏ハ文學餘リアリト雖モ、然レドモ規模狭小ナリ。故ニ夫子其ノ或ハ小人ノ儒ト爲ランコトヲ恐レタマフ。故ニ之ニ語ルニ此レヲ以テシタマヘリ。後世ノ記誦詞章ノ學ハ、蓋シ亦小人ノ儒

ノミ」と。息軒も亦此の説に従ひて「蓋シ子夏ハ、文學ヲ以テ稱セラレ、諸子ニ比スレバ、規模差、狭少ナリ。仲尼其ノ末節ニ滯リテ、治國ノ大體ニ達セザルヲ恐ル。所謂君子、小人ハ位ヲ以テ言フ。兼ネテ天下ヲ善クスルハ、是レ君子ノ儒ナリ。獨リ其ノ身ヲ善クスルハ、是レ小人ノ儒ナリ。命ニ窮達アリト雖モ、君子ノ志ス所ハ、則チ此ニ在リテ彼ニ在ラザルナリ」といへり。一解として存すべきなり。」高麗本に「無爲小人儒」の無を毋に作る。

【餘義】履軒曰く「今、人アリ、頗ル身ヲ修メ行ヲ立テ、學ヲ講ジ教ヲ張ル。堂堂乎トシテ道德仁義ノ言、口ヨリ離サズ。而ルニ念頭偏ニ譽ヲ要メ利ヲ干ムルニ在リ。小人ノ儒ノ最下ノ者ト謂フベシ」と。罵り得て頗る痛快を覺ゆ。今や世は益澆淳にして權勢に阿附するの陋儒は、天爵を修めずして徒に人爵を求むるに汲汲し、己を修め兼ねて人を治むるに足るの眞儒は、却りて陋巷に窮處す。梁川蛻巖の詩に曰く「海内文章落布衣」と。豈營に區區たる文章のみならんや。歎するに堪ふべけんや。

○子游爲武城宰。子曰、女得人焉爾乎。曰、有澹臺滅明者、行不由徑、非公事、未嘗至偃之室也。

【譯讀】子游武城の宰たり。子曰く、女人を得たるかと。曰く、澹臺滅明といふ者あり、行くに徑に由らず。公事に非ずんば、未だ嘗て偃の室に至らざるなりと。

【章旨】聖賢が人を取るの法を見すなり。

【字義】○子游 言偃、字は子游、吳の人。孔子の弟子、孔子より少きこと四十五歳。○武城 魯の下邑

の名。○焉爾乎 此三字は語助の辭、聖人の言は穩にして迫切ならざるなり。一説に爾字は疑ふらくは衍文ならん、註疏本には爾を耳に作りたるも、亦未だ安からずと。○澹臺滅明 澹臺は姓、滅明は名、字は子羽、孔子より少きこと二十九歳、狀貌甚だ醜し。孔子以て材薄しと爲す。既にして業を受け、退いて行を修め、名諸侯に施す。孔子之を聞きて曰く、「以貌取人、失之子羽。」(史記、仲尼弟子傳)と。○由 幸ひ由るなり。○徑 路の小にして捷きもの、俗にいふ「チカミチ」。○公事 郷飲酒郷射禮、讀法の類なり、其の時には屬吏は邑宰の室に至りて手傳を爲すを例とす。○偃 子游の名。

【直解】子游、武城といふ邑の長となりしに、或日孔子の問ひたまふには、政を爲すには、人才を得るを先とすることなるが、汝も心立や行狀の民の模範たるべき人物を得たるかと。子游答へて申し上ぐるやう、澹臺滅明といふ者を得て、屬吏と致し置き候ふ。斯の人は其の心正大光明にして、路を行くにも、尋常の人は、傍の捷徑を取るが常の習なるに、彼は必ず大道を行くなり。又屬吏は兎角長官の意を逢迎して媚び諂ひ、御機嫌何などに屢、長官の宅を訪問するものなるが、彼は決して左様の事はなく、公務に關する用事ならでは、未だ嘗て偃即ち私の室に來りしことあらず。此等の事は、些細の事なれども、其の近き小路を行かざるは、平日何事を爲すにも正しきを旨と致し、小を見て速かなることを欲せざることは、推して知らるべし。又公用ならでは、偃の室に至らざるは、自ら心に守る所ありて、己を枉けて人に徇ふの私なきことは、推して知らるべし。これ偃が得たる所の人才にて候ふなりと。

【餘義】人人身を持するに滅明を以て法と爲せば、則ち行ふ所皆正大の事にして、苟且卑屈の羞なく、人を取るに子游を以て法と爲せば、則ち取る所皆正大の人にして、邪媚の者の爲めに惑はさるる所なかるべし。

○子曰、孟之反不伐、奔而殿。將入門、策其馬、曰、非敢後也。馬不進也。

【譯讀】子曰く、孟之反伐らず。奔りて殿す。將に門に入らんとするや、其の馬に策ちて曰く、敢て後するに非ざるなり。馬進まざればなりと。

【章旨】孔子、孟之反の功に誇らざるを美めて、世の勸としたまひしなり。

【字義】○孟之反 魯の大夫、名は側、魯と齊と戦ふや、魯の右師敗れて退く時、孟之反殿して城門に入りし事、左傳、哀公十一年に見ゆ。曰く、「孟之側後、入以爲殿。抽矢策其馬曰、馬不進也」と。註に「善二伐ルコトヲ欲せず」とあり。○伐 功に誇るなり。○奔 敗れ走るなり。○殿 軍後(ガリ)をいふ、軍敗れて退く時は軍後に在りて追撃を防ぎつつ還るを以て功と爲す。兵家の所謂斷後なり。○門 魯の城門なり。○策 鞭うつなり。○後 猶ほ殿の如し「オクレタル」と訓むは非。

【直解】孔子ののたまはく、孟之反は自ら己の功を誇ることなし。齊と魯と戦ひて魯の軍敗走せし時、之反は自ら軍後に居りて殿を勤め、敵の追撃を扞ぎ、味方の衆を衛りつつ還り、將に魯の城門に入らんとせし時、其の騎りたる馬に鞭うちて曰く、我は敢て殿後を爲したるにはあらず、此の馬が疲れて進まざりし爲めなりといひて、少しも己の功に誇らざりしは、勇にして且つ謙なる者といふべき

なりと。

○子曰、不有祝鮀之佞、而有宋朝之美、難乎免於今之世矣。

【譯讀】子曰く、祝鮀の佞有らずして、而して宋朝の美有るは、難いかな今の世に免れんこと。

【章旨】時人の佞を好むの甚だしきを歎きたまへるなり。

【字義】○祝鮀 祝は宗廟の官、ハフリ也。衛の大夫、字は子魚、口才あり、左傳、定公四年に「將會衛子行敬子(衛の大夫)言於靈公曰、會同難、嘖有煩言(忿爭なり)莫之治也」其使祝鮀從之。公曰、善。乃使子魚也。又憲問篇に、孔子が衛靈公の無道にして國を亡ほさざりし所以は、仲叔圉の賓客を治め、祝鮀の宗廟を始め、王孫賈の軍旅を治めたるに由ることを載す(四頁)以て其の人と爲りを知るべきなり。○宋朝 宋の公子、名は朝、美色ありて善く淫す。左傳、定公十四年に「衛侯爲夫人南子召宋朝杜註に「南子ハ宋ノ女ナリ、朝ハ宋ノ公子、舊南子ニ通ズ、宋ニ在リ、之ヲ呼ブ」と。

【直解】衛の靈公、南子といふ美人を愛し、南子の權甚だ重し。而るに國の亡びざる所以は、祝鮀の如き口才ある賢人あるに頼るなり。若し祝鮀の才あらずして、獨り宋朝の美色あるのみならば、靈公はとても今の世に亂と亡との患を免るることは難かるべしと。蓋し春秋の時、忠信日に銷して、風俗月に下り、人人虚禮に馳せて、實行を務めず。列國の聘問、賓主の會同、唯容儀を修め、辭令を巧にすることを是れ務め、口辯以て侵伐の害を禦ぐべし。是れ口才の最も當時に重んぜられし所以にして、孔子、衛の靈公の事を論するに因りて、此の歎を發せられし所以なり。

【考異】○朱子は不の字を下の宋朝之美まで管到せしめて「不有祝鮀之佞、而有宋朝之美」と讀み、衰世は諛を好み色を悦ぶ、故に祝鮀の如き口才と、宋朝の如き美色とあるにあらざれば、今の世に憎惡せらるることを免れんことは、實に至難のことなりと歎じたまへるなりと説きたれども、不の字、下の句まで冒すことは、文法上穩かならざるのみならず、祝鮀は前の【字義】の下に解せしが如く、孔子に稱められたる人なるに、此に至り忽ち斥けて「諛者とするは、理に於てあるべからず。○佞 微に「佞ハ古、口才ヲ稱ス、未ダ姦惡ノ意アラズ」雍也仁、而不佞(九頁)トイフニ觀テ、見ルベキノミ。聖人之ヲ惡ム所以ハ行ノ速バザルヲ以テナリ。後世聖人ノ之ヲ惡ムニ藉リテ、遂ニ以テ姦人ヲ稱シテ之ヲ佞ト謂フ。是レ後世ノ佞ノ字ハ孔子ノ時ト異リ。而ルニ宋儒輩自ラ覺ラザルナリ」と。

○子曰、誰能出不由戶、何莫由斯道也。

【譯讀】子曰く、誰か能く出づるに戸に由らざらん。何ぞ斯の道に由ること莫きや。

【章旨】世人の道を離れて由ることなきを歎きたまひたるなり。

【字義】○戸 室と堂との間の戸口なり。○由 自然に率ひ由るなり。○道 先王の道なり。

【直解】人の室より堂に出づるには、必ず當に戸に由るべし。誰人たりとも、外に出づるに、戸口に由らずして出づるものあらんや。人の道あるは堂室の間に戸口あるが如きなり。道は人に在りて極めて肝要にして、須臾も由らざるべからざる者なり。而るに何故に人は斯の道に由ることなきやと。

深く怪みて歎息したまひしなり。

【餘義】仁齋曰く、「道ハ猶ホ大路ノ如ク然リ。由ルトキハ則チ安ク、由ラザルトキハ則チ危シ。康莊（道路の五達せるを康といひ、六達せるを莊といふ）ノ平カナルニ遵ヘバ、則チ自ラ其ノ勞ヲ忘レ、荆棘（ウバ）ノ艱キヲ蹈メバ、則チ其ノ苦ニ堪ヘズ。苟モ道ノ大路ノ如キヲ知ルトキハ、則チ孰カ肯テ其ノ安キヲ去リテ、其ノ危キニ就ク者アラシヤ。故ニ學ハ知ルヲ以テ先ト爲シ、而シテ行フヲ以テ要ト爲ス」と。

○子曰、質勝文則野、文勝質則史、文質彬彬、然後君子也。

【譯讀】子曰く、質文に勝てば則ち野なり。文質に勝てば則ち史なり。文質彬彬として、然る後に君子なり。

【章旨】文と質との調和を保ちて、君子の徳を成すべきことを語りたまひたるなり。

【字義】○質 「スナホ」にして「カザリ」なき義、忠信誠實の内に在るをいふ。○勝 猶ほ過ぐといふが如し。○文 威儀文采の外に在るをいふ。○野 野人なり、俗にいふ田舎者といふに同じ。鄙陋なるをいふ。○史 史官なり、文書を掌り多聞にして喪祭賓客等の事に習へども、或は誠實の足らざる者あるなり。一説に、史は史官の史にあらずして祝史の史なりと。○彬彬 猶ほ班班といふが如く、文と質との相適均（調和の宜しきを得る義）する貌なり。

【直解】凡そ人忠信誠實の本質が其の文即ち威儀文采に勝つときは、是れ野人の鄙陋粗略にして少しの

飾もなく見るに堪へざるなり。又其の威儀文采が勝ちて忠信誠實の本質に過ぐるときは、是れ史官の多聞にして禮にならへども、或は誠實足らざる所あるに似たり。されば文質の二つの者は孰れが過ぐるも宜しからず、必ず内の質と外の文との二つの者が、彬彬として相雜りて適均（ヨクツ）して始めて成徳の君子と稱すべきなりと。禮記、禮器篇に「君子曰、甘受（モハ）白受（シロ）采（イロ）忠信之人、可以學（マ）禮」と、此章の義と互に相發すべし。

○子曰、人之生也直、罔之生也、幸而免。

【譯讀】子曰く、人の生くるや直し。之を罔ひて生くるや、幸にして免るるなり。

【章旨】人當に直を以て其の生の理を全くすべきことを示して、深く不直の人を警めたまひたるなり。

【字義】○生 人の生きて世に在るをいふ。○直 正直なり。○罔 誣罔（タスル）なり、正直の道を誣罔して邪曲なるなり。

【直解】人の此世に生存して、満足に一生を終る所以のものは、正直にして些の邪曲なきを以てなり。彼の正直の道を誣罔して邪曲姦惡なる者は、當に禍害を受けて死すべき筈なり。而るに死せずして世に生存する者は、僥倖（イハヒレ）にして禍害を免るる者のみと。

【考異】韓愈曰く、「直ハ常ニ徳ニ爲ルベシ。言フ心ハ人ノ生ハ天地ノ大徳ヲ稟ク、罔ハ無ナリ、若シ其ノ徳ナクシテ咎ニ免ルル者ハ渺シ。古書ニ徳ヲ惠ニ作ル」と。徂徠も亦此説に従へり。一解と爲して存すべし。

【餘義】孟子の所謂四端即ち惻隱・羞惡・辭讓・是非の心(直解)は總て本心より自然に發出し來るものにして、少しも矯揉(ルキヤ)する所なきなり。是に由りて之を觀れば、人の性の直なること知るべし。此章は即ち孟子性善説の本づく所なり。蘇軾曰く「天物ハ本直シ、其ノ曲レルハ必ズ故アリ。木ノ曲レルヤ、或ハ之ヲ抑フルアリ、水ノ曲レルヤ、或ハ之ヲ碍ルアリ。水之ヲ碍ラズ、木之ヲ抑ヘザレバ、未ダ嘗テ直カラザルハアラズ。物皆然リ。況ヤ人ニ於テヤ」と。

○子曰、知之者、不如好之者、好之者、不如樂之者。

【譯讀】子曰く、之を知る者は、之を好む者に如かず。之を好む者は、之を樂む者に如かず。

【章旨】學者道に進むの深淺を明かにしたまひたるなり。

【字義】○知 道を明かにして求むべきことを知るなり。○之 道を指していふ。○好 知る所の道に好き好み、之を求めて未だ得ざるなり。○樂 其の好む所の道を身に得て徳となり、欣慕愛樂して已まざるなり。

【直解】孔子のたまはく、學者の道に進むに深淺の差凡そ三等あり。道の當に學びて求むべきことを知る者は、之を好むこと篤くして、誠心を以て之を得んと勉むる者には如かず。されども之を好む者は、已に其の道を求め得て己の徳となり、深く中心より欣慕愛樂する者には如かざるなりと。樂之者とは顔回の如き人をいふなり。

【餘義】張敬夫曰く「之ヲ五穀ニ譬フレバ、知ル者ハ其ノ食フベキヲ知ル者ナリ。好ム者ハ食ヒテ之ヲ嗜ム者ナリ。樂ム者ハ之ヲ嗜ミテ飽ク者ナリ。知リテ好ムコト能ハザレバ、則チ之ヲ知ルコト未ダ至ラザルナリ。之ヲ好ミテ未ダ樂ムニ及バザレバ、則チ是レ之ヲ好ムコト未ダ至ラザルナリ。此レ古ノ學者ノ自ラ強メテ息マザル所以ノ者カ」と。

○子曰、中人以上、可以語上也。中人以下、不可以語上也。

【譯讀】子曰く、中人以上は、以て上を語ぐ可し。中人以下は、以て上を語ぐ可からざるなり。

【章旨】教育を施すの法は、人の材質の高下に隨ふべきことを語りたまひたるなり。

【字義】○中人 中等の人なり。○語 告なり、誨なり。○上 高遠の教をいふ、帆船萬里曰く「上トハ天道・知命ノ屬ヲ謂フ」と。王肅曰く「上トハ上知(智に同じ)ノ知ル所ナリ、兩(また)中人ヲ舉グルハ、其ノ上ニスベク、下ニスベキヲ以テナリ」と。

【直解】人は才不才ありて學力も同じからざれば、之を教ふるには、其の人品の高下に隨ふべきなり。さて中人以上の者は材質もすぐれ學力もある故に、上即ち高遠の教を告けても能く會得すれば、上を告ぐべきなり。中人以下は材も劣り學も薄きが故に、高遠の教を告ぐるも、會得する能はず。此の如く教を施すに、人品の高下に隨ひて之に告ぐれば、其の言入り易くして、等を躡ゆるの弊なかるべしと。

【餘義】季氏篇に「孔子曰、生而知之者、上也。學而知之者、次也。困而學之者、又其次也。困而不學、民斯爲下矣(五八)」と。此章と併せて之を觀れば、人に三品の質ある、以て見るべし。然れども三品豈一定して移らざるの理あらんや。人若し志を奮ひ勉勵すれば、下學も亦以て上達すべし。

之に反して因循怠惰なれば、中人も亦下愚と等しきに至るべし。總て人の聖たり愚たるは、自ら奮勵すると否とに在るのみ。學者其れ旃を勉めよ。

○樊遲問、知子曰、務民之義、敬鬼神而遠之、可謂知矣。問、仁子曰、仁者先難而後獲、可謂仁矣。

【譯讀】樊遲知を問ふ。子曰く、民の義を務め、鬼神を敬して之に遠ざかる。知と謂ふ可し。仁を問ふ。子曰く、仁者は難きを先にして獲るを後にす。仁と謂ふ可し。

【章旨】孔子、樊遲の知仁を問ふに因りて、其工夫を用ふる法を説きて、其の性蔽を救ひたまひしなり。

【字義】○民之義 民は人に同じ、鬼神に對していふ、下民と解すべからず。詩經、大雅烝民篇に「民之秉彝、夫婦、婦聽、長惠、幼順、君仁、臣忠、士者謂之人義」の人義は即ち此「民之義」に同じ。○敬 侮慢せざるなり。○遠 褻瀆(ナレケ)せざるを謂ふ。○難 行の爲し易からざる勞苦の事をいふ。

○獲 得なり、己に得る所の效をいふ。「後獲」とは、其の報效を計らざるなり。後の字は顔淵篇の「先事後得」(九頁)易經、繫辭傳の「敬其事、後其食」の後と同じ。

【直解】樊遲が如何なるをこれ知ありとするかと問ふ。孔子答へて曰く、凡そ人たる者は、人として爲すべき道を知りて、十分に務め行ふを要す。即ち父の慈、子の孝、兄の友、弟の悌、夫の義、婦の順、君の仁、臣の忠なるが如きは、是れ人たる者の宜しく行ふべき道たるを知りて、務めて之を行ひ、又鬼神の

理は、幽冥にして測り知るべからざれば、徒に惑ひて禍を求め禍を免れんと禱るが如きことをせず、唯能く敬ひて慢らず、能く之に遠かりて瀆さざるやうにすべし。かくするときは是非の心明かにして能く道理を分別する知者と謂ふべき也。又如何なるを仁者といふべきかと問ふ。孔子の曰く仁者は能く人を利することを志す。故に凡そ事の勞苦して爲し難き所は、必ず先に務めて少しも緩くせず、其の報效を計較(ハカリケ)することを後にするときは、心に些の私欲なくして仁を行ふ所以なりと。蓋し樊遲は功利を計較し、鬼神を迷信するの失あるが故に、夫子の斯く戒めたまひたるならん。朱子曰く、此れ必ず樊遲ノ失ニ因リテ之ヲ告グ」と。之を得たり。他日樊遲仁を問ふ。子曰、居處恭、執事敬、與人忠、雖之夷狄不可棄(四頁)と。顔淵篇に「樊遲問、仁、子曰、愛人。問、知、子曰、知人」(四頁)と。樊遲が仁、知を問ふに、夫子の答が隨時各異るは他なし、其の人の學識の長進するに隨ひて其の答も愈高尚となるは、活教育たる所以にして、即ち亦對症與藥の方なり。

【餘義】程子曰く、「人多ク鬼神ヲ信ズルハ惑ヘルナリ。而シテ信ゼザル者ハ、又敬スルコト能ハズ。能ク敬シ能ク之ニ遠ザカル、知ト謂フベキナリ」と。蓋し人の鬼神を信する者は、多くは禍福に惑ひて之に陥ひ瀆す。其の信ぜざるものは、又之を慢易(マナ)して敬する能はず。皆是非の心明かならずして不知なるなり。若し能く之を敬して慢易せず、之に遠ざかりて瀆せざれば、則ち是非の心明かにして知と謂ふべきなり。又曰く「難キコトヲ先ニスルハ克己ナリ。難キ所ヲ以テ先ト爲シテ、獲ル所ヲ計ラザルハ仁ナリ」と。呂氏曰く「當ニ務ムベキヲ急ト爲シテ、知リ難キ所ヲ求メズ。知ル所ヲ力行シテ、爲シ難キ所ヲ憚ラズ」と。

○子曰、知者樂水、仁者樂山。知者動、仁者靜。知者樂、仁者壽。

【譯讀】子曰く、知者は水を樂み、仁者は山を樂む。知者は動き、仁者は靜かなり。知者は樂み、仁者は壽し。

【章旨】知者と仁者との性格の異同を述べたまひたるなり。

【字義】○知者 知は智と同じ、知者は事物の理に通達して心の虛明なる人をいふ。○樂 三の樂字、皆音「ラク」。「タノシム」と訓むべし。朱子は樂水樂山の兩樂字は去聲に讀み、五教の反とし、喜好（ム）の義に解し、下の知者樂の樂を音洛と註したれども、必ずしも區別するを要せず。集註に「知者ハ事理ニ達シテ、周流シテ滯ルコトナキハ水ニ似タルアリ。故ニ水ヲ樂ム。仁者ハ義理ニ安ンジテ、厚重ニシテ遷ラザルハ、山ニ似タルアリ。故ニ山ヲ樂ム。動靜ハ體（體段）ヲ以テ言ヒ、樂壽ハ效（功效）ヲ以テ言フナリ」と。

【直解】知者は事物の道理に通達して滯る所なく、其の才知を運らして、國家を治めんとす。されば其の性格は水の流れて已むことなきに似たり。故を以て水を樂むなり。又仁者は義理に安んじ、厚重（オモクシ）にして外物の爲めに移されず、自然を樂み、天真を全くせんとなす。されば其の性格は、安固にして動かす、萬物の自ら産する山に似たるあり。故に山を樂むなり。又知者は才知を以て自ら進むが故に、常に活動し、仁者は義理に安んじて私欲の爲めに心を擾されざるが故に、常に安靜なり。又知者の心は虛明にして事物の爲めに苦め累はさるることなく、意の如くに動きて括れざる

が故に、其の心常に歡び樂む。仁者の心は純一にして私欲の爲めに擾されず、從容としてよく天真を全くするが故に、多くは命長き兆あるなりと。

【餘義】仁智の道は一なり。仁者智者各至る所あり。此章姑く相離して各項と爲して看るなり。蓋し孔子仁知の情地の妙を言はんと欲したまへども得ず、姑く相似て心に契合する所ある水と山とを借りて之を示したまへるなり。必ずしも知者は水、仁者は山と限るに非ず。又必ずしも山水を得て樂むといふにも非ず。仁者知者の樂む所は、亦自ら其の仁智を樂むのみ。但其の情趣の互に相似て同じき者あり。故に山水を借りて之を形容したまへるのみ。即ち智は周流して滯らざるの意趣多し。故に動と曰ふ。仁は厚重にして遷らざるの意趣多し。故に靜と曰ふ。想ふに知者の心は常に欣悅して滯らず、仁者の心は常に安重にして靜かなり。故に其の受用する所、一は則ち歡樂し、一は則ち壽兆多しと爲す。推して之を言へば、仁知未だ嘗て同じからざるはあらずと雖も、其の成徳の極致は各至る所あるなり。

○子曰、齊一變至於魯、魯一變至於道。

【譯讀】子曰く、齊一變せば魯に至らん。魯一變せば道に至らん。

【章旨】齊と魯との優劣を評せられたるなり。

【字義】○變 政治を變改する義。○道 先王の道なり。

【直解】孔子のたまはく、齊は桓公の霸たりし國なれば、其の風俗皆國を富まし兵を強くすることの

みを謀り、功利に急にして誇詐(チホコライ)を好み、又禮教信義を修むる者なし。又魯は周公の治められし國なれば、其の風俗今も猶ほ禮教を重んじ信義を崇びて先王の遺風の存する者あり。二國の政俗に優劣あること此の如くなれば、若し齊の國にして然るべき人を得て、今の政俗を改變したらんには、漸く進みて今の魯の地位に至ることを得べし。又魯にして若し其の人を得て廢墜せる政教を修め興して、改變したらんには、遂に復先王の道に至ることを得べきなりと。

【餘義】漢書、地理志に、齊魯の風俗を論じて曰く、太公ノ齊ヲ治ムル、道術ヲ修メ、賢智ヲ尊ビ、有功ヲ賞ス。故ニ其ノ士多ク經術ヲ好ミ、功名ニ矜リ、舒緩闊達ニシテ智足ル。其ノ失ハ夸奢朋黨、言、行ト繆リ、虚詐不情ナリ。魯ハ周公ノ國ナリ。聖人ノ教化アリ。故ニ孔子曰ク「齊一變至三於魯、魯一變至三於道」ト。言フハ正ニ近キナリ。洙泗ノ水ニ漸シ、其ノ民ノ涉渡スル、幼者ハ老ヲ扶ケテ其ノ任(負戴)ニ代ル。俗既に益、薄ク、長者自ラ安ンゼズ、幼少ト相讓ル。魯ノ道衰ヘ斷斷如(辯)爭フ貌)タリ。孔子王道ノ將ニ廢セントスルヲ閔ミ、廻チ六經ヲ修メ、以テ唐虞三代ノ道ヲ述ブ(中略)是ヲ以テ其民學ヲ好ミ、禮義ヲ尚ビ、廉恥ヲ重ンズト。二國風俗の異なる此の如し。亦以て其道に至るの難易を知るべし。仁齊曰く、「強ノ弱ニ勝ルハ、人皆之ヲ知ル。而シテ禮樂ノ政刑ニ優ルコトハ、則チ人未ダ之ヲ知ラザルナリ。斯ノ時ニ當リテ、齊ハ強ク魯ハ弱シ。孰カ以テ齊ノ魯ニ勝ルト爲サザランヤ。然レドモ聖人ヨリシテ之ヲ觀レバ、魯ハ弱シト雖モ、尙ホ能ク先王ノ法ヲ守ル。齊ノ能ク及ブ所ニアラザルナリ。況ヤ強ハ暴多クシテ、而シテ弱ハ徳多シ。強キ者ハ折レ易クシテ、弱キ者ハ久シキニ堪フルヤ。齊ハ簡公ニ至リテ田氏之ニ代ル。魯ハ哀亂スト雖モ、猶ホ能ク其ノ國ヲ保ツ。是レ其ノ明效

ナリ。惟仁能ク強ヲ持シ、惟智能ク弱ヲ救フ。若シ仁以テ治ヲ爲シ、智以テ之ヲ御セバ、田氏モ齊ヲ篡フコト能ハズ、魯ハ必ズ政ヲ天下ニ爲サン。惜イカナ」と。

○子曰、觚不觚、觚哉、觚哉。

【譯讀】子曰く、觚(こ)ならず。觚ならんや、觚ならんや。

【章旨】觚の古制を失ふに言寄せて、春秋の時、名分紊れて名實相副はざる者多きを歎きたまひしなり。

【字義】觚、酒器の稜ある者なり。馬融曰く「觚ハ禮器、一升ヲ爵トイヒ、二升(我が一合七勺餘)ヲ觚トイフ」と。古は獻するに爵を以てし、酬ゆるに觚を以てす。觚不レ觚、當時其の制作を失ひて稜を成さざるをいふ。上の觚は其の器を指し、下の觚は其の制作を謂ふ。

【直解】酒杯の觚といふ者は、稜あるによりて觚と名づけたる者なるに、今は古の制作を失ひて稜なければ、名こそ觚なれ、其實は觚といふべからず。されば如何ぞ觚といふべけんや、如何ぞ觚といふべけんやと。重ねてのたまひしは深く歎息せられたるなり。程子曰く「觚ニシテ其ノ形制ヲ失ヘバ、則チ觚ニアラザルナリ。一器ヲ擧ゲテ天下ノ物皆然ラザルハ莫シ。故ニ君ニシテ其ノ君ノ道ヲ失ヘバ、則チ君タラズト爲シ、臣ニシテ其ノ臣ノ職ヲ失ヘバ、則チ虚位(徒に其の位のみありて、其の實なし、是を虚位と謂ふ)タリ」と。

【考異】觚、後世は木簡を觚と謂ふ。木を削りて書し、以て簡牘と爲すべし。陸機の文賦に「或操觚以率爾、或含毫以遼然」とある是れなり。されども此章の觚は、酒器にて、説文に「鄉飲酒之爵也」とある

をいふ。徂徠曰く、「木簡ヲ瓢ト爲スハ、秦漢以後ニ起ル、揚升庵之ヲ辨ズル（升庵文集四書類）是ナリ」と。

【餘義】孔子が齊の景公の政を問はれたるに對へて「君君、臣臣、父父、子子（四〇）とのたまひ、子路の衛君、夫子を待ちて政を爲さんとすれば、夫子は將に何事を先にせらるるやと問ひたるに答へて「必也正名乎（四一）とのたまひたるは、其の名と實との相副はざるを正す所以にして、此章の義と互に相發するなり。

○宰我问曰、仁者雖告之曰、非有仁焉、其從之也。子曰、何爲其然也。君子可逝也、不可陷也、可欺也、不可罔也。

【譯讀】宰我问ひて曰く、仁者は之に告げて井に仁有りと曰ふと雖も、其れ之に從はんやと。子曰く、何爲れぞ其れ然らん。君子は逝かしむ可し、陷る可からざるなり。欺く可し、罔ふ可からざるなり。

【章旨】宰我、孔子の民を濟ふに急にして、禍害に陥りたまはんことを慮り、假設の言を以て之を諷したれば、孔子之に答へて、仁者は人を愛するも、禍害に陥るの理なきことを告げたまひしなり。

【字義】○仁者 暗に孔子を指す。○有仁 劉勉之（字は致中、宋人）曰く「有仁ノ仁ハ當ニ人ニ作ルベシ」と。古は仁と人とは通用す。別に人に作らざるも、人字と做して看れば可なり。○從之也 之は井の中の人を指す。從は隨從なり。井に就きて之を救はんとするなり。也は疑の詞なり。○君子 仁者なり。○逝 往なり、井戸の側に往きて救はしむるをいふ。逝の字の上に使の字を添へて看るべ

し。○陷 仁者を詐り誣ひて井の中に落し入るるをいふ。○欺 道理のある事を以て之を誑すをいふ。○罔 昧なり、道理の無き事を以て、人の目を味まし誣ひるをいふ。

【直解】宰我は、孔子の民を濟ふに急なること、焚を救ひ溺を拯ふが如くなれば、其の身の禍難に陥りたまはんことを氣遣ひ、假設の言を爲して問ひて曰く、仁者に告ぐるに、井の中に落ちたる人ありと言はば、仁者は直ちに井に飛び込みて之を救はんか如何にと。孔子答へてのたまはく、仁者は誠に人を濟ふに切にして、其の身を私せずと雖も、なんすれぞ此の如くに愚ならんや。但かかる場合には君子即ち仁者をして、往きて之を救はん計をば爲さしむべし。しかし人を救ふことは、井上に在りてこそ其の計を運らすべけれ、己も共に井中に入らば却りて之を救ふことは得ざるべし。されば井中に陥らしむることは出来ざるなり。すべて君子は道理に明かなる者なれば、道理のある所を以てせば、欺くことも得らるれども、道理のなき所を以て誣ひくりますことは得られざるものなれば、仁を行ひても、決して禍害を招くことは無きものなりと。

【餘義】宰我の問は、弟子が師を愛するの至情に出づるなり。而るに朱註に「宰我道ヲ信ズルコト篤カラズシテ、仁ヲ爲スノ害ニ陥ランコトヲ愛フ。故ニ此ノ問アリ」といへるは、朱子、宰我に短喪（六二）晝寢（六三）の失あるに因りて、之を蔑視するに出づ。孟子曰く「宰我子貢有若ハ智以テ聖人ヲ知ルニ足レリ（九五）と。豈其の問の下劣なる、朱註に言ふ所の如く甚だしきに至らんや。

○子曰、君子博學於文、約之以禮、亦可以弗畔矣夫。

【譯讀】子曰く、君子は博く文を學び、之を約するに禮を以てせば、亦以て畔かざる可きか。

【章旨】君子の學は博きを貴ぶ、然れども其の要を得て守なければ、散漫して統紀なし、故に其の身を約束するに禮を以てせんことを説きたまひたるなり。

【字義】○文 詩書六經の文なり。○約 「ツヅマヤカ」要なり、約束なり。上の博に對していふ。○之 學ぶ所を指していふ。○禮 天理の節文にして即ち道の規矩なり。○畔 叛と同じ「佛畔以中牟」畔(八頁)の畔に同じ。背なり、道に背くなり。

【直解】君子の學に於ける、博からんことを欲す。故に博く詩書六經の文を學び、多く前言往行を識らんことを要す。然れども徒に博を極むるのみにて、其の要を得ざれば、散漫にして統紀なく、道に背くに至るべし。故に其の博く學びたる所を約束するに、道の規矩たる禮を以てし、其の要を得て實踐躬行すれば、亦以て道に背かざることを得べきなりと。此章は博文約禮の章として、論語に二ヶ所、孟子と中庸とに各一ヶ所出で、孔門に於ける教育法の大方針として名高き訓言なりとす。

【考異】○君子 陸徳明曰く「一本ニ君子ノ字ナシ」と(四頁)にも同語ありて君子の字なし。○禮 息軒曰く「禮ハ時王ノ禮ナリ。先王ノ道ハ、百世之ヲ同クス。禮ハ則チ世ニ從ヒテ沿革ス。故ニ君子廣ク先王ノ道ヲ學ビ、以テ其ノ徳ヲ蓄ヘ、而シテ其ノ行フ所ハ、則チ一ニ時王ノ禮ト合スル者ニ從フ。是レ博文約禮ノ義ナリ」と。然れども時王の禮は必ずしも行爲の標準たる者にあらざれば、從ふべからず。

○子見南子、子路不説。夫子矢之曰、予所否者、天厭之、天厭之。

【譯讀】子南子を見る、子路説ばず。夫子之に矢ひて曰く、予の否なる所の者は、天之を厭たん、天之を厭たん。

【章旨】聖人の行ふ所は必ず天に愧ぢざるを明かにするなり。

【字義】○南子 衛の靈公の夫人、淫行あり。孔子の衛に至るや、南子乃ち見んことを請ふ、孔子辭謝したまへども聽かず、已むことを得ずして而會したまふ。子路、孔子のかかる淫行ある不正の人を見たまひしを以て辱と爲して悦ばず。孔子乃ち子路に誓ひてのたまはく、予の爲す所にして萬一禮に合はず、道に由らざる爲すまじき事ありたらんには、罪を天より得て、天は必ず吾を棄て絶たん、決して憂慮すること勿かれと。之を重ねて言ひたまひしは、子路の心を安んぜしむる所以なり。

○厭 棄て絶つなり。

【直解】孔子衛に至りたまふや、靈公の夫人南子、孔子を見んと請ふ。孔子辭謝したまへども聽かず、已むことを得ずして而會したまふ。子路、孔子のかかる淫行ある不正の人を見たまひしを以て辱と爲して悦ばず。孔子乃ち子路に誓ひてのたまはく、予の爲す所にして萬一禮に合はず、道に由らざる爲すまじき事ありたらんには、罪を天より得て、天は必ず吾を棄て絶たん、決して憂慮すること勿かれと。之を重ねて言ひたまひしは、子路の心を安んぜしむる所以なり。

【餘義】此章の義、今考ふべからず。孔安國よりして既に之を疑へり。而るに朱註に「古者其ノ國ニ仕フレバ、其ノ小君(夫人)ヲ見ルノ禮アリ」といへるも、其の何の書に出づるかを示さず。姑く疑を闕きて可なり。

○子曰、中庸之爲徳也、其至矣乎。民鮮久矣。

【譯讀】子曰く、中庸の徳たるや、其れ至れるか。民鮮きこと久し。

【章旨】中庸の至徳を贊美して、世教の衰へたるを歎き、併せて此徳を世人に望みたまへるなり。

【字義】○中庸 中は過不及なく中正を得るの謂、庸は平常なり。何時までも變ることなきの謂。○至 至極なり。至りて善くして此上もなき義。○矣乎 贊歎の辭、易經、繫辭傳に「易其至矣乎」の矣乎に同じ。○鮮 人數の少きなり。○久 時代の久遠なるなり。

【直解】孔子のたまはく、過ぐることもなく、又及ばざることなく、平常にして終始變ることなきの徳は、至善にして以て加ふることなきなり。而るに世衰へ道微にして教化興らず。賢者は之に過ぎ、不肖者は及ばず。故に此の至徳を能くするもの少きこと、古より今に至るまで已に久しきは、歎かはしきことならずやと。

【考異】此章の語は中庸(六八頁)にも出で、鮮の下に能の字あり。此章の何晏註に「世亂、先生之道廢、民鮮能行此道久矣」とあるに據れば漢魏間の本には鮮久の間に能の字ありたるが如く思はる。能の字ある方、意味明かなり。

○子貢曰、如有博施於民而能濟衆、何如、可謂仁乎。子曰、何事於仁。必也聖乎。堯舜其猶病諸。夫仁者己欲立而立人、己欲達而達人。能近取譬、可謂仁之方也。已。

【譯讀】子貢曰く、如し博く民に施して、能く衆を濟ふ有らば、何如、仁と謂ふ可きかと。子曰く、

何ぞ仁を事とせん。必ずや聖か。堯舜も其れ猶ほ諸を病めり。夫れ仁者は己立たと欲して人を立て、己達せんと欲して人を達す。能く近く取り譬ふるを、仁の方と謂ふ可きのみと。

【章旨】孔子、子貢の問に因りて仁を求むるの方を教へたまひしなり。

【字義】○如 若なり。○博 廣なり、徧なり、手廣く行きわたる義。○濟 救なり。○仁 理を以て言ふ、一事に就きても仁なり。人道を盡す者も亦仁なり。○何事於仁 何ぞ仁に於て之を言ふを事とせんといふが如し。○聖 大徳ありて至極の地位に到れる稱。○病 心に足らざるを憂ふる也。履軒曰く、堯舜ノ治至レリ、然レドモ窮郷僻邑、一饑寒ノ人ナキヲ保スル能ハザル也。是レ堯舜ノ病ム所也。○立 住著(トド)して動かざる義、内外精粗を兼ねて言ふ。徳を修め得るが如きも、徳の成立する也。一事を做し得るが如きも亦成立する也。○達 達せしむる也、亦内外精粗を兼ねて言ふ。一心の達せしむるにも、一事の達せしむるにもいふ。○近取譬 近く己の身に取りて己が欲する所を他人の身に譬へて、人の欲する所も亦此の如くならん事を知るをいふ。譬は喩なり。○方 道なり。【直解】子貢、孔子の常に容易に仁を人に許したまはざるを視て以爲へらく、滅多にはあらざるべきも、若しもここに博く人民に恵を施し、又衆人を患難の中より救ふ者ありしならば何如に、これは仁者といふことを得べきかと。孔子之に答へてかかる立派なる行を爲す人あらば、何ぞ仁に於て之を言ふことを事とせんや。必ずや人道を行ひ盡したる聖人の徳あり、尊きこと天子と爲りて、然る後に之を能くせんか。この博施濟衆の事たる吾人の尊崇せる堯舜の如き大聖人さへも、尙ほ施濟の十分に周からざるを憂ひたまへり。此の如く事功の上に就きて仁を求むれば、愈得難くして愈相たが

ふに至る。抑も仁者は人を視ること猶ほ己の如く、人と我との間なし。故に何事によらず、己の成
立せんと欲する所あれば、人をも成せしめ、己の達せんと欲する所あれば、人をも達せしむるやうに爲すなり。仁者の心は公明にして、人と我との間なきこと此の如し。故に今仁を求め
んとならば、能く近く我が身に取、己の欲する所を以て、之を他人に譬へて、人の欲する所も亦此の
如くなることを知り、然る後、己が欲する所を推して以て人に及ぼすべし。是れ即ち恕の事にして仁
を求むるの道なり。人能く是に於て勉め行はば、人欲の私に勝ち、天理の公なるものを全くし得て、
仁者の域に到るべきなりと。

【考異】濟衆 卷子本卓本。衆の字の下に者の字あり。従ふべし。

【餘義】呂氏曰く、「子貢、仁ニ志アリ、徒ニ高遠ヲ事トシテ、未ダ其ノ方ヲ知ラズ。孔子教フルニ己ニ於
テ之ヲ取ルコトヲ以テス。庶、ハクハ、近クシテ入ルベシ。是レ乃チ仁ヲ爲スノ方ニシテ、博施濟衆
ト雖モ、亦此ニ由リテ進ムベキナリ」と。仁齋曰く、「中庸ニ曰ク『誠者非ニ自成レ己而已也。所以成レ
レ物也。成レ己仁也。成レ物知也』」(中庸)ト「夫仁者己欲レ立而立人、己欲レ達而達人」若シ己ノ既ニ
立チ既ニ達スルヲ俟チ、而シテ後ニ人ヲ立テ人ヲ達セント欲スルトキハ、則チ卒ニ人ヲ立テ人ヲ達ス
ルノ日ナシ。何トナレバ己ノ情願未ダ達ニ達ゲ易カラズシテ、而シテ人ニ施スノ方、力ノ及ブ所ニ隨
フハ、己チ舍テテ人ニ徇フニ非ズヤ。子貢徒ニ仁ノ大ナルヲ見テ、其ノ實ヲ識ラズ。故ニ上ニ在ル聖人
ノ事ヲ以テ之ニ當テテ而シテ己ニ在ル今日ノ切ナル所ヲ察セズ。所以ニ夫子能ク近ク取リテ譬フル
チ以テ之ニ告ゲ、仁ヲ求ムルノ方、明カニ且ツ盡セリト謂フベシト。

述 而 第 七

此篇は多く孔子が己を謙遜し、人を誨へ導きたまへる辭、及び其の容貌行事の實を記す。凡
て三十七章。邢昺曰く「此篇皆孔子ノ志行ヲ明カニスル也。前篇ニ賢人君子及ビ仁者ノ德行
ヲ論ジ、徳ヲ成ス漸アルヲ以テ、故ニ聖人ヲ以テ之ニ次グ」と。

○子曰、述而不作、信而好古、竊比於我老彭。

【譯讀】子曰く、述べて作らず。信じて古を好む。竊に我が老彭に比す。

【章旨】孔子自ら其の言を立つるの本あることを敘べたまひしなり。

【字義】○述 舊ある事を推衍(オシヒ)して後に傳ふる義。○作 古、無かりし事を新に創作する義。禮
記、樂記篇に「作者之謂レ聖、述者之謂レ明」と。○竊比 「ソツト、クラベル」之を尊びていふ辭。○我
之を親みていふ辭。○老彭 包咸曰く「殷ノ賢大夫、好ミテ古事ヲ述ブ」と。これ大戴禮、虞戴德篇の文
に據る也。燃犀錄に「老彭姓ハ錢、名ハ鏗、莊子ノ所謂彭祖ナリ。壽七百六十七歳、故ニ老彭トイフ」と。
【直解】孔子ののたまはく、我は詩書の文を刪り、禮樂を定め、周易を贊し、春秋を修めたれども、皆
先王の已に言はれし事、行はれし事の舊事舊聞を傳へ述べしのみにて、未だ嘗て我より妄に創め作
りし所あらず。我は只篤く古の道信じて之を好み、樂みて倦まざる者なり。昔、殷の賢人老彭は、
古を信じて傳述せし人なるが、我が徳は老彭に及ばざれども、其の古を信じて傳述する所は、心竊

に之に引き比べ居るなりと、謙退せられし辭なり。蓋し創めて制作する事は、聖人にあらざれば能はず。傳述は賢者も及ぶべし。而るに孔子只敢て作者の聖に當りたまはざるのみならず、傳述の賢にも顯然(アラハナ)とは比したまはずして、竊に比すと謙遜したまふ。其の徳愈盛んにして心愈下り、自ら其の辭の謙なることを覺えたまはざるなり。

【考異】大永本に「比我於老彭」に作れり。包咸の註に「老彭殷賢大夫、好述古事。我若老彭、祖述之耳」とあるに照合す。文中子、魏相篇に之を擬して「問、則對、不問則述。竊比我於仲舒(業仲舒なり)」とあり。亦以て隋唐以前の本には我の字、比於二字の間に在りし一證とすべし。

【餘義】中庸(第三)に「仲尼祖述堯舜、憲章文武(八二頁)」とあるは、此章の「述」の義にして「雖有(其徳、苟無其位、亦不敢作禮樂)」とあるは、即ち「不作」の義なり。孔子の聖徳を以て創作したまふ所なきは、其の位なきが故なりと雖も、是の時に當りて前聖の道略備はればなり。只孔子獨り之を知りたまふ、是れ「信而好古」の義なり。朱子曰く「夫子蓋シ羣聖ノ大成ヲ集メテ、而シテ之ヲ折衷シタマフ。其ノ事ハ述ナリト雖モ、功ハ則チ作ニ倍ス、此レ又知ラザル可カラザルナリ」と。

○子曰、默而識之、學而不厭、誨人不倦、何有於我哉。

【譯讀】子曰く、黙して之を識し、學びて厭はず、人を誨へて倦まず。何ぞ我に有らんや。

【章旨】孔子が謙を以て自ら處したまふの言を記するなり。

【字義】○默 言はざるなり。○識 音「シ」心に記し得て、忘れざるなり。一説に辨識するなりと。亦通

す。○誨 教なり。○何有 於我 哉 以上の三事を除く外は、何ぞ我に有らんやとの義なり。

【直解】孔子のたまはく、己の得る所を口に言ひ出ださずして只心に存して忘れず。以て其の徳を蓄へんとし、又學を好みて厭くことなく、人を教ふるに親切にして倦み忘らず。我の人と爲りは只此の如きのみ。此の外に何等の道德か何ぞ能く我に在らんやと。蓋し時人、孔子を推尊して、道德高深にして窺測すべからずと爲す。故に孔子自ら謙してかくは告げたまひたるなり。

【考異】朱註に「此三者ハ已ニ聖人ノ極至ニ非ザルニ、猶ホ敢テ當ラザルハ謙シテ又謙シタマフノ辭ナリ」とあれども誤れり。孔子が「學而不厭。誨人而不倦」を以て自ら己の任とせられたること、之を論語中に求むるに「好古敏以求之者也(三三頁)」不如丘之好學也(〇六頁)「我叩其兩端而竭焉(四八頁)」「吾無隱乎爾(二二頁)」とあるの數語の如き以て徵すべし。又孟子、公孫丑上篇にも「孔子曰、聖則吾不能。我學不厭。而教不倦也(八七頁)」とあるにあらずや。而るに此章獨り謙して自ら居らずと爲すは、非なり。

【餘義】「默而識之」とは學者の最も肝要なる工夫にして、此にあらざれば其の徳を蓄ふること能はざるなり。而るに世間には往往聞く所あれば、直ちに之を言説せんと欲する者あり、荀子の所謂「口耳ノ學(勸學篇)」にして、道聽塗説(六頁)の徒のみ、其の徳を損する事少しとせず。豈猛省せざるべけんや。

○子曰、德之不脩、學之不講、聞義不能徙、不善不能改、是吾憂也。

【譯讀】子曰く、徳を之れ脩めず、學を之れ講ぜず、義を聞きて従る能はざる、不善の改むる能はざるは、是れ吾が憂なりと。

【章旨】聖人常に憂動して己みたまはざるの意を語りたまひしなり。

【字義】○脩 修に通ず、修治するを謂ふ。○講 講習(ナラ)するを謂ふ。

【直解】孔子のたまはく、己の性の徳たる孝弟忠信は之を修治して、而る後に成る者なり。又學は日に其の義理を講習して、而る後に明かなる者なり。又義を聞きては必ず速に従りて之に従へば、善日に積もりて長すべく、不善あれば必ず速に改めて之を去れば、惡日に消すべし。而るに若し徳を修めざれば、徳日に卑しく、學を講ぜざれば、義理日に蔽はれ、義を聞きて従ること能はざれば、善日に損し、不善を改むること能はざれば、惡日に長じて、遂に高明なる人と爲ること難かるべし。是れ吾が心に深く憂ふる所なりと。

【考異】孔安國は「夫子常ニ此四者ヲ以テ憂ト爲ス」といひ、皇侃は「孔子恆ニ世人ノ上ノ四事ヲ爲サザルヲ憂フ」といへり。孔子の自ら憂ひたまふ事は、即ち人に對しても亦憂ひたまふ所以にして、兩説何れも通ずれども、此篇載する所は謙虛の辭多ければ、孔註の夫子の自ら以て憂と爲したまふの説を優と爲す。此四者を完全に行はんことは、聖人と雖も猶ほ且つ憂ひたまふ。況や衆人をや。

○子之燕居申申如也。天天如也。

【譯讀】子の燕居、申申如たり。天天如たり。

【章旨】門人、孔子の閑居の時の徳容を記するなり。

【字義】○燕居 燕は、鄭本に宴に作る、安なり、燕は假借字なり。燕居は閑暇無事にして室に居る時をいふ。○申申天天 楊時曰く「申申ハ其ノ容ノ舒(ユツタリ)ナルナリ、天天ハ其ノ色ノ愉(ヨロコビ)ナルナリ」と。

【直解】孔子、朝より退きて閑暇無事に居らせらるる時は、其の容貌は申申如として、如何にも寛舒(ユツタリスル)に見え、また其の顔色は天天如として、如何にも和悦の意あるを見る。蓋し其の徳内に盛んなれば、其の外の容色に見るもの、自然にして此の如きの妙あるなり。

【餘義】此一章は郷黨篇に入れて似合はしき語にて、善く聖人の徳容を形容せしものなり。程子曰く「此レ弟子善ク聖人ヲ形容スル處ナリ。申申ノ字説キ盡サザルガ爲メニ、故ニ更ニ天天ノ字ヲ著ク、今人燕居ノ時、怠惰放肆ナラザレバ、必ず太ク嚴厲ナリ。嚴厲ナル時、此四字ヲ著ケ得ズ。怠惰放肆ノ時、亦此四字ヲ著ケ得ズ。惟聖人ハ便チ自ラ中和ノ氣アリ」と。

仁齋曰く「此レ門人、夫子平居ノ容ヲ記スルコト此ノ如シ。其ノ人ニ接スルニ及ビテハ、則チ亦自ラ同ジカラズ。所謂『君子有三變』(二六六)及び『子温而厲、威而不猛、恭而安』(二四四)トハ是レナリ。聖人ノ學ヲ爲サント欲スル者ハ、常ニ先ヅ聖人ノ氣象ヲ觀ルベシ。此レ即チ學問ノ準則ナリ。忽諸ニスベカラズ」と。

○子曰、甚矣吾衰也。久矣吾不復夢見周公。

【譯讀】子曰く、甚だしい矣吾が衰へたるや。久しいかな吾復夢に周公を見ず。

【章旨】孔子衰老して道を行ふこと能はざるを歎じたまへるなり。

【字義】周公 名は旦、周の文王の子、武王の弟。武王の子成王を輔け禮樂制度を修め、周室王業の基を定めたる聖人にして孔子の常に尊崇したまひし人なり。

【直解】孔子のたまはく、嗚呼甚だしくも吾が老衰したることや。もはや此頃は久しく周公を夢みたることなしと。蓋し孔子の年壯にして精力の盛なりし時は、何とかして周公の道を行ひ、天下の人を濟はんと欲したまひたるが故に、晝間の思慮は、夜間の夢に現れて、周公を見たまひしことも度度ありしことならんに、今や年老いたまひて、其の道を行はんとする思慮も、漸く乏しくなりたるによりて、復周公を夢みざることも久しくなりたりと、其の老衰を歎きたまひしなり。

○子曰、志於道、據於德、依於仁、游於藝。

【譯讀】子曰く、道に志し、德に據り、仁に依り、藝に遊ぶ。

【章旨】學を爲す者の次第準則を語りたまひしなり。

【字義】○志 心の之く所なり、心の指して向ふ所をいふ。○道 人人の日日當に行ふべき所の本務をいふ。即ち親に事へて孝に、君に事へて忠なるの類、皆是れなり。○據 據城據地の據の如く、堅く執り守る義。已に之を得れば謹み守りて失はざる様にするをいふ。○德 得なり、道を心に得て我が物とするなり。○依 衣の體に著きて離れざるが如く、心に離れ違はざるなり。○仁 徳の全くし

て萬善の備はるものなり。○游 優游して情意を適樂せしむるの謂。遊は俗字。○藝 音樂射御の類。

【直解】凡そ學を爲すには、先づ志を定めざるべからず。而して其の志す所は、即ち人倫日用の間に當に行ふべき所の道に外ならず。心の之く所、只此の道に従ひ、是を以て終身の目的となして進まば、他の歧路(ミチ)に惑ふの患なし。是れ學を爲す第一の要件なりとす。されども道に志したるのみにては、道は自ら道にして、未だ吾が物とならず。故に已に道に志したる上は、専ら之を實踐躬行して、道を心に得て吾が物とせざるべからず。心に得て吾が物となれば、之を徳といふ。已に心に得て徳となりても、堅く執り守らざれば、或は物欲の爲めに誘はれて、之を失ふに至ることあるべし。故に徳に據り堅く守りて失はざるやうにすべし。さて徳の種類多し。一件を得るも亦徳なり、十件を得るも亦徳なり。その總ての徳の全くして萬善の備はれるものを仁といふ。學者は先づ道に志し、徳に據り、遂に進みて此仁の地位に至り、造次顛沛の間も仁に居りて離れ違ふことなき(二〇)を以て美とするなり。されども人は始終究屈にしてばかり居ること能はず、時に氣を慰むるの事なかるべからず。よりにて餘力ある時は射御書數等の藝に優游して氣を慰め、徳性を涵養すれば、則ち徳を成し材を達するの道に於て、亦遺漏なきことを得んとなり。此章言ふ所は蓋し先王の教法にして、孔子も亦以て學問の準則と爲したまひしものなり。

【餘義】○依於仁 「君子無終食之間違仁」(二〇)「回也、其心三月不違仁」(九六)とは即ち仁に依るの義。○禮記、雜記篇に「孔子曰、張而不弛、文武弗能也、弛而不張、文武弗爲也。一張一弛、文武之道也」と。前の「燕居申申如、天天如」(四四)と、此章の「游於藝」とは皆善く弛ふる者と謂ふべし。

○子曰、自行束脩以上、吾未嘗無誨焉。

【譯讀】子曰く、束脩を行ふ自り以上は、吾未だ嘗て誨ふること無くんばあらず。

【章旨】人に誠を竭し、禮を修めて來り學ばんことを勉めしめたまひしなり。

【字義】○束脩 脩は脯(鹽を以て之を乾したる肉なり)なり。十脰を束と爲す。古は相見るに必ず贄を執りて以て禮と爲す。束脩は其の至りて輕微なる者なり。○以上 人君は玉を以てし、卿は羔を以てし、大夫は雁を以てし、士は雉を以てし、庶人は鰲(鰓)を執り、工商は雞を執る。之を包含していふ、故に以上といふなり。

【直解】今、人ありて束脩の禮を行ひ、若くはそれ以上の贄を執りて來り學ばんと請ふ者あれば、たとひ物に厚薄の別こそあれ、教を請ふの誠意あること明かなれば、吾未だ嘗て諄諄として教へざることあらざるなりと。蓋し聖人の人に於ける、同じく善に入ることを欲したまはざるはなし。但禮に來り學ぶことを聞き、往きて教ふることを聞かず。故に苟も禮を以て來れば、以て之を教ふることあらざるはなきなり。亦以て孔子平日人を誨へて倦まざるの仁を見るべきなり。

【考異】束脩 禮記、檀弓篇に「古之大夫、束脩之間、不出竟」とある束脩に同じ。漢以後別義あり、鹽鐵論に「桑弘羊曰、臣結髮束脩得宿衛」また後漢書、延篤傳に「吾自束脩以來爲人臣」とある束脩は、檢束脩飾の義にて、此と義異り。

○子曰、不憤不啓、不悱不發、舉一隅而示之、不以三隅反、則不復也。

復也。

【譯讀】子曰く、憤せずんば啓せず。悱せずんば發せず。一隅を舉げて而して之に示し、三隅を以て反せずんば、則ち復せずるなり。

【章旨】孔子が教授法を語り、學者をして自ら力を用ひ、教を受くるの地を爲すことを勉めしめたまふ。

【字義】○憤 學者が或事を深く研究し、心通せんことを求めて未だ通するを得ざる時の憤懣(イキドホリ)の意をいふ。俗にいふ「イラダツ」心なり。○啓 憤懣の意を開き導くをいふ。○悱 或事に就きて略理解するを得て、之を言に出だして説明せんとすれども、なほ少しく分明せざる所ありて、十分に言ひあらはし難き狀をいふ。○發 其の言ふこと能はざる言辭を達して言はしむるなり。教育學にて開發といふ語は此開發の義なり。○舉 示すなり。○一隅 一端といふに同じ、四隅あるものに喩へていふ。○反 復なり、還すなり。舉ぐる所の一隅を以て、餘の三隅に還して相證因して其の理をも悟るをいふ。例へば方角を示すに東の方を告ぐれば、他の三方はそれによりて悟るが如くするをいふ。○復 再び告ぐるなり。

【直解】すべて學問は自ら工夫を凝らし、反覆思索して研究するにあらざれば、深き義理を悟ること能はざるものなり。されば孔子の人を教へたまふに、其の人自ら工夫を凝らして思索すれども、猶ほ心に了解し得ずして、憤懣(イキドホリ)せる狀あるを認めざれば、其の意緒を開き示して教へ導くことを爲したまはず。又其の人略義理を了解し得て、之を言葉に出だして説明せんとするも、猶ほ十分に説明することを得ずして、困屈し居る狀あるを認めざれば、其の辭の端を開きて達せしむることを爲

さす。又四隅ある物の一隅を擧げて之に示し説明するに、他の三隅を以て之に還し、類推應用して相證明する程の地位に至らざれば、復重ねて再び告げ教ふることを爲さずとなり。蓋し其の人の心の憤憤、口の悻悻たるを待たずして、直ちに之を開發すれば、之を悟り知ること堅固ならず。三隅を以て反せざるに、重ねて又告ぐる所あれば、所謂注入主義の弊に陥りて、蛇蜂取らずに終らんのみ。此章述ぶる所は、實に孔子の教授法の精神にして、近年所謂開發主義の教授法といふもの、之に庶幾し。上章已に聖人の人を教へて倦みたまはずと雖も、學者も亦宜しく自ら強めて工夫を凝らし、以て教を受くるの地を爲さんことを欲するなり。

【考異】而示之 邢本朱本、此三字を脱す。清家本には而の字なし。今皇本石經本によりて補ふ。

○子食於有喪者之側、未嘗飽也。

【譯讀】子喪ある者の側に食すれば、未だ嘗て飽かざるなり。

【章旨】孔子が喪に臨み、情の至りて、哀の已みたまふこと能はざることを記す。

【直解】孔子人の喪に臨みて、其の喪ある者の側に食ひたまふことある時は、哀み感みたまふの情切なるが故に、未だ嘗て腹一杯食はれしことなきなりと。

【餘義】邢昺曰く「此章、孔子喪家ヲ助ケテ事ヲ執リタマフ時ノコトヲ言フ。故ニ食フコトアルヲ得。飢エテ事ヲ廢スルハ非禮ナリ。飽イテ哀ヲ忘ルルモ亦非禮ナリ。故ニ食ヘドモ飽キタマハズ」と。

○子於是日哭、則不歌。

【譯讀】子是の日に於て哭すれば、則ち歌ひたまはず。

【章旨】聖人の性情の正しきを見すなり。

【字義】○是日 死を弔ひたる其の日なり。○哭 臨哭なり、人の喪を弔ひて哭泣するなり。

【直解】孔子、人の喪を弔ひたまひし其の日の内は、餘哀未だ忘れ難きが故に、自ら音樂を奏し、歌を歌ひ喜びて樂みたまふこと能はざるなりと。

【考異】朱本は、此章を前章に合せて一章と爲す。邢本は分ちて二章と爲す。陸徳明も釋文に於て「舊以テ別章ト爲ス」と曰へば、邢本を是なりとなす。そは再び子の字を冠するを以ても知らるべし。只編者が類を以て此に聯記せしのみ。

【餘義】謝良佐曰く「學者此二ノ者（前章を合せていふ）ニ於テ、聖人情性ノ正シキヲ見ルベキナリ。能ク聖人情性（の正しき）ヲ識リテ、然ル後ニ、以テ道ヲ學ブベキナリ」と。

○子謂顔淵曰、用之則行、舍之則藏、唯我與爾有是夫。子路曰、子行三軍、則誰與。子曰、暴虎馮河、死而無悔者、吾不與也。必也臨事而懼、好謀而成者也。

【譯讀】子顔淵に謂ひて曰く、之を用ふれば則ち行ひ、之を舍つれば則ち藏る。唯我と爾と是れ有るか
 など。子路曰く、子三軍を行らば、則ち誰と與にせんと。子曰く、暴虎馮河し、死して悔ゆる無
 き者は、吾與にせざるなり。必ずや事に臨みて懼れ、謀を好みて成さん者なりと。

【章旨】前半は出處行藏の時に隨ひて宜しきを得ることを説きて顔淵に許し、後半は血氣の勇を斥けて
 子路を戒めたまひたるは即ち對症與藥なり。

【字義】○用之則行、舍之則藏 舍は捨なり、用と舍とは人に屬し、行と藏とは己に屬す。人に屬する
 者は己に與ることなし。己に屬する者は遇ふ所に安んずるをいふ。用之とは人君の我の能を知りて
 舉げ用ふるをいふ。行とは道を行ふなり。舍之とは人君の捨てて用ひざるをいふ。藏とは道を
 隠して引退すること、所謂、卷キテ之ヲ懷ム(五頁)なり。太宰春臺曰く、此二語ハ、是レ古言ナリ。行藏
 ノ二字ハ韻ヲ押ス。と。従ふべし。○爾 汝なり。○三軍 萬二千五百人を一軍と爲す。三軍は大國
 の兵賦なり。されどもここは只大軍の義として解すべし。必ずしも人數に拘泥すべからず、行三軍
 の行は、易經、師卦、本傳の「行師」の行の如し、行は猶ほ用の如し。○暴虎 徒搏とて虎を徒手にて搏
 つなり。○馮河 馮は陵なり、馮河は徒涉とて河を徒歩にて渡るなり。○事 すべてのをいふ、專
 ら軍事のみを指さず。○懼 戒懼敬慎して敢て驕らざるなり。○成 其の謀を成し遂ぐるなり。

【直解】聖人は世を濟ふの心、切なりと雖も、之を用ふると捨つるとは、時に當れる人君の考如何にある
 ことにて、わが必とする所にあらず。故に只其の遇ふ所に隨ひて或は出でて仕へ、或は藏れて居り、一
 身の處置宜しきを得るなり。顔淵の賢は聖人に幾し。故に亦之を能くす。是を以て孔子、顔淵に謂ひて

のたまはく、時の君己を用ふれば、出でて己が道を行ひ、兼ねて天下の民を善くし、捨てらるれば、退
 き藏れて獨り己を善くするのみ。かくの如く時の君の我を用ふると捨つるとに隨ひて或は行ひ或は
 藏るるの宜しきを得るは、唯我と汝とのみ之を能くするあるかなと、深く顔淵に許したまひぬ。時に
 子路側に在りて、孔子の獨り顔淵を褒めたまひしを聞きて、平生自ら勇氣を負む心あるによりて、問
 ひて曰く、夫子若し三軍を行りたまふ事もあらば、誰と共に軍勢を帥るて出陣したまふにやと。蓋し
 己にあらざれば又與にすべき者なからんとの意を含めて問ひたるなり。孔子答へてのたまふに、虎を
 手搏にしたり、舟なくして河を徒涉するが如き、只血氣の勇にはやり、生を輕んじて妄動し、無益の
 死を敢てして悔ゆるなき野猪武者とは吾は與にすることを欲せざるなり。必ずや平生事に臨みて戒
 懼敬慎し、謀略を好みて、其の謀を成し遂ぐる人を得て、與に軍を行らんことを欲するなりと。蓋
 し子路の血氣の勇を抑へて、義理の勇を養はしめんが爲めに、かくは告げたまひたるなれども、大軍
 を行ふの要も、亦實に此に過ぎざるなり。是れ聖人の訓言の圓通自在なる所以なり。

【餘義】臨事而懼の懼の字最も味あり。或人辨慶に勇を養ふの法を問ひたるに、辨慶答へて曰く「臆病
 ナ稽古セヨ」と。臆病とは即ち懼の字の義なり。すべて事に臨みて戒懼すれば、失敗を招くの患なし。
 これ勇氣の自ら生ずる所以なり。之を學生の課業に譬へんに、平生戰戰兢兢(ツツシム)として講習
 に勉むる者は、試験に臨み、勇氣自ら生じて些も疑懼する所なきが如し。況や兵は凶器にして、戰は
 危事なり「子ノ慎ム所ハ齊戰疾(五頁)といふにあらずや。豈血氣の勇を逞くして、輕舉妄動する
 者の與り知る所ならんや。必ずや平生事に臨みて戰兢危懼の意あり、又深謀遠慮を好み至當を斟酌

して、而る後、果決にして以て之を成すを要す。此の如きの人は敬懼を以て其の義氣を養ひ、詳密を以て其の全功を保つ。智勇兼ね備はる者と謂ふべし。是れ即ち聖人の與に三軍を行りたまふの人なり。之を後世の將帥に求むるに、諸葛孔明・楠正成の如きは即ち之に幾しと爲す。

○子曰、富而可求也、雖執鞭之士、吾亦爲之。如不可求、從吾所好。

【譯讀】子曰く、富にして而し求む可くんば、執鞭の士と雖も、吾も亦之を爲さん。如し求む可からずんば、吾が好む所に從はん。

【章旨】富の強ひて求むべきにあらざる所以を明かにしたまひたるなり。

【字義】○而 如と通す。○執鞭之士 鞭を執りて王侯の出入に從ひ、趨走して、道路の行く者を避けしむることを掌る、王の出入には八人、公には六人、伯には四人、子男には二人なり、下士の職とする所、即ち周禮、秋官の條狼氏の職なり。○所好 古聖人の道を斥す。

【直解】富を欲するは人情なれども、富はもと天命あり、人力を以て強ひて求むべきにあらず。故に孔子ののたまはく、若し富にして求むべき者ならば、たとへ鞭を執りて趨走する賤士の職と雖も之を爲すことを辭せざれども、富はもと天命ありて豫め得ることを期し難きものなれば、營營(ケクセ)として強ひて之を求むるは愚の至と謂ふべし。されば我は吾が好む所に從ひ、古聖人の道を樂みて之に安んぜんのみと。孟子の所謂「天爵ヲ修ムル」(孟解七)の義にして、下の「不義而富且貴、於我如浮雲」(孟解八)の語と、互に相發す。孟子、盡心上篇に「求則得之、舍則失之、是求有餘於得也、求在我也。(仁義を指す)求之有道、得之有命、是求無益於得也、求在外者(富貴を指す)也」(孟解八)とあるは、此章の述義なり。

【考異】執鞭之士 鹽鐵論に、士を事に作る、士と事とは古相通す、詩經、邶風に「勿士二 行枚」の毛傳に「士ハ事ナリ」とあるが如し。之に從へば執鞭の如き賤役の事の義にして、亦通す。

○子之所慎、齊・戰・疾。

【譯讀】子の慎む所は、齊・戰・疾。

【章旨】門人、孔子の平生尤も慎みを加へられし三事を記するなり。

【字義】齊 齋と古字通用す「モノイミ」なり。將に祭らんとして精進潔齋し、其の思慮の齊はざる者を齊へて、神明に交る所以なり「齊、必有明衣、布」(六三)の條を參看せよ。

【直解】孔子は平生事に於て、謹みたまはざる所なしと雖も、門人其の特に意を加へて慎みたまひし三事を記す。齋戒は神明に交る所以にして、神の饗くると饗けざるとは、己の誠の至ると至らざるとに由る。戰は國の存亡、民の死生の係る所、疾は吾が身の死生の關る所、故に三者皆尤も慎みたまふ。

○子在齊聞韶三月、不知肉味。曰、不圖爲樂之至於斯也。

【譯讀】子齊に在して韶を聞くこと三月。肉の味を知らず。曰く、圖らざりき樂を爲ることの斯に至らんとは。

【章旨】孔子、韶樂を聞きて其の善美を盡せるを歎美せられしことを記す。

【字義】○韶 舜の樂なり、舜の徳業にかたどりて美を盡し善を盡せること前(九門)に已に出でたり。舜の後、陳に封ぜられ、先代の樂を用ふることを得たり。陳の大夫田敬仲齊に奔りしより、韶の樂、齊に傳はれり。○三月 其の久しきを謂ふ。○不知(ニ)肉(ニ)味(一) 朱註に「心是(ニ)一(ニ)シテ他(ニ)及(ニ)バザルナリ」と。○不(レ)圖(一) 意はざりきとの義なり。○爲 作なり。

【直解】孔子齊に在せし時、韶の樂を聞きて學ぶこと三月の久しきに至り、心是に一にして他に及ばず、肉の味の旨きをも忘れて、所謂手の舞ひ足の蹈むことを知られざる程なりき。因りてのたまはく、舜の樂を作るや、其の情文の備はりて、美を盡くし善を盡くすこと、此の如く盛んならんとは意はざりきと。深く之を歎美したまひたるなり。

【考異】三月 上に屬して讀むべし、史記、孔子世家に、三月の上に「學之」の二字あり。下の「不知(ニ)肉(ニ)味(一)」に屬して讀むは、非なり。皇本高麗本、韶の下に樂の字あり

○冉有曰、夫子爲(レ)衛君乎。子貢曰、諾、吾將(レ)問(レ)之。入曰、伯夷、叔齊、何人也。曰、古之賢人也。曰、怨乎。曰、求(レ)仁(レ)而得(レ)仁。又何(レ)怨乎。出曰、夫子不(レ)爲(レ)也。

【譯讀】冉有曰く、夫子衛の君を爲けたまはんかと。子貢曰く、諾、吾將に之を問はんとすと。入りて

曰く、伯夷、叔齊は何人ぞやと。曰く、古の賢人なりと。曰く、怨みたりやと。曰く、仁を求めて仁を得たり。又何ぞ怨みんと。出でて曰く、夫子は爲けたまはざるなりと。

【章旨】子貢、伯夷、叔齊の仁を聞きて、孔子が衛君の不仁に與したまはざることを知ることを記す。

【字義】○爲 猶ほ助の如し。○衛君 出公輒なり、衛の靈公其の世子、蒯聵を逐ふ。公薨じて國人蒯聵の子輒を立つ。是に於て晉人蒯聵を衛に納る。輒兵を遣はして之を拒ぐ。これ子にして父を拒ぐ、悪行の甚だしきものなり。此時孔子衛に在す。衛人多くは以爲へらく、蒯聵罪を父に得たり。而して輒は嫡孫なれば當に立つべしと。輒に與するを見る。冉有心に安んぜざる所あり。孔子に問ひて疑を決せんとし、先づ子貢に因りて孔子に問はんとするなり。○諾 應ずる辭。○伯夷、叔齊 孤竹といふ國の君の二子なり。其の父卒するに臨みて、遺命して弟の叔齊を立つ。父卒して叔齊天倫の素るべからざるを以て、兄の伯夷に遜る。伯夷は父の命なれば背くべからずとて、遂に逃れ去る。叔齊も亦立たずして逃れ去る。國人其の中子を立つ。其の後、武王紂を討つ。夷齊馬を扣きて諫む。武王商を滅す。夷齊周の粟を食ふを恥ぢ、去りて首陽山に隠れ、遂に餓死す。○怨 悔い恨むなり。

【直解】衛君輒が其の父蒯聵を拒ぎし時、孔子衛に在す。當時衛人は、蒯聵の罪を父に得て出奔したるを以て、罪ありとし、輒は嫡孫なれば當に立つべしと爲す。然れども子として其の父を拒ぐは、大不順の事なれば、冉有之を疑ひ、子貢に語りて曰く、此度の事に就きて夫子は衛君の所爲を是なりとして之を助けらるや否やと。子貢曰く「チウ」さうである、吾將に夫子に見えて其の思召如何を問はんとすと。さて子貢、孔子に問はんとして、先づ以爲らく、禮に君子は是の邦に居ては、其

の大夫を非らずといふことあり。況や其の君の事をば、猶ほ更に忌み憚るべきことなれば、あらはに衛君を指して問ふも、夫子の明かに御答なからんことを恐る。よりに其の行の相反する所の古人によせて之を問はば、それによりて夫子の衛君を助けたまふや否やを知ることを得べしと。是れ子貢が言語に巧なる所以なり。さて子貢孔子の室に入りて問ひて曰く、古の伯夷・叔齊といふ人は、如何なる人物にて候ふぞと。孔子答へてのたまはく、二子はこれ古の賢人なりと。子貢重ねて彼の二子が國を譲り、遠く去りて餓死に終りしことは、其の内心に於いて少しは悔い怨む所はなかりしかと。孔子のたまはく、二子は國を譲りて仁を爲すことを求め、其の願の通りに國を譲り仁を成すことを得たり。されば又何ぞ心に悔い怨む所あらんやと。子貢乃ち悟りて以爲へらく、夷・齊二子は兄弟國を譲るものなり。夫子之を稱して仁且つ賢と爲すこと此の如し。然れば父子國を争ふ不仁不孝の衛君を助けたまはざることを知るべきなりと。よりに出でて冉有に語りて曰く、夫子は決して衛君を助けたまはざるなりと。

【餘義】孔安國の註に「國ヲ讓ルヲ以テ仁ト爲ス」ものは、蓋し古訓なり。左傳、僖公八年に「子魚曰、能以國讓、仁孰大焉」と、以て證すべし。蓋し伯夷は父の遺命に違ひて、父を既に死したるの後に欺くに忍びず。叔齊は父の亂命(病みて對に死せんとして精神の亂れたる時の命令)に従ひて、天倫の序を紊り、父を不道に陥るに忍びず、各、國を以て相讓る。其の事已に得て、其の心已に安んずれば、乃ち仁を求めて得たるなり。亦何の怨悔する所あらんや。凡そ人求むる所ありて之を得ざるときは、或は怨悔なきこと能はず。二子は即ち仁を求めて仁を得たり。その心の釋然たるものあることを知るべし。故に孔子のたまはく、又何ぞ怨みんと。

○子曰、飯疏食、飲水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣。不義而富且貴、於我如浮雲。

【譯讀】子曰く、疏食を飯ひ、水を飲み、肱を曲けて之を枕とす。樂も亦其中に在り。不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮雲の如し。

【章旨】孔子自ら貧に安んじて道を樂むことを述べたまひたるなり。

【字義】○飯 之を食ふなり。○疏食 麤飯なり、疏は精の反對にして、猶ほ麤の如し、よく「シラゲザル」米の飯なり、俗にいふ半搗米をいふ。○如浮雲 浮雲の輕きが如きを謂ふ。

【直解】人の富貴貧賤の境遇に因りて心を移す者は、其の中心に得る所なきが故なり。聖人は則ち往く所として道を樂み、自得したまはざるはなし。故に孔子のたまはく、粗末なる飯を食ひ、冷水を飲み、寢るにも我が肱を曲けて之を枕とするなどの如き貧窶(マツシクヤ)なる境遇に在りても、吾の眞の樂は、此れに因りて些も減することなくして、自ら其の中に在りて存し、始終變ずることなし。彼の不義にして富み且つ貴きが如きは、我より之を視れば、固より浮雲の輕きが如し。何ぞ是等の恃むに足らざる物を羨み望みて、爲めに吾の心を累し、吾の眞の樂を移すに足らんやと。此章の義は學而篇の「貧而樂道」(二七)の語と、互に相發す。

【考異】疏食 疏は皇本に蔬に作る、孔安國曰く「蔬食ハ菜食ナリ」と。朱註に従ひ麤飯とするを是とす。

【餘義】此章、聖人の心、原真樂あり、境遇の如何によりて累を爲すに足らざるを言ふ。聖人と雖も富貴を厭ひて貧賤を喜ぶといふにはあらざるなり。彼の當世を矯めて富貴を薄んずる如き「スネ」者の如きは、固より與に論するに足らず。許白雲曰く「聖人但不義ノ富貴ヲ言フナリ。若シ富貴義ヲ以テ來レバ、即チ舜ハ堯ノ天下ヲ受クルモ泰と爲サズ」(孟子)とあるを引く。疏食・飲水・曲肱は貧窶を形容したる辭なり。孔子貧窶の時と雖も、顔子の陋巷の如きに至らず。朱註に「雖處困極、而亦樂無不在焉」といひ、程氏が「雖疏食・飲水、不改其樂也」と、俱に雖といふ假設の字を用ひたるは味あり。

○子曰、加我數年、五十以學易、可以無大過矣。

【譯讀】子曰く、我に數年を加し、五十にして以て易を學ばしめば、以て大過無かる可し。

【章旨】孔子、易道の窮りなくして常に學ぶべき所以を明かにしたまひたるなり。

【字義】○加 加は假の誤なり。普通とするは非なり。史記、孔子世家に「假我數年、若是我於易則彬彬矣」風俗通義、窮通卷に亦引きて加を假に作る、以て證すべし。○五十 年齒に就きていふ。皇侃曰く「孔子爾時已四十五六、故ニ云フ、我ニ數年ヲ加シテ、五十ニシテ易ヲ學ブト」と。徂徠曰く「此レ則チ未ダ五十ニ至ラザル時ノ言、蓋シ易ヲ學ビ、五十ニ至ル比、乃チ始メテ成ルアルヲ言フナリ」と。○易 今の周易なり、吉凶消長の理、進退存亡の道を明かにし、人事に通じて、天命を知ることを得るの書なり。○可 以無大過 大いなる過失なかるべしとの義。易に大過の卦あり、中庸を失して大に行き過ぐる義「大過者顛也」とあり。蓋し是れ孔子の謙辭なり。

【直解】孔子、御年四十五六の時、門人に語りて曰く、天我に假すに數年の壽命を以てし、我をして五十に至る頃、易を學び十分に自得する所あらしめば、是によりて我が身に大いなる過失なきを得んかと。

【考異】五十 朱註に「劉聘君、元城ノ劉忠定公(名は安世、宋の人)ニ見ユ。自ラ言フ『嘗テ他ノ論ヲ讀ムニ、加テ假ニ作り、五十ヲ卒ニ作ル、蓋シ加ト假ト聲相近クシテ而シテ誤讀セルナリ。卒ト五十ト、字相似テ誤リテ分ツナリ』ト。愚按ズルニ、此章ノ言、史記ニハ『假我數年、若是我於易則彬彬矣』ニ作ル、加ハ正ニ假ニ作ル。而シテ五十ノ字ナシ。蓋シ是時孔子年已ニ七十二幾シ。五十ノ字ハ誤レルコト疑ナシ」と。朱子、二劉の説に依りて五十を改めて卒に作るも、確證なく、且つ文理を成さず、従ふべからず。又是時、孔子年七十に幾しといふも、其の何に由りて然ることを知るか、殆ど解すべからず。蓋し史記、孔子世家に「孔子晚而喜易」とあるによりて附會せしならんも「喜易」は則ち「學易」と異り、易道の深遠にして窮りなき、數十年の學習を積み始めて成るあり。然る後、篤く之を喜むの地位に至るを得るなり。況や人は五十にして始めて衰ふといへば、五十以後は、皆晩といふべきをや。されば皇侃が「孔子爾時ニ當リテ年已ニ四十五六、故ニ云フ、我ニ數年ヲ加シテ五十ニシテ易ヲ學ブト」といへるを是なりとす。

○子所雅言、詩書執禮、皆雅言也。

【譯讀】子の雅言する所は、詩書執禮、皆雅言なり。

【章旨】孔子、先王の訓典たる詩書禮を重んじて正言したまふ所以を記するなり。

【字義】○雅言 正言なり、雅正は俚俗の反なり。○詩書 詩經と書經と。○執禮 執は猶ほ掌の如し、禮は誦せず、故に執といふ。執禮とは禮の事を詔相(スケキ)するを謂ふ。禮記、文王世子篇に「秋學禮、執禮者詔之」と。

【直解】孔子は魯に生長したまひたれば、魯語したまはざることも能はざれども、唯詩を誦し、書を讀み、又禮事を掌る時の言の三者は、皆必ず其の音を正言し(必ず其の音を正言し、然る後に義全し)俚俗の語を用ひたまはず。是れ先王の訓典を重んじ、末學の流失を謹みたまふ所以なり。

【餘義】此章は前の「學易」の語に因りて、聯記せしなり。

【考異】雅言 朱註に、雅を訓して常と爲し、雅言を解して雅素の言と爲すは、古訓に非ず。故に従はず。

○葉公問孔子於子路。子路不對。子曰、女奚不曰其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至云爾。

【譯讀】葉公孔子を子路に問ふ。子路對へず。子曰く、女奚ぞ其の人と爲りや、憤を發して食を忘れ、樂みて以て憂を忘れ、老の將に至らんとするを知らず云爾と曰はざる。

【章旨】孔子自ら學を好むの篤くして已む可からざる旨を述べたまひたるなり。

【字義】○葉公 楚の葉縣の尹(縣の長官)の沈諸梁なり。字は子高、僭して公と稱す。○子路不對 子路聖人の徳を知るも、未だ名づけて言ひ易からず、故に答へざるなり。○女 汝なり。○云爾 爾は然なり、云爾は句を足すの辭、猶ほ當に此の如しと謂ふが如し。

【直解】葉公が孔子の人と爲りを子路に問ひしに、子路は聖人の徳は言語を以て形容し難きを以て對へ

ざりしかば、孔子之を聞きて代りて之が辭を爲りてのたまはく、汝は何故に、其の人と爲りや、唯學を好むの志の篤くして、未だ其の理を會得せざる間は、憤を發して食事も打ち忘れて、熱心に之を會得せんことを求め、已に會得すれば、則ち一途に之を悦び樂みて、心の憂をも打ち忘るる程なり。是の二者を以て日に孳孳(カクチムル)として勉めて倦まず。かくて其の身の年の寄るをも知らず。此の如き人なりと、彼が間に答へざりしごと。

【餘義】仁齋曰く、道ノ窮リ無クシテ得難キヲ知ル。故ニ憤ヲ發ス。道ノ安ンズベクシテ、他ニ求ムル所ナキヲ知ル。故ニ樂ム。憤ヲ發ス。故ニ愈力ム。樂ム。故ニ倦マズ。此レ食ト憂トヲ忘レテ、老ノ將ニ至ラントスルヲ知ラザル所以ナリと。微に曰く、朱註ニ「未得則發憤而忘食、已得則樂之而忘憂、但自言其好學之篤耳」と。之ヲ得タリ。表記ニ「小雅曰、高山仰止、景行行止。子曰、詩之好仁如レ此、鄉道而行、中道而廢。忘身之老也、不知年數之不足也。俛焉日有孳孳、斃而后止」と。正ニ此ト相發ス。命ヲ知ルノ言ナリと。嗚呼聖人好學の志の篤きこと此の如し。而るに衆人は則ち動もすれば荒怠す、是れ聖は益聖にして、愚は益愚なる所以、豈揚若として猛省せざるべけんや。

○子曰、我非生而知之者、好古敏以求之者也。

【譯讀】子曰く、我は生れながらにして之を知る者に非ず。古を好み、敏にして以て之を求めたる者なり。

【章旨】孔子自ら謙して人に學を好むべきことを勉めしめたまひたるなり。

【字義】◎生知 生れながらにして知るは、學を待たずして道を知るなり、即ち上智の資なり。◎敏 速なり、汲汲(動むることの急なる貌)たるをいふ。◎好古 古の道を好む。

【直解】當時の人、蓋し孔子を以て聰明睿知にして、生れながらにして道を知りたまひたるにて、學問の功に由るに非ずと爲す者あり。故に孔子之を曉してのたまはく、我は決して生知の者に非ず。唯古の道を信じて、深く之を好み、汲汲として敏速に之を求めて得たる者なりと。鄭玄曰く「此レヲ言ヒタマヒシ者ハ、人ニ學ヲ勸メタマヒシナリ」と。

【考異】敏以 皇本、敏と以との間に而の字あり。

○子曰、不語怪力亂神。

【譯讀】子曰く、怪力亂神を語らず。

【章旨】門人、孔子の言を謹みたまひし事を記す。

【字義】◎語 誨言なり、弟子を召して之に語けて奉行せしむるなり。「子語魯大師樂正」(九二)語レ之而不惰者、其回也與」(三〇)の語は皆同じ。◎怪 怪異なり、天地の變異、山精水妖の類をいふ。◎力 勇力なり、舟の舟を盡かし(四六)烏獲の千鈞を擧げ(五八)孟賁の牛角を抜く(六八)の屬の如きをいふ。◎亂 悖逆の事、臣が君を弑し、子が父を弑するの類をいふ。◎神 鬼神の事を謂ふ。

【直解】物怪の事、勇力の事、悖亂の事、此三の者は或は教化に益なく、或は言ふに忍びざる所、故に聖人謹みて語りたまはず。又鬼神の事は、正しからざるに非ずと雖も、深遠にして測られず、人

智の及ばざる所なり。故に亦語りたまはざるなり。猶ほ鬼神に就きては「未能事人、焉能事鬼」(六五)「務民之義、敬鬼神而遠之、可謂知矣」(八八)の條を參看せよ。

【餘義】謝良佐曰く「聖人ハ常ヲ語リテ怪ヲ語リタマハズ。德ヲ語リテ力ヲ語リタマハズ。治ヲ語リテ亂ヲ語リタマハズ。人ヲ語リテ神ヲ語リタマハズ」と。

○子曰、三人行、必有我師焉。擇其善者而從之、其不善者而改之。

【譯讀】子曰く、三人行ふときは、必ず我が師あり。其の善なる者を選びて之に従ひ、其の不善なる者にして之を改む。

【章旨】學に常師なきことを明かにしたまひしなり。

【字義】三人行 三人事を共にするをいふ。三人とは其の數の至りて寡きを言ふ。

【直解】茲に三人程の小人數が相共に事を行ふ者ありとせんに、其の間に必ず我が師法と爲すべき者あり。其の善き者を選びて之に従ひ、其の善からざる者を視て之を改む。即ち各人の行事中に就きて、事の善き者を選びて之に従ひ、事の善からざる者にして之を改む。備はるを一人に求めず。小善と雖も亦棄てずして之に従ふ。舜の人に取りて以て善を爲すは(二二)亦此道なり。此章、里仁篇の「子曰、見賢思齊焉、見不賢而內自省也」(六)と互に相發す。

【考異】朱註には「三人同ジク行クニ、其ノ一ハ我ナリ、彼ノ二人ノ者、一ハ善ニシテ一ハ惡ナレバ、則

予我ハ其ノ善ニ從ヒテ、其ノ惡ヲ改ム。是ノ二人ノ者ハ皆我が師ナリ」とあり。是れ何晏邢昺などの説に本づくとも雖も、不善人をも師なりといふことは古義に非ず。從ふべからず。陳天祥曰く「師トハ人ノ尊稱ナリ、凡ソ善ノ人ノ軌範タルニ堪フル者ハ、此名ヲ以テ之ニ歸スベシ。善モ亦吾ガ師ナリ、惡モ亦吾ガ師ナリト謂フハ、此レ道家者流ノ言ナリ。聖人ノ語意ニ非ズ。果シテ善惡皆我が師トイフトキハ、則チ天下ノ人皆師タリ。何ゾ必ズシモ二人ヲ指サン。亦「必有」ト言フヲ須ヒザルナリ。此レ言フ心ハ、三人ハ寡シト雖モ、其ノ行フ所ハ必ズ吾ガ師タルベキ者アリ。善不善ハ吾擇ビテ之ニ從ヒ之ヲ改ム。必ズシモ其ノ一人ノ全ク善キ者ヲ擇ビテ之ニ從ヒ、一人ノ全ク惡シキ者ニシテ之ヲ改ムルト謂フニ非ズ。全徳ノ人ハ世常ニシモ有ラズ。若シ必ズ其ノ人ヲ擇ビ定メテ之ニ從ハント欲セバ、終身之ヲ求ムトモ未ダ必ズシモ得ベカラズ。三人ノ中、豈能ク必ズシモ有ランヤ」と。徂徠の説亦之に同じく、頗る允當と爲す。徂徠曰く「老子スラ猶ホ曰ヘリ『善人者、不善人之師、不善人者、善人之資』ト、未ダ嘗テ不善ヲ以テ師ト爲サズ。古言然リト爲ス」と。

【考異】三人 唐石經皇本、三の上に我の字あり。また有を得に作る。

○子曰、天生德於予、桓魋其如予何。

【譯讀】子曰く、天徳を予に生ぜり。桓魋其れ予を如何せん。

【章旨】聖人天に任せ命を樂み、患難に遇ひて、泰然自若として動きたまはざる自信の言を記するなり。

【字義】◎天生ニ徳於予ニ 生は授くるの意。天より我に授くるに聖性を以てするを謂ふ。◎桓魋 宋の

司馬向魋なり、桓公に出づ。故に又桓氏と稱す。史記、孔子世家に「孔子曹ヲ去リテ宋ニ適ク。弟子ト禮ヲ大樹ノ下ニ習フ。宋ノ司馬桓魋孔子ヲ殺サント欲シ、其ノ樹ヲ抜ク。孔子去ル。弟子曰ク、以テ速ニスベシ。孔子曰ク、天生ニ徳於予ニ。桓魋其れ予何ト。孔子鄭ニ適ク」と。

【直解】孔子天下を周遊して宋の國に至りたまひし時、司馬桓魋といふ者、孔子を忌みて殺さんと欲すれども、其の聖人を害するの名を負はんことを恐れ、樹を抜きて之を倒し、自ら壓死せられし者の如くせんと欲す。この時從ふ所の門人、恐れて速に去らんことを勧めしに、孔子のたまはく、人の死生は皆天に出づ。今天此の如き徳を賦して我を生ぜしめしものは、天意我をして世を濟ひ民を導かしむるに在ることを知るべし。されば桓魋如何に亂暴なりと雖も、天の祐くる所の予を如何せんやと。蓋し天意に違ひて我を害することは能はじとなり。存疑に曰く「夫子平日、聖ヲ以テ自ら居リタマハズ。桓魋ニ遇フニ及ビテ、則チノタマハク『天生ニ徳於予ニ』ト。匡人ニ拘セラレタマヒシ時ハ則チノタマハク『天之未レ喪ニ斯文ニ也、匡人其れ予何』ト。何トナレバ聖ヲ以テ自ら居リタマハザル者ハ、乃チ平日己ヲ謙シタマフノ本心ナリ。道徳ヲ以テ自ら處リタマフ者ハ、患難ニ遇ヒテ自ら信ジ、以テ門人ヲ慰メテ、強暴ヲ警メタマヒシナリ」と。

【餘義】此章を讀めば、聖人が自信の甚だ強きことを知るに足る。獨り孔子のみならず、釋迦が法華經に「爲ニ一切衆生之父ニ」傳燈錄に「天上天下、唯我獨尊」といひたる、耶蘇がガリラヤ湖上にて難船せし時、從者が救を求めて叫びしを聞きて「何ゾカク懼ルルヤ、汝等信仰ナキ者ヨ」と警め、又「吾ハ神ノ子ニシテ、此世ノ救世主ナリ」といひしが如き、其の堅確なる自信を有せしこと、東西符節を合

するが如し。

○子曰、二三子以我爲隱乎。吾無隱乎爾。吾無行而不與。二三子者。是丘也。

【譯讀】子曰く、二三子我を以て隠すと爲すか。吾は隠すこと無きのみ。吾は行ふとして二三子と與にせざる者無し。是れ丘なりと。

【章旨】孔子、平生、身を以て教示し、隠す所なきことを説きて、門人の之を默識せんことを曉したまひたるなり。

【字義】○二三子 諸弟子を謂ふ。○我 人に對して言ふの辭なり。○乎爾 徂徠曰く「語助ノ辭ナリ」と、從ふべし。皇侃の「爾ハ女ナリ」といへるは、非なり。○與 共なり。

【直解】已に講ぜしが如く、孔子の教授法は「憤セザレバ啓セズ。悱セザレバ發セズ。一隅ヲ擧ゲテ而シテ之ヲ示シ、三隅ヲ以テ反セザレバ、則チ復セザルナリ」(二〇)とのたまひしが如くなれば、諸弟子中には、或は其の隠して告げたまはざることもあらんかと疑ふ者あり。故に孔子其の疑を解きてのたまはく、汝等二三子よ、我を以て隠して教示せざる所ありとするか。吾は決して隠すことは無きなり。吾が平生行ふ所の事、必ず二三子と之を共にせざることなく、未だ嘗て隠して獨り冥暗の中に行ひし事あらず。是れ丘の心なりと。蓋し孔子日常の動作威儀語默皆活きたる教訓に非ざるはなし。唯諸弟子の特に之を覺らざるのみ。

【考異】○行而 皇本、行の上に所字あり。是なり。○與 朱註に「與ハ猶ホ示ノ如キ也」とあれども非なり。徵に曰く「吾ノ行フ所、必ズ二三子ト之ヲ共ニス。隠ス所アリテ獨行スル者莫シ。蓋シ二三子ノ默シテ之ヲ識ランコトヲ欲スル也」と。之を得たり。

【餘義】孔子の教は身を以て模範を示すに在り。門人察せず。毎に言語を以て聖人に求む。故に無言を以て教を吝みて隱匿すと爲す。是れ此章の聖訓ある所以なり。陽貨篇に「子曰、予欲無言。子貢曰、子如不レ言、則小子何述焉。子曰、天何言哉。四時行焉。百物生焉。天何言哉」(六二)とあると、互に相發す。

○子以四教。文・行・忠・信

【譯讀】子しを以て教ふ。文・行・忠・信。

【章旨】門人、孔子の人を教へたまふ要目を記するなり。

【字義】○文 典籍辭義なり。文は知を致す所以なり。○行 德行なり。○忠 人の爲めに謀りて其の心を盡すをいふ。○信 偽を言はざるなり、人言を信と爲す。

【直解】孔子平生、四者を以て人を教へたまふ。其の目は文と行と忠と信となり。文は以て義理を究め明かにし、行は以て文籍を讀みて學び知りたることを實行するなり。孔門の教科は、此文行の二に過ぎざれども、忠と信とは最も重要な行なれば、特に出だして掲げたるなり。忠は心を盡して親切にし、信は事を實にして偽を言はざるなり。此の四者は孔子の隠すことなく、行ふとして二三子と共にせざることなき者なり。故に前章を承けて、ここに掲げたるなり。

【餘義】圖解に「四教ハ是レ門人ノ見ル所ヨリシテ言フ。聖人此四科ノ設アルニ非ズ」と。

程子曰く「文ヲ學ビ行ヲ修メテ忠信ヲ存スルナリ。忠信ハ本ナリ」と。古義に「四教ハ忠信ヲ以テ歸宿ノ地ト爲ス。即チ『主ニ忠信』(一六)ノ意ナリ。蓋シ忠信ニ非ザレバ、則チ道以テ明カナルコトナク、徳以テ成ルコトナシ。禮ハ忠信ノ推ニシテ、敬ハ忠信ノ發ナリ。乃チ人道ノ立ツ所以ニシテ、萬事ノ成ル所以ナリ。凡ソ學者忠信ヲ以テ主ト爲サザル可カラザルナリ」と。竝に之を得たり。

○子曰、聖人吾不得而見之矣。得見君子者、斯可矣。子曰、善人吾不得而見之矣。得見有恆者、斯可矣。而有恆者、斯可矣。而爲泰、難乎有恆矣。

【譯讀】子曰く、聖人は吾得て之を見ず。君子者を見るを得ば、斯に可なり。子曰く、善人は吾得て之を見ず。恆有る者を見るを得ば、斯に可なり。亡くして有りと爲し、虚くして盈てりと爲し、約にして泰と爲す。難いかな恆有ること。

【章旨】世衰へ道微にして人才の乏きを歎じたまひしなり。善人以下は孔子異日の御言葉なり、類を以て合せて一章とす。

【字義】○聖人 聰明睿知の稱。智徳の神明にして測られざる人。○君子 才徳衆に出づるの名。○善人 性質善美にして徳ありて才の或は足らざる者。○恆 常久にして其の心一定して何時も變ること

となき義。有恆者とは、未だ徳あるに至らざれども、重厚質直、内外一の如く、終始渝らざる者を謂ふ。張栻曰く「聖人君子ハ學ヲ以テ言ヒ、善人有恆者ハ質ヲ以テ言フ」と。○斯 猶ほ則の如し。○亡 無と同じ、有亡盈虚は智慮才能技術を以て之を言ひ、約と泰とは家道を以て之を言ふ。○爲 粧飾して其の狀を爲すなり。偽の字の義あり。其の實なくして偽り飾る者は、必ず久しきに耐へず。

【直解】孔子のたまはく、今の世には、人品の至極とする聖人は吾得て見ること能はず。せめては才徳衆に超出する君子なりとも見ることを得ば則ち幸なりと。孔子又のたまはく、性質の善美なる善人は、學問すれば其の徳を成して以て君子となることを得べしと雖も、今の世には其の善人は吾得て見ること能はず。せめて其の心を二にせずして常久渝らざる有恆者にても見ることを得ば則ち幸なり。而るに今や世は澆漓にして人人皆誇張し、絶えて無きものを有るが如くによそほひ、虚きに盈てる振を爲し、其の家貧約なれども奢泰(オゴリテ)なる風を爲せり。これ皆内に其の實なくして、外を飾り、人に誇らんとする者なり。此の如き輩は、たとひ一時は人を欺くことを得とも、常久に渝ることなきこと能はず。されば心に恆ありて守る所を變へざることも、亦難きことなるかなと歎ぜられたるなり。蓋し人は心に恆ありて、然る後に學びて以て聖人君子の域にも至ることを得べし。故に併せてここに類記せしなり。

【考異】子曰善人 朱子は以下を別章と爲さざるが故に、子曰の字疑ふらくは衍文ならんといへり。微には「善人以下ハ異日ノ言、其ノ相類スルヲ以テ、故ニ同ジク一章ニ居ク。子曰ハ何ゾ必ズシモ衍ナラン」と。今物説に従ふ。但徂徠は前節を以て何晏の「世ニ明君ナキヲ疾ム」の註を、古來相傳の説とな

○子釣而不網。弋不射宿。

して之を采り、且つ「得見君子者、斯可矣、得見有恆者、斯可矣、皆願辭、以二人君言レ之」と曰ひ、息軒等も之を是とするも、必ずしも従はず。全章通じて當時の人物を汎論せられしものと解すべし。

【譯讀】子釣して網せず。弋して宿を射す。

【章旨】孔子、仁愛の心、魚鳥に及ぶを記す。淮南子、主術訓に「不涸澤而漁、不焚林而獵」と同義。

【字義】○釣 一竿の釣なり。○網 大綱なり、水流を横絶し、多くの小繩を以て鉤を繋ぎ、大綱に羅列して屬著(ツラヌ)し、魚の鉤に懸るを候ひて綱を曳きて之を出だすなり。俗に「ハヘナハ」と稱するもの。○弋 繳(イク)なり、生絲を以て矢に繋ぎて、飛鳥に射中するときは、絲が鳥の翼に巻き付きて飛翔することを得ずして墜落せしむるやうに仕掛けたる具なり。○宿 宿鳥(リト)なり。息軒は説文に「宿止也」とあるを引きて木に止り集る鳥なりと解せしも穿鑿に失せり。

【直解】孔子は時に娛樂の爲めに漁獵せらるる事ありて、漁するには一本の釣竿にて釣を垂れたまへども「ハヘナハ」を引きて釣らるることなし。是れ水中の魚を盡し取るに忍びざればなり。又獵も弋射を以て空中の飛鳥を射取られしが、木に止まれる寢鳥の不意を掩ふが如き事をば、爲すに忍びずして之を爲したまはざりき。同じく物を取るにも、亦物を愛するの仁ありしことを知るべきなり。洪氏曰く「物ヲ待ツコト此ノ如シ、人ヲ待ツコト知ル可シ。小ナル者此ノ如シ、大ナル者知ルベシ」と。

【考異】網 邢昺は、孔註の羅列の羅の字を羅網と誤解し、繩を以て大綱を作り、網を用て此綱に屬著

し、之を水中に施し、流を横絶して以て魚を取るを謂ふ。網を擧ぐるには、則ち其の綱を提ぐるなりと註し、後儒も多く其謬解を踏襲し、徂徠の如きは網は他に見えざれば、恐くは網字の誤ならんといへり。臆斷も亦甚だしといふべし。

【餘義】釣は男子娛樂の事のみ、聖人と雖も亦時ありて之を爲したまふ。何ぞ少賤と養祭とを論ぜん。洪氏が「孔子少クシテ貧賤ナリ、養ト祭トノ爲メニ、或ハ已ムコトヲ得ズシテ釣弋ス」といふものは、自らは是れ道學先生の言、固より辯するに足らざるなり。

○子曰、蓋有不知而作之者。我無是也。多聞、擇其善者而從之、多見而識之、知之次也。

【譯讀】子曰く、蓋し知らずして之を作る者有らん。我は是れ無きなり。多く聞きて其の善き者を選びて之に従ひ、多く見て之を識すは、知るの次なり。

【章旨】首章の「述而不作」(二四)の意を説き、且つ知を求むるの法を示したまひたるなり。

【字義】○蓋有 衆人の中には或は之れ有らんとの義にて疑辭なり。○不知而作之 其の理を知らずして妄に創作(ツクリ)するをいふ。○識 志と通ず、記(シル)なり。心に記憶すること。

【直解】孔子のたまはく、衆人の中には、或は然る所以の理を十分に知らずして、徒に穿鑿して篇籍を作る者あらんも、我は述べて作らざるの主義なれば、自ら此失なきなり。されば我は知者の位には居ること能はざれども、多く古今の事を聞きて、其の中の善き者を選びて之に従ひ、之を身に行ひ、

又多く古今の事を見て善不善となく博く之を記憶し置き以て参考に備へ、事に臨みて義理の當否を辨じ、妄作の憂なからしむ。此の如くなれば、理を知るの至にはあらざれども、亦以て知者の次に位することを得べしとなり。其の御言葉は益謙したまひて、其の御徳の愈高きを見るべし。

○互郷難_レ與_レ言_レ童子見_レ門人惑_レ子曰_レ與_レ其進_レ也_レ不_レ與_レ其退_レ也_レ唯何甚_レ人絜_レ己_レ以_レ進_レ與_レ其絜_レ也_レ不_レ保_レ其往_レ也_レ

【譯讀】互郷與に言ひ難し。童子見ゆ。門人惑ふ。子曰く、其の進むを與す。其の退くを與さざるなり。唯何ぞ甚だしくせん。人己を絜くして以て進まば、其の絜きを與す。其の往るを保たざるなり。

【章旨】聖人、人を待つ量の寛洪なることを記するなり。

【字義】○互郷 互は郷の名、蓋し其の郷人不善に習ひ、與に道を言ひ難し。○惑 疑なり、孔子の之を見たまふべきに非ざるを疑ふ。○與 許なり。來りて教を乞ひ善に遷るを許す義。○唯何甚 惡を惡むの甚だしきを咎むるなり。○絜 潔なり、修治なり。○保 任なり、保證する義。○往 猶ほ去の如きなり、去りて後の行をいふ、以往の往なり、既往の往に非ず。

【直解】互郷の人は、平生不善に習ひ染みて、之と與に善き道を語り難きなり。而るに此郷の童子來りて孔子に見えんことを請へり。孔子拒まずして之を許されしかば、門人等疑ひ惑ひて、夫子は此不善の人を見るべきに非ずと怪めり。よりて孔子門人の惑を解きてのたまはく、たとひ不善の郷に居

る者と雖も、教誨の法は、善き道に進むを許して、其の惡しき方に退くをば許さざるなり。苟も道に進むに當りて、何ぞこれ迄の惡を惡むことを甚だしくするを用ひんやと。門人等の度量の狹隘なるを責め、且つのたまはく、凡そ人己を慮くし、自ら修潔して道に進み來る者あらば、其の修潔するを許して教誨すべし。其の人の將來の行如何は保證すること能はざるなりと。

【考異】往 將來の義、皇、邢兩疏竝に既往即ち前日の義とし、朱註亦之に従ふは謬れり。保は將來を保證する義なり。

【餘義】此章文理もと通じ難きに非ず、孔、鄭兩註、之を盡せり。而るに朱子疑ひて錯簡闕文あらんといふは何ぞや。謝良佐曰く「人苟も己ヲ潔クスルノ心アリテ以テ進マバ、亦與スベキナリ。豈其ノ異日畔カザルコトヲ保センヤ」と。此説を是なりと爲す。

仁齋曰く「聖人物ヲ待ツノ仁、猶ホ天地ノ萬物ヲ造化スルガ如シ。生ズル者ハ、自ラ生ジ、殺スル者ハ自ラ殺ス。而シテ物ヲ生ズルノ心、自ラ其ノ間ニ息ムコトナシ。何ゾ其レ大ナル哉。孟子曰ク『往者不_レ追、來者不_レ拒。苟以_レ是心_レ至、斯受_レ之而已矣』」ト。能ク夫子ノ道ヲ發シテ之ヲ萬世ニ詔グル者ト謂フベキナリ。異端ハ人ヲ誘ヒテ己ニ從ハシメ、小儒ハ人ノ己ヲ逃ルルヲ惡ム。聖人ノ道ト、固ニ天淵ナリ」と。

○子曰_レ仁遠乎哉。我欲_レ仁、斯仁至矣。

【譯讀】子曰く、仁遠からんや。我仁を欲すれば、斯に仁至る。

【章旨】 仁の甚だ近きを言ひたまへるなり。

【直解】 孟子は「仁也者人也」(七九頁)と曰ひ、中庸、第十三章には「道不远人」(一四頁)といへるが如く、仁は人人性中の徳なれば、遠く人とかけ離れて外に在る者にあらず。されば之を求むる時は、誰にても求め得べし。故に孔子のたまはく、人の仁を以て遠しと爲す者は、之を欲することの誠ならざると、行ふことの篤からざるとの致す所なり。仁豈遠きにあらんや。我の心誠に仁を求めば、則ち仁は求むるに随ひて至るものなりと。孟子、告子上篇に「仁義禮智、非自外鑠也。我固有所之也。弗思耳矣。故曰、求則得之、舍則失之」(四一頁)とあるは、此章の義を祖述せしなり。

○陳司敗問、昭公知禮乎。孔子對曰、知禮。孔子退、揖巫馬期而進之、曰、吾聞君子不黨。君子亦黨乎。君娶於吳、爲同姓。謂之吳孟子。君而知禮、孰不知禮。巫馬期以告。子曰、丘也幸。苟有過、人必知之。

【譯讀】 陳の司敗問ふ、昭公禮を知れるかと。孔子對へて曰く、禮を知れりと。孔子退きたまふ。巫馬期を揖して之を進めて曰く、吾聞く、君子は黨せずと。君子も亦黨するか。君吳に娶る。同姓たり。之を吳孟子と謂ふ。君にして禮を知らば、孰か禮を知らざらんと。巫馬期以て告ぐ。子曰く、丘や幸なり。苟も過有れば、人必ず之を知ると。

【章旨】 聖人が善は則ち君に歸し、過は則ち己に歸したまふ忠厚の意を記するなり。

【字義】 ○陳 國の名。○司敗 官の名、即ち司寇なり。左傳、文公十年の杜註に「陳、楚へ司寇ヲ名ヅケテ司敗ト爲ス」と。司敗の氏名を逸したるなり。○昭公 魯の君、名は稠、襄公の子、威儀の節に習へり。當時以て禮を知ると爲す。故に司敗以て問ふことを爲す。而して孔子之に答へたまふこと此の如し。○揖 古人相見て前に進ましめんと欲するときは、皆先づ之を揖するなり。揖は手を拱きて禮すること。○巫馬期 巫馬は姓、期は字、名は施、孔子の弟子。○黨 朋比なり、仲間の方が相助けて非を匿すが如きの類をいふ。○吳孟子 周の禮に同姓を娶らず、而るに魯は周公の後、吳は太伯の後にして、同じく姫姓の國なり。昭公禮を犯して吳國の女を娶る、例に之を吳姬と稱すべし。而るに之を吳孟子と謂ふは、之を諱みて宋の女、子姓の者の如くするなり。

【直解】 陳の司敗の某が孔子に問ひて曰く、貴國の先君昭公は禮を知れる人なりと聞き及べるが、果して世評の如く禮を知れる君なるかと。孔子對へてのたまふに、然り禮を知れる君なりと。蓋し司敗の意は、昭公同姓の女を娶られし非禮の事を心に疑ひて問ひしなれども、顯にそれと口に出ださざるなり。故に孔子も亦但昭公の禮を知り居らるる點に就きて、かくは答へたまひしなり。孔子已に答へて退かれたる後、司敗、孔子の門人巫馬期に揖禮して、之を己の前に進め近づけていふやう、吾、君子は道を直くして行ふ者なれば、阿黨して人の非を匿すなどの事はなき者なりと聞けるが、今孔子の御答に由りて觀れば、君子も亦人に阿黨する事あるか。それ昭公は吳に娶られしが、吳は魯と同じく姫姓の國なり。禮に同姓に娶らずとあれば、昭公吳に娶るの非禮を掩ひ匿さんとして、其の女

を吳孟姬といはずして、吳孟子といひ、子姓の國の女の如くせられたり。昭公の非禮も亦甚だしといふべし。此の如き非禮の君にして、孔子の御答の如く禮を知れる君といふことを得ば、天下誰人か禮を知らざる者あらんや。されば孔子の如き君子の人も、亦阿黨せらるる事あるかと。巫馬期、司敗の言を以て、孔子に告げければ、孔子自ら答を引きてのたまはく、凡そ人の不幸とする所は、己の過を聞かざるより甚だしきはなし。而るに今丘や幸なり、苟も過あれば人必ず之を知りて告げ教へ呉るるなりと。孔子自ら君の惡を諱むと謂ふべからず。又同姓の女を娶るを以て禮を知れりと爲すべからず。故に其の禮を知ると知らざると、己の黨すると黨せざるとを辯解せずして、但自ら己の過として辭したまはざるは、實に忠厚の至情にして、萬世人臣の法則と爲すべきなり。

【考異】○孔子對曰 諸本對字なし、今皇本に従ふ。○娶 諸本取に作る、取は娶の古字。

【餘義】左傳、昭公五年に「公如晉、自郊勞、至于贈賄、往くに郊勞あり、去るに贈賄あり」無失禮、晉侯謂二女叔齊二曰、魯侯不亦善於禮乎。對曰、魯侯焉知禮。公曰、何爲、自郊勞至于贈賄、禮無違者。何故不知。對曰、是儀也。不可謂禮」と。これ當時昭公の知禮の稱ある所以なり。

○子與人歌而善、必使反之、而後和之。

【譯讀】子人と歌ひて善ければ、必ず之を反さしめて、而る後に之に和す。

【章旨】孔子、人の善を取るを樂みたまふことを記するなり。

【字義】○善 音律の善く調ふをいふ。○反 復なり「カヘサウセシメテ」とも讀む。復ひ歌はしむる

義、復ひ歌はしむる者は、其の之を詳にするを得て、其の善を取らんが爲めなり。○和 去聲、自ら之に和して歌はるるなり、これ其の詳を得るを喜びて其の善に與せらるるなり。

【直解】孔子、人と共に詩を歌はるる時、人の歌ふ所、善く音律に叶ふときは、必ず重ねて再び歌はしめて、詳かに之を聴き、詳かに味ひて、然る後に自ら歌ひて之に和したまひぬ。蓋し聖人の氣象從容として誠意懇に到り、其の謙遜審密にして人の善を掩はざること此の如し。大舜の己を捨てて人に從ひ、人の善を取ることを樂まれたると(孟)異なることなし。一歌の善に於てすら之を好みたまふこと此の如くなれば、他の百事は推して知るべきなり。

○子曰、文莫吾猶人也、躬行君子、則吾未之有得。

【譯讀】子曰く、文は吾猶ほ人の如きこと莫からんや。君子を躬行することは、則ち吾未だ之を得ることあらず。

【章旨】孔子、自ら謙して人に躬行を勉めしめたまひたるなり。

【字義】○文 文學なり、即ち文行忠信の文なり。孔子、文を以て自ら任じたまふは「文王既没、文不在茲乎」(二八)と曰はれたるにても知るべし。○莫 無なり、朱註に「疑ノ辭ナリ」とあれども、非なり。莫はもと疑の辭にあらず、只文勢の上より疑の意となるなり、句末の也の下に當に乎字あるべきを略せしなり。

【直解】孔子ののたまはく、文學の事は吾は人に過ぐることを能はざれども、猶ほ人に及ぶ事を得ること

なからんや。或は人に及ぶべきなり。但君子の道を實踐躬行することは、吾は未だ之を得ること能はざるなりと。自ら謙してのたまへるなり。是に由りても文學は易くして躬行は難きことを知るべし。

【考異】文莫吾猶人也 一説に文莫は即ち恣愎の假借、説文に「恣、強也、愎、勉也」とあり。楊升庵外集經說部に「晉書、樂毅論語、駁曰、燕齊謂、勉強、爲、文莫」とありて、文莫は勉勉の義とし、「文莫ハ猶ホ人ノ如キナリ」と讀み、勉強して君子の道を知るは、人竝に爲すことを得と雖も、君子の道を躬行する事は、未だ爲し能はずと解し、徂徠も亦之に従ひ新説を出だして曰く「按ズルニ『文莫、吾猶、人也』トハ、孔子ノ時ノ諺ナリ。言フ心ハ、凡ソ事勉スレバ、則チ皆人ニ及ブベキナリト。孔子之ヲ誦シテ曰ク、世人言フ所、此ノ如シ。然リト難モ君子ノ道ヲ躬行スルニ至リテハ、則チ吾未ダ其ノ人ヲ得ザルナリト。世ノ君子ノ少キヲ歎ジタマヘルナリ」と。升庵は好みて奇説を出だし、徂徠も亦時に異見を立つ。盡くは従ふべからずと雖も、此説の如きは據る所ありて意も亦通すれば、一説として存すべきなり。

○子曰、若聖與仁、則吾豈敢抑爲之不厭、誨人不倦、則可謂云爾已矣。公西華曰、正唯弟子不能學也。

【譯讀】子曰く、聖と仁との若きは、則ち吾豈敢てせんや。抑も之を爲びて厭はず、人を誨へて倦まず。則ち云爾と謂ふ可きのみと。公西華曰く、正に唯弟子學ぶこと能はざるなりと。

【章旨】時人、仁聖を以て孔子を稱贊せし者あり。孔子謙して自ら居りたまはざるなり。

【字義】○聖 聰明睿智にして、道德の至極せる義。○仁 心の徳の全くして人道の備はる義。○抑

反語の辭、俗語、ソレトモ。○爲 猶ほ學ぶといふが如し。「女爲、周南、召南、二平」(四六)の爲の如し。「ナシテ」と讀みて仁義の道を行ふと解するは非なり。○云爾已矣 云爾は猶ほ此の如しと前言を約するの辭なり。下に已矣の二字あれば、此の如きに止まりて更に復他の説なきをいふ。○正唯 正とは指す所あるの辭なり。正唯は古註に「如所レ言」とあるを是となす。

【直解】當時、孔子を贊して聖人仁者と稱する者あり。故に孔子之を辭してのたまはく、聖と仁との如きは、徳の極至にして、吾豈敢て此大徳の稱に當ることを得んや。然れども吾は仁聖の道を學びて厭ふことなきと、又之を學びて知りたる所を、人に誨へて倦まざると、此二者だけは此の如く然りといふことを得べきのみ。此他に稱すべき者なきなりと。時に弟子の公西華が傍に侍り居て、孔子の此御言葉を聞きて、唯其の厭はず倦まずとのたまひし其の事こそ弟子どもの學ぶこと能はざる所なれ。況や仁聖に於てをやと、深く仰敬せしなり。蓋し孔子の謙辭は、述而篇の「子曰、默而識之、學而不厭、誨人不倦、何有於我哉」(二〇)と、語意正に同じ。夫子學を好むことの深き、常に自ら視たまふこと怗然(心に満足せざる貌)たり。故に其の言に發したまふもの毎此の如きなり。

【考異】陳天祥曰く「集註ニハ爲ヲ行爲ノ爲トナスハ、非ナリ。豈躬ニ仁聖ヲ行ヒ、又人ニ仁聖ヲ教ヘテ、其ノ人仁聖ニ非ザル者アラシヤ。果シテ此説ノ如クナレバ、則チ之ヲ爲シテ厭ハズ、人ヲ誨ヘテ倦マザルハ、是レ聖ト仁トヲ以テ自ラ居ルナリ。謙詞ノ意ト不倫ナリ」と。此説を是と爲す。

○子疾病。子路請禱。子曰、有諸。子路對曰、有之。曰、誅曰、禱。爾于

上下神祇。子曰、丘之禱久矣。

【譯讀】子疾病なり。子路禱らんことを請ふ。子曰く、諸れ有りやと。子路對へて曰く、之れ有り。曰く、誄に曰く、爾を上下の神祇に禱ると。子曰く、丘の禱ること久しと。

【章旨】子路、師を愛するの至情、神に禱りて孔子の病を禳はんとす。孔子諭すに、己は平生身を修めて罪を天地に獲ざらんと心に禱ること久しければ、今改めて禱りて福を求むるに及ばざることを以てしたまひたるなり。

【字義】○病 疾の危篤なるなり。○禱 鬼神に禱りて災禍を禳ひ、幸福を求むるなり。○有諸 かかる事例ありやと問ふなり。○誄 禱篇の名なり。誄は累なり、功德を累ね述べて福を求むるなり。○上下 天地をいふ、天に神といひ、地に祇といふ。

【直解】孔子の御病危篤に及ばれし時、子路迫切の情已むこと能はず、天地の神明に向かひて平癒の祈禱を爲さんと請ひけるに、孔子は其の至情を酌みて、直ちに之を拒みたまはずしてのたまはく、疾病の爲めに神に禱るといふこと、これまでその事例ありや如何と、反問したまふ。子路對へていふ。其の例あり、其の證は誄辭の中に、汝を天地の神明に禱るとの詞あり。是に由りて之を觀れば、神に禱るも不可ならざるべしと。孔子又のたまはく、然らば神に禱るとは、過去の罪過を悔いて、將來の幸福を求むるの意なるべし。己は平生天命を敬ひ畏れ、戰戰兢兢として罪を天地神明に獲ざらんことをつとめて、未だ嘗て一日として怠らず。禱る者は本此心に過ぎずとすれば、丘の禱ることは

己に久しといふべし。今改めて禱ることを用ひんやと。即ち「修身以俟命」(註)の義を述べて、子路を諭したまひしなり。

【考異】誄 左傳、哀公十六年に「夏四月己丑、孔子卒。公誄之曰、云云」また周禮、大祝の六辭に「五曰、誄、六曰、誄」の鄭司農の註に「禱ハ天地社稷宗廟ニ禱ルヲ謂ヒ、誄ハ生時ノ德行ヲ積累シテ以テ之ニ命ヲ錫フヲ謂フ」と。朱子は之に本づきて「誄トハ死ヲ哀ミテ、其ノ行ヲ述ブルノ辭ナリ」と註せしも、必ずしも死者に限らず、孔安國は「誄ハ禱篇ノ名ナリ」と謂へり。誄に兩義あることを知るべし。一説に誄は古、誄に作る、説文に「誄ハ禱ナリ」と。

子曰、奢則不孫、儉則固。與其不孫也、寧固。

【譯讀】子曰く、奢なれば則ち不孫なり。儉なれば則ち固なり。其の不孫ならん與は、寧ろ固なれ。

【章旨】奢と儉との害を述べて世人を警醒したまひたるなり。

【字義】○奢 衣食住などの己の身分に踰えて贅澤なるをいふ。○不孫 孫は遜に同じ。順なり。不孫は不順にして禮を失する義。○儉 節約が中を失して禮に及ばざる點をいふ。○固 陋なり。

【直解】凡そ禮は過不及なき中を得るを貴ぶは勿論なれども、中は容易に得べからず。故に孔子曰く、禮に過ぎて奢侈なれば、則ち分に踰え、上を僭して遜順ならざるの弊に陷る。又禮に及ばずして儉吝なれば、自然世間の交際なども好まず、其の弊たる固陋にして文なきに至る。二の者は、皆禮の中を得ずして共に弊害あるを免れざれども、儉の害は小にして、奢の害は大なり。即ち儉にして

固陋なるは免に角一身を保つべきも、奢にして不孫なるは終に身を破るに至る。されば、其の奢にして不孫ならんよりは、吾は寧ろ儉にして固陋なる方に従はんと。晁氏曰く「已ムコトヲ得ズシテ時ノ弊ヲ救フナリ」と。

○子曰君子坦蕩蕩小人長戚戚

【譯讀】子曰く、君子は坦かにして蕩蕩たり。小人は長く戚戚たり。

【章旨】君子小人の氣象によりて、其の心術の異なることを知るべきことを語りたまひたるなり。

【字義】○坦 平なり、心の平易なる義。○蕩蕩 寛廣なる貌。○戚戚 憂懼の多き貌。

【直解】孔子の曰く、君子は何事も義理に循ひ、利害得失の私に累はされず、内に省みて疚しからず。

(三九)故に如何なる逆境に在りても、其の容常に坦然として寛廣の貌あり。之に反して小人は則ち利を貪りて、心常に外物に役せらる。故にたとひ富めりと雖も、足ることを知らずして、其の容長く憂ひ苦める状ありと。程子曰く「君子ハ理ニ循フ。故ニ常ニ舒泰ナリ。小人ハ物ニ役セラル。故ニ憂戚多シ」と。語由に「君子居易以俟命、故常康泰。小人行險以徼幸(直解)故常憂勞」と。之を得たり。

○子温而厲威而不猛恭而安

【譯讀】子温にして厲し、威ありて猛からず、恭にして安し。

【章旨】門人が、孔子中和の氣の容貌の間に、見ゆる者を記するなり。

【字義】○温 熱からず寒からず、春風の心地よきが如く、和順にして親むべき氣象をいふ。○厲 嚴肅なり。きびしきこと。○威 威嚴なり。○猛 威嚴の甚だしきに過ぎて「テアラキ」なり。○恭 遜順にして謹む心の外貌に表るるをいふ。○安 勉めずして樂樂たる貌。

【直解】孔子の徳容は温順和易にして親むべきの中に、自ら嚴肅にして犯すべからざるものあり。又威嚴ありて畏れ敬ふべけれども、猛く烈しきに失することなし。又「恭而無禮則勞(八四)」ともあるが如く、恭も其の度に過ぐる時は、身體の勞すること甚だしき者なるが、孔子は心と貌と一なるが故に、恭を行ふにも、自ら樂樂と安らかに見えて、少しも窮屈に固くなりたまふことなしと。よく夫子の盛徳の容を状せりといふべし。子張篇に「子夏曰、君子有三變。望之儼然。即之也温。聽之其言也厲(六六)」とあると、互に相發す。

【考異】○徵に「温而厲トハ、即之温。聽其言厲ナリ。威而不猛、恭而安トハ、望之儼然ナリ」と。然れども此章の厲は必ずしも言とのみ限らざるを是と爲す。○子 陸徳明曰く「一本ニ子ヲ子曰ニ作ル。皇本、君子ニ作ル」と。されども今存する所の皇本には君字なし。但子張篇の「君子有三變」の義疏に「所以前卷云君子温而厲也」とあるを見れば、今の皇本は唐以後に於て一の君の字を脱せしを證すべきなり。

【餘義】後案に「温而厲ハ、仁中ニ義アルナリ。威而不猛ハ、義中ニ仁アルナリ。恭而安ハ、禮、理ノ當然ニ順ヒ、性ノ自然ニ率フナリ」と。

泰伯第八

此篇首末に聖賢の徳を記し、中間論する所は、皆己を修め人を治め、禮を勉め樂を贊するの事にして、以て孔子位を獲ば、其の取舍損益する所、亦二帝三王と同じきを見ず。前篇孔子の行を論するに次ぐ所以なり。全篇凡そ十九章。

○子曰、泰伯其可謂至徳也已矣。三以天下讓、民無得而稱焉。

【譯讀】子曰く、泰伯は其れ至徳と謂ふ可きのみ。三たび天下を以て譲り、民得て稱するなし。

【章旨】孔子、泰伯の至徳を贊美せられたるなり。

【字義】○泰伯 周の大王の長子なり。次を仲雍と曰ひ、次を季歴といふ。季歴は昌を生む、昌聖徳あり。大王遂に位を季歴に譲り、以て昌に及ぼさんと欲す。泰伯之を知りて、即ち仲雍と逃れて荆蠻に之く。是に於て大王乃ち季歴を立て、國を傳へて昌に至り、天下を三分して其の二を有つ。之を文王と爲す。文王崩じて子發立つ。遂に商に克ちて天下を有つ。是を武王と爲す。○至徳 遜讓の徳の至極して復加ふる者なきを謂ふ。○三以天下讓 數次天下を譲りて取らざるをいふ。泰伯の譲りたるは國なるに天下といふは、其の後世、天下を有らしによりて後より追稱せし辭なり。○無得而稱 其の遜ることの隱微(カスカニシテ)にして跡の見るべきなきをいふ。

【直解】孔子の曰く、泰伯は至極せる遜讓の徳あるものといふべきなり。其の故は己の取るべき天

下を固く譲りて取らず。且つ其の遜ることの隱微にして跡方の見るべきものなければ、人の得て稱説する所なきは、即ち其の至徳たる所以なりと。仁齋曰く「聖賢ノ心、皆天下ノ爲メニシテ己ノ爲メニセズ、泰伯ノ季歴ニ讓ルハ、蓋シ斯民ノ爲メニ計ルナリ。其ノ後文武ノ道、大イニ天下ニ被リ、民陰ニ其ノ賜ヲ受ク、而カモ實ハ泰伯ノ徳タルヲ知ラズ。此レ夫子ノ其ノ至徳ヲ歎ジタマフ所以ナリ」と。

【考異】○三讓 鄭玄は「大王疾ム、泰伯因リテ吳越ニ適キ、藥ヲ探ル、大王没シテ而シテ返ラズ、季歴喪主タリ。一讓ナリ。季歴之ヲ赴グ、來リテ喪ニ奔セズ。二讓ナリ。喪ヲ免スルノ後、遂ニ斷髮文身ス。三讓ナリ。三讓ノ美ハ皆隱蔽シテ著レズ。故ニ人得テ稱スルナシ」といひ、明かに三度の讓を擧げたれども確據なし。故に取らず。○無得而稱 陸徳明曰く「得ハ一本ニ徳ニ作ル」と。後漢書、丁鴻傳論にも、此章を引きて得を徳に作る。後漢書、黃憲傳に「將以道周性全、無徳而稱乎」と。語意正に同じ。蓋し徳・得二字古相通す。いづれにても差支なかるべし。

【餘義】陳天祥曰く「泰伯ハ商道ノ衰ク衰フルヲ見、生民ノ其ノ生ヲ聊ンゼザルヲ憫ムニ方リ、其ノ弟ハ賢ナリ、其ノ姪ハ聖ナリ。弟承クルトキハ、姪嗣グコトヲ得。故ニ國ヲ王季ニ致シテ以テ文王ニ及ボシ、殷商ヲ輔翼シ、以テ斯民ヲ救卹(メグム)セシメント欲ス。是レ其ノ讓ヲ爲スヤ、惟是レ天下ノ故ヲ以テナリ。然レドモ讓ハ美德ナリ。己其ノ美德ヲ有スレバ、父弟ヲシテ其ノ惡名ヲ受ケシム。猶ホ其ノ至レル者ニ非ズ。鄭玄曰ク「大王疾メリ、泰伯吳ニ適キテ藥ヲ采リ、大王歿スレドモ返ラズ」と。理或ハ然ラン。既ニ采藥ニ託シテ去ルトキハ、大王ニ於テハ、長ヲ舍テテ少ヲ立ツルノ嫌ナク、王季ニ於テハ、弟ヲ以テ兄ニ先ンズルノ疑ナク、其ノ授受ノ間、偶然止ムコトヲ得ザルニ出デ

テ然ル者ノ如シ。其ノ跡隱微ニシテ、忠孝ノ至レル、孰カ知リテ孰カ之ヲ偵フコトヲ得ン。此レ其ノ至徳タル所以ナリ。故ニ夫子之ヲ美メタマヒシナリ」と。此説允當從ふべし。但「以天下讓」を解して、天下の故を以て其の國を讓ると爲すこと、程明道が「泰伯ハ王季ノ賢ナル、必ズ能ク王業ヲ成サンコトヲ知レリ、故ニ天下ノ爲メニシテ之ヲ遜ル」といひ、張栻が「泰伯ハ文王ノ聖徳アルヲ知リテ天下ヲシテ其ノ澤ヲ被ラシメンコトヲ欲ス。故ニ國ヲ王季ニ致スナリ。故ニ『以天下讓』ト曰フハ、天下ノ爲メニシテ讓ルヲ言フナリ」といへると同じく、其の説通ぜざるにあらずと雖も、文理に於て稍安帖ならず。故に從はず。

○子曰、恭而無禮則勞、愼而無禮則憊、勇而無禮則亂、直而無禮則絞。

【譯讀】子曰く、恭にして禮無ければ則ち勞す。愼にして禮無ければ則ち憊す。勇にして禮無ければ則ち亂す。直にして禮無ければ則ち絞す。

【章旨】善き行も禮を以て節せざれば弊を生ずることを説きたまひたるなり。

【字義】○禮 人事上の儀則にして人の行爲の規矩準繩たるもの。○勞 困苦なり。○憊 畏懼なり。

○亂 亂暴なり。○絞 急切(キビ)なり、人の非を責めて少しも假借せざる義。

【直解】孔子のたまはく、人に對して恭敬することは善き行なれども、餘り極端に恭敬して、禮の節文なきときは、徒に自ら己の心身を困苦するのみにて、却りて人に侮らるるなり。又事に臨みて謹愼

することは、善き行なれども、禮の節文なくして謹愼に過ぐるときは、徒に畏懼する所の臆病者となるなり。又剛勇も善き行なれども、禮の節文なきときは、勇に過ぎて、上を犯し亂を爲すに至る。又質直にして隠すことなきは善き行なれども、禮の節文なきときは、絞急にして少しも假借する所なく、甚だしきは、父の羊を攘みしを證するに至る(四四)すべて如何なる善行も禮を以て程能く之を調節することなき時は、遂に其の徳を全くすること能はざるのみならず、其の弊害を免れざること此の如し。禮の須臾も離るべからざる所以を知るべしと論したまひたるなり。

【餘義】恭愼勇直は性中の徳なり。然れども禮の節文なければ、則ち勞意亂絞の四弊あり。而して無禮は則ち學ばざるに由るの弊なり。陽貨篇の「六言六蔽(六一)」と、其の義互に相發す。

○君子篤於親、則民興於仁、故舊不遺、則民不偷。

【譯讀】君子親に篤ければ、則ち民仁に興る。故舊遺れざれば、則ち民儉からず。

【章旨】上に在る者、下民を教化せんと欲せば、身を以て率先すべきことを説く。蓋し孔子の言ならん。

【字義】○君子 上に在る人をいふ。○親 親族なり。○興 起なり、觀感興起するをいふ。○儉 薄なり。

【直解】上に在る者、能く恩愛ありて、親族に篤くすれば、下民は其の行を見倣ひ、自らそれに感化せられて、仁愛の心を興起し、鬭ぎ争ふなどの事は爲さざるなり。又朋友臣僕などの舊き好ある者を忘れずして、厚く之を遇するときは、下民はそれに化して自ら忠厚の心を興起し、復輕薄なる風俗

などは無きに至る。すべて上に在る者の行は、下民に感化を及ぼすものなれば、上たる者は己の行を謹まざるべからずとなり。陳樸曰く「親ヲ親ムハ仁ナリ。上、仁ナレバ、下、仁ニ興ル、故舊ヲ遺レザルハ厚キナリ。上、厚ケレバ、下、厚キニ歸ス。上ノ行フ所ハ、下ノ效フ所ナリ」と。

【考異】此章、舊本皆前章と合せて一章と爲せども非なり。前後の文勢事理皆相類せず。吳棫が「君子以下當ニ自ラ一章ト爲スベシ」といへるに従ふべし。但吳氏が此章を以て學而篇の「慎終追遠」の章と語意の似たるを以て、曾子の言と爲すは、臆斷に失せり。聖賢の言語、互に相類する者なからんや。漢書、平帝紀、元始五年の詔に上の二句を引きたるに、師古が註して「此レ論語、孔子ノ辭ヲ載スルナリ」といへれば、蓋し本子日の二字ありしを脱せしならんか。按ずるに此章、微子篇に、周公の言を載せて「君子不施其親、故舊無大故、則不棄也」とあると、互に相發す。

○曾子有疾、召門弟子曰、啓予足、啓予手。詩云、戰戰兢兢、如臨深淵、如履薄冰。而今而後、吾知免夫小子。

【譯讀】曾子疾有り、門弟子を召して曰く、予が足を啓け、予が手を啓け。詩に云ふ、戰戰兢兢として、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如しと。而今而後、吾免るるを知るかな。小子と。

【章旨】曾子死に臨み、己が平生省察戒慎して父母の遺體を全くせし事を説き、門人を警醒せしなり。

【字義】○啓 開なり、弟子をして其の衾を開きて之を視しむるなり。○詩 詩經、小雅小旻の篇なり。

○戰戰 恐懼なり。○兢兢 戒慎なり。○臨 深淵。○履 薄氷。○陷ら

んことを恐るるなり。○而今而後 上の而は乃と同じ、乃ち今日よりして後といふ義。○小子 弟子なり、之を呼ぶ者は能く其の言を聽識せしめんと欲すればなり。

【直解】曾子の學は孝を以て主と爲す。平生以爲へらく、身は父母の遺體なれば、敢て毀傷（ソコナヒ）せずと。故に疾みて將に死せんとするや、門弟子を召して曰く、衾を開きて予が足を視よ、又衾を開きて予の手を視よ（毀傷の痕跡なきを知らしめんと欲してなり）詩經に戰戰と恐懼し、兢兢と戒慎して、深き淵に臨みて墜ちなんことを恐るるが如く、薄き氷を履みて陥らんことを恐るるが如くすといへるが如く、吾は平日戒慎して父母の遺體を毀傷せざらんことを心掛けたりしが、乃ち今日以後此身の毀傷を免るることを知るかなと。語り畢りて又小子とて門弟子を呼びかけたるは、能く己の言を聽きて忘るることなく、十分に此意を體せしめんことを欲してなり。范氏曰く「身體スラ猶ホ虧ク可カラザルナリ。況ヤ其ノ行ヲ虧キテ以テ其ノ親ヲ辱ムルヲヤ」と。此章を讀めば、曾子の至孝なりしことを知り、且つ其の弟子を教ふるにも孝を以て中心とせしことを知るべきなり。

【餘義】此章は孝經に「身體髮膚、受之父母。不敢毀傷、孝之始也」とあると、其の義同じ。

○曾子有疾、孟敬子問之。曾子曰、鳥之將死、其鳴也哀。人之將死、其言也善。君子所貴乎道者三、動容貌、斯遠暴慢矣、正顏色、斯近信矣、出辭氣、斯遠鄙倍矣、籩豆之事、則有司存。

【譯讀】曾子疾有り、孟敬子之を問ふ。曾子言ひて曰く、鳥の將に死なんとするや、其の鳴くや哀し。人の將に死なんとするや、其の言ふや善し。君子道に貴ぶ所の者三あり。容貌を動かして、斯に暴慢に遠ざかり、顔色を正しくして、斯に信に近づき、辭氣を出だして、斯に鄙倍に遠ざかる。籩豆の事は、則ち有司存せり。

【章旨】上に在る君子は、先づ己の身を修めて政を爲すの本を勉むべし。器數の末に至りては、各有司の職守するあり。君子の急務とする所にあらざるを説きて、孟敬子を戒めたるなり。

【字義】○孟敬子 魯の大夫、仲孫氏、名は捷、武伯の子なり。○問之 其の病氣を見舞ひたるなり。○言 孟敬子の問を待たずして曾子自ら言ふなり。○鳥之將死云云 鳥は死を畏る。故に鳴くことや哀し。人は窮すれば、本心に反る。故に言ふことや善し。此二句は古語なり。先づ此を引くものは敬子の審かに其の言を聽かんことを欲し、且つ自ら謙するの辭なり。○所貴乎道 鄭玄曰く「此道ハ禮ヲ謂フナリ」と。○容貌 一身を總べて謂ふ。○斯 三の斯の字は「スナハチ」と讀みても意は同じ。○暴慢 暴は粗厲(シラ)なり。慢は放肆(ホシイ)なり。○信 實なり、表裏一の如くなるなり。○辭氣 辭は言語の文あるなり。氣は聲氣なり。○鄙倍 鄙は凡陋なり。倍は背と同じ、理に背くをいふ。○籩豆 籩は竹豆、豆は木豆、皆祭祀に用ふる禮器なり、三禮圖説に「籩ハ糞栗脩脯糗餌ノ屬ヲ盛リ、豆ハ菹醢ノ屬ヲ盛ル」と。

【直解】曾子疾ありし時、魯の大夫の孟敬子といふ人、往きて之を見舞へり。曾子、孟敬子に告げんとする所あれども、其の忽略(ユスルカセ)にして心に留めざらんことを恐れ、先づ古言を引きていふやう、

鳥の將に死なんとするや、死を畏れて其の鳴く聲、殊に哀く聞ゆるものなるが、人の將に死なんとする時は、平生不善の者と雖も、私慾を離れて其本心の善に反るが故に、其言ふ所は皆理に合する善言なり。予も今死なんとする際なれば、其の言ふ所は、能く心に留めて之を記識し置かれよ。さて君子の禮に於いて貴び重んずる所の者三事あり。一を容貌と爲す。容貌を動かしては溫恭を主とし、一舉一動、粗厲放肆の行を絶ち遠ざけて、身の邊に至らざらしむべし。一を顔色となす。顔色は心の表なれば、必ず正しく莊かにして、信實に近づき、虚飾に陥らず。表裏一の如くすべし。一を辭氣と爲す。辭氣は心の文なれば、野鄙にして章なく、悖謬(ヤマトリア)して理に背くが如き語氣を絶ち遠ざけて、口の邊に至らざらしむべし。凡そ此三者は皆身を修むるの要にして、政を爲すの本たり。君子たる者の必ず勉め行はざるべからざるものなり。彼の祭に供物を盛る籩豆を陳ね設くる事の如きは、禮の末節にして、それぞれ之を司る役人の存在するあり。かかる細務は君子の重んずる所にあらざるなりと。蓋し敬子は平日心を細務に留めて、大本を忽にするの人なり。故に曾子之を戒むること此の如し。亦對症與藥の例とすべし。

【考異】鄭玄は、此章に註して「容貌ヲ動かシテ能ク濟濟踏踏(威儀ある貌)タルトキハ、則チ人敢テ之ヲ暴慢セズ。顔色ヲ正シクシテ能ク矜莊嚴栗(ツツシム)ナルトキハ、則チ人敢テ之ヲ欺詐セズ。辭氣ヲ出ダシテ、能ク順ニシテ之ヲ説ケバ、則チ惡戻ノ言、耳ニ入ルコトナシ」といひ、容貌・顔色・辭氣の三の者を謹めば、人の暴慢の仕向け、鄙倍の言語を遠ざけ、人の信義を以て近づき來るやうになる義と解し、暴慢・信・鄙倍の三者を以て他人が君子に加ふるものとせり。それにて通ぜざるにあら

ざれども、朱註の如く自修の工夫を語りたるものにて、己が暴慢の容貌、信實ならざる顔色、鄙倍なる辭氣を遠ざけて、之を爲さざるやうにする義と解するを以て穩當なりとす。

○曾子曰、以能問於不能、以多問於寡、有若無、實若虛、犯而不校、昔者吾友、嘗從事於斯矣。

【譯讀】曾子曰く、能を以て不能に問ひ、多を以て寡に問ひ、有れども無きが若く、實つれども虚きが若くし、犯さるるも校せず。昔者吾が友、嘗て斯に從事せり。

【章旨】曾子が亡友の無我にして徳量の大なるを歎美せしなり。

【字義】○能不能 材藝を以て言ふ。○多寡 聞見を以て言ふ。○有無 道を以て言ふ。○虛實 徳を以て言ふ。○犯 彼より我を侵犯するなり。○校 計校なり、校較通す。彼我の是非を比較するなり。○吾友 馬融曰く「友ハ顔淵ヲ謂フ」と、或は然らん。○事 請事ニ斯語ニの事の如し。

【直解】曾子曰く、己材藝ありながら、却りて他の材藝なき者に問ふ。是れ蓋し己の材藝あり、他の材藝なきを知りて故らに問ふにはあらず。己の材藝あるを忘れて然するなり。又己多く見聞して知る所あるに、却りて他の知る所寡き者に問ふ。蓋し亦己の多く知る所あるを忘るるなり。又己道ありながら、自ら視ること無きが如く、己徳の充實する所ありながら、自ら視ること空虚なるが如し。蓋し皆己の道徳あるを忘るるなり。己に人と我との間なきが故に、人より我を凌ぎ犯すことありと雖も、是非曲直を計り較べて、自ら勝たんことを求むるなどの心なきなり。其の物我の間なくして

徳量の大なること知るべし。昔吾が友人に嘗て上の五事に従ひ勉め行ひたる者ありしが、今は乃ち死して此世に在らざるなりと。

【考異】犯而不校 包咸曰く「校ハ報ナリ、言フ心ハ、侵犯セラレテ報ゼザルナリ」と。亦通すれども、朱註「校ハ計校ナリ」の解を以て優と爲す。

○曾子曰、可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也。君子人與、君子人也。

【譯讀】曾子曰く、以て六尺の孤を託す可く、以て百里の命を寄す可し。大節に臨みて奪ふ可からざるなり。君子人か、君子人なり。

【章旨】才と節と兼ね全くして、而る後、君子と謂ふべきことを述べ。

【字義】○六尺之孤 幼にして父なき君をいふ。周禮の疏に「六尺ハ年十五ナリ」と。身長を以ていふ。周の六尺は我が四尺三寸餘に當る。○百里之命 百里は百里四方ある公侯の國なり、命は政令。執國命(五七)の命の如し。○臨 臨終の臨の如し。○大節 國家を安んじ、社稷を定むる重大の事件。○不可奪 傾け奪ふべからざる義。○與 疑の辭。○也 決する辭、問答を設け爲すは、深く必然を著して之を贊美するなり。句法全く禮記、仲尼燕居篇の「子曰、古之人與、古之人也」と同じ。

【直解】此章は次の章と共に、論語中にて名高き章なり。曰く、茲に人ありて十四五歳位の父なき幼君を委託して輔佐せしめても、安心が出来、方百里位の大國の政令を寄託(セカ)しても心配のなき人は、其

の才誠に得難き人物なり。已に人に過ぐるの才ありて、其の上に國勢艱難の際、人心危懼を抱く時に際會して、能く國家を安んじ社稷を定むるが如き重大の事件に臨みて、志を持すること堅定にして、薄平たる其の節操は利害の爲めに移し奪ふべからざる者あらば、君子の人と謂ふを得べきか、篤と考ふれば、言ふまでもなく、かかる人こそ信に君子の人と謂ふを得べきなれと。深く之を歎美せしなり。

【考異】大節 國家の大事を謂ふ。故に其の死生存亡にも關するなり。其の際に臨みて志を奪ふべからざるは、節操の堅固なる者にあらざれば能はず。大節を以て直ちに君子の節操と解すべからず。朱子が「其ノ才、以テ幼君ヲ輔ケテ、國政ヲ攝スベク、其ノ節、死生ノ際ニ至リテ奪フ可カラザルハ君子ト謂フ可シ」と註せしは、大節を人に屬して節操と爲す者の如く、語意明瞭ならず。何晏が大節は、國家を安んじ、社稷を定むるが如き大事と解せしに、従ふべし。

【餘義】加藤清正、嘗て人に謂ひて曰く、前田利家、晩年に儒學に志し、吾及び浮田秀家、淺野幸長を招き、語次論語の託孤寄命の章（即ち此章なり）を擧げたり。吾當時學ばず、其の何の謂なるかを解せざりしが、今にして之を思へば略曉る所あり。今の時に當りて此語を念はざる者は、恐らくは不忠不義に陥らんと。其の秀頼を奉じて家康と二條城に會見し、無事に禮を終へて歸るや、泣きて曰く、吾今日聊か太閤の恩に報い得たりと。嗚呼、清正の如きは、眞に能く論語を讀みたる者といふべきなり。廣瀬淡窗の調三加藤公廟詩に曰く「寸木難支大厦頽、丹心抵死未曾灰、遺孤可託眞君子、夙誦曾參一語一來」と。

○曾子曰、士不可以不弘毅、任重而道遠。仁以爲己任、不亦重乎。

乎死而後已、不亦遠乎。

【譯讀】曾子曰く、士は以て弘毅ならざる可からず。任重くして道遠し。仁以て己が任と爲す。亦重からずや。死して而して後に已む。亦遠からずや。

【章旨】士、弘毅ならざれば、以て仁を行ふに堪へざるを語るなり。

【字義】○士 學問して知識ある者の稱。○弘 大なり、器量の寛弘なるなり。○毅 強忍（シヨク）なり。

○任 負擔なり。荷物をいふ。○道 事業の經過に就きて言ふ。

【直解】士たる者は、器量寛弘にして「コセコセ」せず、持守強忍にして久しきに耐ふるの節操なかるべからず。何となれば其の負擔する所の任甚だ重くして、其の負擔して行く所の道途甚だ遠ければ、弘毅にあらざれば、之に耐ふること能はざればなり。さて任とは何を指して謂ふか、仁是れなり。仁は即ち人心の全徳、萬物の理備はらざることなし。さて士の仁に於ける寸時も身を離すこと能はざる者なり。孔子の「造次必於是、顛沛必於是」(二四)とのたまひしが如く、仁を行ふことは、一息の間斷あるべからず。或は一時何かの事に感激して、心を茲に用ふるあるも、やがて怠り廢するが如き、薄志弱行の者の決して負擔し得る所にあらず。かかる人心の全徳たる仁を擧げて之を己の身に體して勉め行はんと欲するは、其の任たる亦重からずや。此重任を負擔して一息なほ存すれば、其の負擔を卸すことを得ず、死して後に已むなり。其の經過する所の道も亦遠きに非ずや。故に器量寛弘にして持守強忍なるにあらざれば、決して之に耐へ得る所にあらざるなりと。

【考異】陳天祥曰く「弘毅ハ本兩截ニ非ズ。一ト爲シテ能ク此作用アリ。弘大ニシテ果毅ナリ、方ニ重キニ任ジテ遠キニ行ク。故ニ曰ク、士不レ可_レ以_レ不_レ弘毅一ト。朱註ニ言フ所ニ據レバ、弘ハ以テ重ニ屬シ、毅ハ以テ遠ニ屬シ、弘ト毅トヲ分チテ兩意ト爲ス。乃チ經文ヲ變ジテ士不_レ可_レ以_レ不_レ弘毅一ト、可_レ以_レ不_レ毅ト爲スナリ。經文ノ本旨ニ非ズ」と。此說從ふべし。

【餘義】徳川家康が「人ノ一生ハ重荷ヲ負ヒテ遠キ道ヲ行クガ如シ、急グベカラズ」といへるは、蓋し此章の意に本づく。

支那道統の相傳圖(元史、趙復傳を參看せよ)に、

伏羲—神農—黃帝—堯—舜—禹—湯—文—武—周公—孔子—(曾子)—子思—孟子—周子—(張子)—朱子とあり。これ宋儒の撰定せし所にして、周子以下に就きては非難もあるべけれど、曾子が孔子の道統を承けたることは、何人も異議なき所なるべし。是れ曾子が此章にいへるが如き素養と、孟子、浩然章に引く所の曾子の言なる「自反而縮、雖_レ千萬人、吾往_レ矣」(七三頁)とあるが如き勇氣に富みたるとに因るなり。孔子曾て曾子を評して「參也魯」(六三頁)と曰り。ただそれ魯(遲鈍)なり、故に能く寛廣強忍の徳を涵養して、夫子の後繼者たるを得たるなり。世の輕薄才子の徒、豈猛省せざるべけんや。

○子曰、興_ニ於_レ詩、立_ニ於_レ禮、成_ニ於_レ樂。

【譯讀】子曰く、詩に興り、禮に立ち、樂に成る。

【章旨】人の材徳を成す次第を語りたまひたるなり。

【字義】○興 起なり、感發興起なり、「興仁」(學解一)の興に同じ。○立 卓然として定立する義、物の移し動かす所とならざる義。○成 徳の成るなり。樂は和を主とす、和順中に積むは、徳の成る所以也。

【直解】詩は人情より出でて、美むる者あり、刺る者あり。其の言近くして曉り易く、反復詠歎の間、自然に人を感發し、良心を興起せしむる者あり。故に詩に興るといふ。禮は身を立て行を制するの規矩なり。人の動作には準則なかるべからず。苟も禮に由るときは、心行定立して、外物の爲めに移し動かさるる患なし。故に禮に立つといふ。樂は和ぎ樂むことを主とする者なれば、人の性情を養ひ、道徳に和順し、安んじて行ふに至るは、樂に由りて之を得るなり。故に樂に成るといふなり。

【餘義】詩・禮・樂の三者は學者終身の事業にして、孰を先とし孰を後とするの別なく、彼此相須ちて以て成る者なり。然れども徳に進むの順序は、詩に感興する所あるを以て先とするなり。さて其の感興せし心をば、禮を以て節制し、其の止るべき所に定立して、事物の爲めに其の心を動かし奪はれざるに至ることを得べきなり。然れども猶ほ未だ自ら勉めて之を行ふことを免る能はず。故に音樂の力を借りて、性情を涵養すれば、自ら和順中に積み、安んじ樂みて之を行ふことを得るに至る。是に於てか道徳の成就することを得るなり。

程子曰く「天下ノ英才少シト爲サズ。特ニ道學明カナラザルヲ以テ、故ニ成就スル所アルヲ得ザルナリ。夫レ古人ノ詩ハ、今ノ歌曲ノ如シ。閭里ノ童稚ト雖モ、皆之ヲ習ヒ聞キテ、其ノ說ヲ知ル。故ニ能ク興起ス。今ハ老師宿儒ト雖モ、尙ホ其ノ義ヲ曉ルコト能ハズ。況ヤ學者ヲヤ。是レ詩ニ興ルコトヲ得ザルナリ。古人灑掃應對ヨリ、以テ冠婚喪祭ニ至ルマデ、禮アラザルコト莫シ。今皆廢壞ス。

是ヲ以テ人倫明カナラズ。家ヲ治ムルコト法ナシ。是レ禮ニ立ツコトヲ得ザルナリ。古人ノ樂、聲
音ハ其ノ耳ヲ養フ所以、采色ハ其ノ目ヲ養フ所以、歌詠ハ其ノ性情ヲ養フ所以、舞蹈ハ其ノ血脈ヲ
養フ所以ナリ。今皆之レ無シ。是レ樂ニ成ルコトヲ得ザルナリ。是ヲ以テ古ノ材ヲ成スヤ易ク、今
ノ材ヲ成スヤ難シ」と。此説尤に然り。

○子曰、民可使由之、不可使知之。

【譯讀】子曰く、民は之に由らしむべし。之を知らしむべからず。

【章旨】民を治むるの道を語りたまひたるなり。

【字義】○民 愚下の凡民をいふ。○不可 不能といふが如し。仇滄桂曰く「可使不可使は能使不能使といフニ同じ」と。○由 従なり。○之 兩の之の字は政教を指す。

【直解】孔子のたまはく、民を治むるには、政教を設けて下民をして之に従ひ由らしむることは爲し得べきも、愚蒙の民をして一一其の政教の原理を知らしむることは爲すこと能はざるなりと。當時は教育普及せず、聖人一般の人民をして政教の本末を知らしめたきは、山山なれども、實際に於て爲し能はざることを語りたまへるなり。

【餘義】本章の不可使の字義を誤りて絶対に民をして知らしめてはならずと解し、終に儒教主義の政策は、民を愚にするなりとの暴論を吐く者往往あり。其の無學憫むべきなり。程子曰く「聖人ノ教ヲ設クル、人ノ家毎ニ諭シ、戸毎ニ曉スコトヲ欲セザルニハ非ズ。然レドモ之ヲシテ知ラシムルコト能ハズ。但能ク之ヲシテ之ニ由ラシムルノミ。若シ聖人民ヲシテ知ラシメズ(王安石の説を斥す)ト曰ハバ、則チ是レ後世朝四暮三ノ術ナリ。豈聖人ノ心ナランヤ」と。

○子曰、好勇疾貧、亂也。人而不仁、疾之已甚、亂也。

【譯讀】子曰く、勇を好みて貧を疾むは亂するなり。人にして不仁なる、之を疾むこと已甚だしければ亂するなり。

【章旨】悖亂の由りて生ずる所以を語り民を治むる者の鑑戒と爲したまふ。故に前章に次ぎたるなり。

【字義】○亂 理を害し道を傷り、争鬪悖逆などの事をいふ。○而 猶ほ之の如し。

【直解】孔子のたまはく、勇を好むは善きことなれども、若し勇を好みて、己の貧窮を惡み分限に安んじ止まることを知らざるときは、終には悖亂の事を爲すに至るものなり(世に所謂社會主義者の如き往往此類の人を出だす)又人の不仁なる者あるとき、之を疾むは當然の事なれども、之を疾むこと甚だ度に過ぐるときは、其の人をして身の置き處なからしめ、終に自暴自棄の人と爲りて亂を爲すに至るものなりと。

【餘義】盧未人曰く「此ノ兩言ハ、亂ノ由リテ生ズル所ニシテ、一ハ是レ自ラ亂ヲ爲シ、一ハ是レ人ノ亂ヲ爲スヲ致ス。今按ズルニ不仁トハ、不仁ノ未ダ深カラズシテ、猶ホ包容スベキヲ謂フナリ。故ニ之ヲ疾ムコト其ノ當ニ過ギテ、而ル後ニ亂ヲ致ス。夫ノ至不仁ノ人ノ若キハ、則チ之ヲ疾ムコト已甚ダシカラズト雖モ、亦亂ヲ作スナリ」と。

○子曰、如有周公之才之美、使驕且吝、其餘不足觀也已。

【譯讀】子曰く、如し周公の才の美有るも、驕且つ吝ならしめば、其餘は觀るに足らざるのみ。

【章旨】驕吝の甚だしき害あることを戒めたまへるなり。

【字義】○如有 假設の辭なり。○周公 周公旦なり。武王を相けて紂を伐ち、成王を輔けて周室を安からしめたる人。○才之美 藝能の美をいふ。書經、金縢篇に、且が多材多藝の文あり。○驕 矜夸なり。己の有する所を、狹みて以て人に夸るなり。○吝 鄙吝なり。己の有する所を、慳みて人に與へざるなり。己の有する技藝を秘して人に教へざるの類をも含む。必ずしも財貨の上のみに限らず。

【直解】孔子のたまはく、周公の如き藝能の美なる人ありと假定せんに、其の人自ら藝能の美を恃みて以て人に驕り、又吝嗇にして人に與ふることを惜む心甚だしきときは、其餘の才の美ありとも、觀るに足らざるなりと。

【考異】○皇本、使の上に設字あり。○吝 一説に過を改むるに、吝なるなりと、亦通す。○皇本、已の下に矣字あり、是と爲す。已矣は強き斷定の辭。

○子曰、三年學、不至於穀、不易得也已。

【譯讀】子曰く、三年學びて、穀に至らざるは、得易からざるのみ。

【章旨】己が爲めに學ぶ者の少きを語りたまひしなり。「子使漆彫開仕」の章(〇三)と互に相發す。

【字義】○至 朱子は疑ふらくは當に志に作るべしといへり。蓋し聲同じきによりて誤れりと爲すなり。然れども強ひて改むるを要せず。○穀 俸祿なり。「邦有道穀」(四六)の穀の如し。

【直解】孔子のたまはく、凡そ人學を積むこと久しき時は、其の學びたる所を、實地に施さんことを思ひて、多くは仕宦に急なる者なり。而るに三年の久しき學問して、猶ほ俸祿を干むるに志の至らざる者は、他日の大成を期せんとする篤學の人にして、誠に得易からざるなりと。

【考異】孔安國は穀を解して善と爲し、人三年も學びて善に至らざる程の頑鈍者は、滅多にあらずと説き、學問すれば善人にはなり得るものなりと、人に學問を勧めたまひたる義とせり。亦通ぜざるにあらず。○諸本、已字なし。今皇本に従ふ。

○子曰、篤信好學、守死善道。危邦不入、亂邦不居。天下有道則見、無道則隱。邦有道、貧且賤焉、恥也。邦無道、富且貴焉、恥也。

【譯讀】子曰く、篤く信じて學を好み、死を守りて道を善くす。危邦には入らず、亂邦には居らず。天下道有れば則ち見れ、道無ければ則ち隱る。邦道有るに貧且つ賤なるは恥なり。邦道無きに富且つ貴きは恥なり。

【章旨】孔子、人に身を立て世に處するの道を教へたまひたるなり。

【字義】○篤 厚くして力むるなり。○守死善道 死に至るまで、信する所、學ぶ所を固く守るなり。寧ろ善を爲して死すとも、惡を爲して生きじといふの類なり。○危邦 將に亂れんとする兆ある邦

なり。○不_レ入。其の國境に入らざる義。外に在るよりして言ふ。○亂邦 既に亂るる邦、即ち臣、君を弑し、父を弑するが如き紀綱の紊亂したる邦をいふ。○不_レ居。内に在るよりして言ふ。○天下 一世を舉げていふ。○見 顯れ仕ふるをいふ。○隱 退きて仕へざるをいふ。

【直解】孔子のたまはく、篤く斯道を信じて學問を好み、固く信ずる所、學びし所を守りて、道を善くし死すとも變らざるやうにすべしと。蓋し篤く信ずるとも、學を好まざれば正しからざることを妄りに信ずることあるべし。故に學を好まざる可からず。固く守るとも、道を善くすること能はざれば、徒死(ジス)するに至る。故に道を善くせざる可からざるなり。語由に「善_レ道トハ、猶ホ善_レ身ト曰フガ如シ。夫レ身ハ道ヲ抱クノ器ナリ。故ニ善_レ身ハ即チ是レ善_レ道ナリ。二言ヲ合解スレバ、以テ道ヲ守リ身ヲ善クスルノ謂ト爲スナリ」と。此解是と爲す。(以上第一節)

又のたまはく、人は去就の義に明かならざる可からず。されば國勢危くして將に亂れんとする邦には、決して足を踏み入るべからず。蓋し憲問篇に「君子見_レ危授_レ命(四七)」とあれば、一旦危邦に仕へたる上は、去るべきの義なしと雖も、未だ仕へずして外に在る者は、かかるあぶなき邦には入らずして可なり。又既に紀綱の亂れたる邦には、縱_レ其の身仕へて内に在りとも、潔く退き去りて居ることを爲さず。されども天下の廣き、なほ入るべく、居るべきの邦なしとせず。故に天下に道あるときは世に見_レれ出でて、其の道を顯し、天下に道なきときは、隠れて出でざるやうにすべしと。(以上第二節)

又のたまはく、邦に道ありて、善く治まれる時は、君子の大いに用ひらるる時なるに、己獨り才徳

薄くして世に用ひられず、貧乏にして且つ下賤なるは、恥づべきことなり。又邦に道なくして小人朝に滿つる時に當りて、己に堅く守る所の節なくして、不義の榮を貪り、財に富みて且つ貴き位に在るは、己も亦世に阿_レる小人の仲間なれば、恥づべきことなりと。(以上第三節)

○子曰、不在_レ其位、不_レ謀_レ其政。

【譯讀】子曰く、其の位に在らざれば、其の政を謀らさず。

【章旨】己の職分を越えて政事を謀議すべからざることを戒めたまひたるなり。

【字義】謀 營み爲す所ある義。

【直解】此章は、學者の未だ仕へざる者の爲めに發したまひし聖訓なり。己其の位に在らずして兔や角と其の政を謀慮し、施設の方などを營み爲すことなかれと。蓋し己實際其の位に在らざれば、十分の經驗もなく、智慮の周ねからざる患あるのみならず、處士横議の咎を招かんことを恐る。専ら己の本分を守りて、學を勤むるに若かざればなり。

【餘義】此章はもと學者の爲めの垂訓なれども、廣く在位者の爲めにも、亦百工衆藝に従事する者の上にも應用し、各自をして専ら己の本分を恪守(マツシミ)し、妄りに他人の職事に容喙(クワイエイ)するが如き不心得なからしむる義とも解するを得べきなり。此語は憲問篇(五〇)にも出で、下に「曾子曰、君子思_レ不出_レ其位」とあり、參看すべし。

○子曰、師摯之始、關雎之亂、洋洋乎盈耳哉。

【譯讀】子曰く、師摯の始、關雎の亂、洋洋乎として耳に盈つるかな。

【章旨】師摯の奏せし樂聲を聽きて、之を歎美したまひしなり。

【字義】○師摯 魯の樂師なり、摯は名。微子篇に「大師贊適齊」(六五)とあり。○始 樂中の名目、四始をいふ、關雎、麟趾、鵠巢、騶虞是を四始といふ。○亂 樂中の名目、樂曲の將に卒らんとするや、故らに聲調を亂る、故にいふ。○洋洋乎 美しく盛んなる貌。

【直解】此章は極めて解し難く、或は誤字脫文あるべしといふに至り、諸說紛紛たれども、皆首肯するに足る者なし。中に就きて徂徠の説稍優と爲す。姑くそれに從ひて講ぜんに、師摯が四始の樂を奏するを聞くに、其の中にて關雎の亂即ち卒章が最も盛美にして耳に盈つるなりと、深く感歎したまひたるなり。

○子曰、狂而不直、侗而不愿、慥慥而不信、吾不知之矣。

【譯讀】子曰く、狂にして直ならず。侗にして愿ならず。慥慥として信ならずんば、吾之を知らず。

【章旨】狂愚にして且つ僞妄なる人は、之を教誨する所以を知らざる旨を語りたまひたるなり。

【字義】○狂 志大にして常度に拘らざるなり。孔安國曰く「狂者ハ進ンデ取ル、宜シク直ナルベシ」と。

○侗 無知なり。○愿 謹厚なり。○慥慥 無能の貌。一解に誠實の貌。子罕篇の「空空如也」(四八)の空空に同じ。○不知之 之を教ふる所以を知らざるなり。

【直解】孔子ののたまはく、志大にして進取の氣に富み、常度に拘らざる狂者は、宜しく率直にして有徳なるべき者なるに、今は狂にして直ならざれば、則ち妄人にして取る所なし。又侗者即ち無知なる者は、宜しく愿として謹厚にして律義なるべき者なるに、今は侗にして愿ならず。又慥慥即ち無能なる者は、必ず信實なるべき者なるに、今は慥慥として信實ならざるは、則ち棄才にして取る所なし。此の三者の如きは、吾は之を教誨する所以を知らざるなりと。深く之を絶ちたまひしなり。

【餘義】蘇氏曰く「天ノ物ヲ生ズルヤ、氣質齊カラズ。其ノ中材以下ハ是ノ徳アレバ、則チ是ノ病アリ。是ノ病アレバ、必ず是ノ徳アリ。故ニ馬ノ蹄齧(蹄は躑と同じ、齧は反噬なり)スル者ハ、必ず善ク走ル。其ノ善ク走ラザル者ハ、必ず剛ル。是ノ病アリテ而シテ是ノ徳ナケレバ、則チ天下ノ棄才ナリ」と。履軒曰く「此章ハ斯三者ヲ舉ゲテ以テ世人ヲ評シ、風俗ノ益弊ルルヲ歎ジタマヒタルナリ」と。

○子曰、學如不及、猶恐失之。

【譯讀】子曰く、學は及ばざるが如くするも、猶ほ之を失はんことを恐る。

【章旨】學問を爲すには孜孜として寸時も怠るべからざることを諭したまひたるなり。

【直解】學問を爲すには、當に逃者(チモノ)を追ひかけて、追ひ付くこと能はざるが如くにして、寸時も氣を緩くすべからず。かくするも猶ほ其の逃者を見失はんことを恐るるなりと。譬喩を以て人の學を爲すは、一息の間斷もなく、心力の有らん限り奮勵努力すべきことを勧めたまひしなり。履軒曰く「亡ヲ追ヒ賊ヲ捉ヘントシテ未ダ及バザル者ハ其ノ心急忙忙、少シモ懈ラズ、此レ借リテ以テ喩フ」と。

○子曰、巍巍乎、舜禹之有天下也、而不與焉。

【譯讀】子曰く、巍巍乎たり、舜禹の天下を有つや、而して與らず。

【章旨】舜禹の功德の高大なるを贊美したまへるなり。

【字義】○巍巍乎 高大なる貌。○不與 猶ほ相參預せずと言ふが如し。即ち己と相關せざる意。

【直解】舜は堯より讓を受け、禹は舜より讓を受けて天子の位に即くや、天下は至りて善く治まり、其の功德の高大なること、巍巍乎として山の如し。而かも其の政を見るに、敢て己の私智を用ひず、只舊來の政に因るのみ。所謂無爲にして治まる者にして、己は預り知らざる者の如し。其の能く然る所以の者は、善く賢臣を得て委任すればなりと。孟子、滕文公上篇(四二頁)にも、此章と次章との聖語を引ききて、天下の爲めに人才を得るの難きことを論ぜり。宜しく參考すべし。

【考異】朱註に「不與トハ、猶ホ相關ラズト言フガ如シ。言フ心ハ其ノ位ヲ以テ樂ト爲サザルナリト。此れ舜禹の氣象の高大を贊する言と爲すなり。然れども聖語の本旨にあらず。從ふべからず。漢書、王莽傳に、此聖語を引ききたる條の師古の註に「舜禹ノ天下ヲ治ムルヤ、賢臣ニ委任シテ、以テ其ノ功ヲ成ス。而シテ身其ノ事ヲ親ラセザルナリ」とあり。これを正解と爲す。

○子曰、大哉、堯之爲君也、巍巍乎、唯天爲大、唯堯則之。蕩蕩乎、民無能名焉、巍巍乎、其有成功也、煥乎、其有文章。

【譯讀】子曰く、大なる哉、堯の君たるや、巍巍乎たり。唯天を大なりと爲す。唯堯之に則る。蕩蕩乎として、民能く名づくる無し。巍巍乎として其れ成功有り。煥乎として其れ文章有り。

【章旨】孔子帝堯の徳の盛大にして、名づくべからざるを歎美し、其の見るべきもの即ち事業文章の高大光明なるを稱賛したまひたるなり。

【字義】○大哉 この二字は綱なり、下の巍巍乎蕩蕩乎煥乎等は其の大を形容するなり。○巍巍乎 堯の徳の高大なるを形容す。天を稱するにはあらず。○唯 猶ほ獨の如し。○則 猶ほ準の如し。○蕩蕩 廣遠の貌。○成功 事業なり。書經、堯典に「百姓昭明、黍稷彙時雍」とあるが如し。○煥乎 光明の貌。○文章 禮樂法度なり。

【直解】孔子のたまはく、さても大いなることなるかな、帝堯の天下を有ちて四世に君臨したまふこととや。實に其の功德たる巍巍乎たること山の如く高大なり。凡そ物の高大なるは、天に過ぐる者あることなし。凡そ人は天と其の高大を比ぶる者なし。唯獨り堯のみは、其の全徳の高大なること、能く天に準じて化を行へり。故に其の徳の廣遠にして無邊無量なることも、亦猶ほ天の名狀すべからざるが如きなり。堯の徳の高大なることは、民能く得て名狀することなし。唯其の目に見るべきものは、其の巍巍乎として高大なる事業と、煥乎として光明なる禮樂制度とあるのみなりと。

【考異】山井鼎曰く、「一本、章ノ下ニ也字アリ」と。漢書、儒林傳敘論衡、齊世篇等、此章を引ききて、文章の下に俱に也字あり。是と爲す。

【餘義】民無能名は「泰伯…民無得而稱」と(二四頁)と意同じ。仁齋曰く「言フ心ハ、民堯ノ徳化ニ涵育シ

テ、而シテ其ノ徳化ノ然ル所以ヲ知ラズ。猶ホ人天地ノ中ニ在リテ、天地ノ大イナル所以ヲ知ラザルガ如キナリ。故ニ曰ク、民能ク名ヅクルナシ。唯其ノ見ル所ノ者ハ功業文章ノ巍然煥然タルノミナリト。達巷黨ノ人、徒ニ孔子ノ大ヲ見テ、而シテ其ノ稱謂スル所ハ、纔ニ「博ク學ビテ名ヲ爲ス所無シ」トイフニ在リ。是ヲ以テ益孔子ノ徳ノ大イナルヲ知ルナリ。是レ堯孔ノ大聖タル所以ナリト。

○舜有臣五人而天下治。武王曰、予有亂臣十人。孔子曰、才難不其然乎。唐虞之際、於斯爲盛。有婦人焉、九人而已。三分天下、有其二、以服事殷。周之徳、其可謂至徳也已矣。

【譯讀】舜に臣五人有りて、而して天下治まる。武王曰く、予に亂臣十人有り。孔子曰く、才難し。其れ然らずや。唐虞の際、斯に於て盛なりと爲す。婦人有り、九人のみ。天下を三分して、其の二を有ち、以て殷に服事す。周の徳は、其れ至徳と謂ふ可きのみ。

【章旨】前半は人才の得難きを語り、後半は文王の至徳を賛美したまひしなり。

【字義】○臣五人 禹、稷、契、皋陶、伯益をいふ。○武王曰 書經、泰誓篇の辭、泰誓は偽書なれば、必ずしも據とし難し。○亂臣十人 亂は治なり、古字相反して義を爲す者あり、亂を治むるを亂と謂ひ、汚を治むるを汚と謂ふが如し。一説に亂は木亂に作る。古の治の字なり。十人は周公且召公奭、太公望、畢公榮公、太顛、閎夭、散宜生、南宮适と、文母(文王の妣の大妣)となり。劉原父以爲へらく、子、母を臣

とするの義なし。蓋し邑姜(武王の妃)ならんと。○孔子曰 此處に獨り孔子と稱するは、上に周の武王の言を掲げしによりて、君臣の際、記者之を謹むなり。○才難 古語なり。○唐虞之際 唐は堯、虞は舜、皆天下を有つの號なり。際は堯舜交會の間なり。○於斯 斯は此なり、周を指す。○三分 一説に以下は自ら別章と爲す。上に子曰の二字を脱するなり。今取らず。○三分天下有其二 此は天下の形勢に由りて大概に之を言ふ。朱註に「蓋シ天下文王ニ歸スル者六州、荆、梁、雍、豫、徐、揚也。惟青、兗、冀ハ尙ホ紂ニ屬スル耳」とあるは鄭玄の謬解を蹈襲せしなり。従ふべからず。○周之徳 文王といはずして周といふは上の殷に對していふなり。

【直解】昔、帝舜は賢臣五人あり、相輔けて天下治まれり。武王のたまひしに、予に亂を治むるの臣十人あり。孔子のたまはく、古語に、人才は最も得難しとあるが、其れ然らずや、誠に然ることなり。今堯舜交會の間を、周の最初の時に比較すれば、賢才の多きことは周を以て最も盛なりと爲す。されども十人中には一婦人あれば、其の實は九人のみ。才の得難きこと此の如し。孔子武王の事を述ぶるに因りて、又文王の事に説き及ぼしてのたまはく、殷の紂王淫亂なり、文王西伯と爲りて聖徳あり。天下文王に歸する者漸く多く、遂に天下を三分して其の二を有つに至れり。若し文王をして天下に志あらしめなば、悉く天下を取りて己の有とすることは、掌を反すよりも易し。然るに文王は善く臣節を守りて殷に服事したまへり。周の文王の徳は、實に美を盡し善を盡せる至極の徳と謂ふべきなり。此章文王を至徳と賛美したまひしを見れば、孔子の大義名分を重んじたまひし微言、自ら明かなるのみならず。臣として君を討ちし武王に懽らざる聖慮の程も、亦窺ひ知るべきなり。

【考異】○亂臣十人 陸德明は「予有亂十人、本或作亂臣十人、非」といひ、唐の石經には亂十人とありて、亂字の側に臣字を細く刻せり。古來臣字の有無につきて議論あれども、亂十人にては文義通ぜず、臣字あるを是とす。○唐虞之際於レ斯爲レ盛 朱子は「周室人オノ多キコト、惟唐虞ノ際ノミ、乃チ此(周を指す)ヨリ盛ナリ。夏商ヨリ降リテハ皆及ブコト能ハズ」と註し、唐虞を以て周よりも盛なりと爲す。是れ五人の方、九人の方より勝ると爲すなり。固より此理なし。故に孔安國の「堯舜交會ノ間、周ニ比スレバ周最モ賢才盛多ナリトス」と註せしに従ふ。○有レ婦人ニ焉九人而已 婦人の職は専ら内を治む、故に外を治むる賢臣は九人のみとの意。○三分 皇本に三を參に作る、後漢書、伏湛傳文選、典引にも竝に參に作る。

○子曰、禹、吾無間然矣。非飲食、而致孝乎鬼神、惡衣服、而致美乎黻冕、卑宮室、而盡力乎溝洫。禹、吾無間然矣。

【譯讀】子曰く、禹は吾間然すること無し。飲食を非くして、孝を鬼神に致し、衣服を惡くして、美を黻冕に致し、宮室を卑くして、力を溝洫に盡す。禹は吾間然すること無し。

【章旨】禹の行事、豊と儉と、各其の宜しきを得て間隙の指して議すべきものなきを歎美したまひしなり。

【字義】○間然 間は罅隙(マキ)なり。其の間隙を指して之を非議(ツシ)するを謂ふなり。○非 薄なり、致(ス)孝乎鬼神 祖先の祭祀に供物などの豊潔を致すをいふ。○衣服 平常の服なり。○黻冕 黻

は蔽膝(ヒゲオ)なり、章を以て之を作り、膝の前を蔽ふなり。冕は冠なり、皆祭祀竝に會同等の大禮の時の盛服なり。○溝洫 田間の水道なり、以て疆界を正し、旱潦(ヒメジトオ)に備ふる者なり。包咸曰く「方里ヲ井ト爲シ、井間ニ溝アリ。溝ハ廣深四尺ナリ。十里ヲ成ト爲シ、成間ニ洫アリ。洫ハ廣深八尺ナリ」と。

【直解】孔子のたまはく、夏の禹王の行事は、吾は一の非難すべき點なし。何となれば禹は己の飲食をば非薄にして粗末の物に甘んずれども、宗廟の鬼神を祭るには、孝道を致し極めて犠牲(イナ)黍盛(モノ)の如きは、十分に豊かに且つ、潔くして備らざることなく、又平常の衣服は粗惡の品を用ふれども、祭祀に服する所の膝蔽や冠などは、華美を致し極めて、少しも吝むことなく、又己の住居する宮室をば卑く質素にすれども、田間の溝を營むには力を盡し、民をして水や旱の災を免れしむ。此の如く自ら奉ずるには儉にして、祖先の祭祀を慎み、民事を勤むるには費用を吝まず、其の儉にすべきを儉にし、豊にすべきを豊にして、各其の宜しきに合へり。これ罅隙の議すべき者なき所以なりと。重ねて禹は吾間然するなしたまひしは、深く贊美したまふ所以なり。

【餘義】仁齋曰く「儉ハ徳ノ聚ル所以ナリ。禮モ此ニ由リテ興リ、民モ此ニ頼リテ庇ハル。禹ハ自ら奉ズルニ薄クシテ、祭祀ヲ慎ミ、朝禮ヲ敦クシテ民事ヲ勤メタリ。此レ其ノ能ク數百年ノ太平ヲ致シシ所以ナリ。豈間然スベケンヤ」と。

子罕第九

此篇は皆孔子の德行を論ず。故に以て前篇の泰伯堯禹の至徳を論ぜしに次ぐ。凡て三十章。

○子罕言利與命與仁。

【譯讀】子罕に利を言ひたまふ。命と與にし仁と與にす。

【章旨】孔子の利を言ふことを謹みたまふ事を記す。

【字義】罕 希なり。罕言とは絶えて言はざるにあらず、言ふことの稀少なるなり。

【直解】易經、文言傳に「利ハ義ノ和ナリ」といへるが如く、義を以て利を制する時は、諸事に處して都合宜しけれども、唯利のみを以て多く言ふ時は、所謂利己主義に陥りて、義理を害すること一方ならず。故に孔子希に利を言ひたまふときは、必ず命と併せて之を言ひ、仁と併せて之を言ひ、單に利のみを言ひたまふことなしとなり。

【考異】朱子は「子罕ニ利ト命ト仁トヲ言フ」と讀みて、罕の字を利命仁の三にかけて解けり。程子曰く「利ヲ計レバ則チ義ヲ害ス。命ノ理ハ微ナリ。仁ノ道ハ大ナリ。皆夫子ノ罕ニ言フ所ナリ」と註せり。然れども利と命とに就きては、孔子のたまひしこと罕なれども、仁に就きては論語中處處に散見すれば、罕に言ふといふべからず。是に於て朱説を辯護する者は曰く、論語中に散見する所の仁は、多くは仁を求むるの法を説かれしのみ、仁の原理の如きは未だ容易に語りたまはざるな

りと。此辯解は一理あるが如くなれども、なほ頗る牽強の説たることを免れず。故に徂徠は一説を出だして曰く「子罕言利ニテ句を絶ツ。與命與仁トハ、蓋シ孔子ノ利ヲ言ヒタマヘバ、則チ必ズ命ト俱ニシ、仁ト俱ニス、其ノ單ニ利ヲ言ヒタマヒシ者ハ幾ト希ナルナリ。舊註ニ、利命仁皆孔子ノ罕ニ言ヒタマフ所トスルハ、是レ八字ニテ一句トシ、中間絶タズ、辭ニ失セリ。且ツ聖人ノ道ハ民ヲ安ズルノ道ナリ。而シテ天ヲ敬スルヲ本トナス。故ニ孔子曰ク『不レ知レ命、無レ以レ爲レ君子也』(六九)ト。又曰ク『君子去レ仁、惡乎成レ名』(一〇)ト。是レ命ト仁トハ君子ノ君子タル所以ニシテ、孔子豈罕ニ之ヲ言ヒタマハンヤ。何晏以來ノ諸儒、辭ニ得ズシテ、強ヒテ之ガ解ヲ爲ス。從フ可カラズ」と。清の焦循も亦「若シ利ヲ言ヘバ、則チ必ズ命ト之ヲ並言シ、仁ト之ヲ並言シタマフナリ」と解きて、一家の説、符節を合するが如く、深く此章の義を得たり。其の命と並言するは、述而篇の「富而可求(四二)の章の如し。仁と並言するは雍也篇の「夫仁者、己欲立而立人、己欲達而達人(八)の章の如し、之を全書中に求むれば、其の例少からざるべし。

○達巷黨人曰、大哉孔子、博學而無所成名。子聞之、謂門弟子曰、吾何執、執御乎、執射乎、吾執御矣。

【譯讀】達巷黨の人曰く、大なるかな孔子。博く學びて名を成す所無しと。子之を聞き、門弟子に謂ひて曰く、吾何を執らん。御を執らんか、射を執らんか。吾は御を執らんと。

【章旨】孔子が人の己を美めたるに對し、謙遜の辭を以て門弟子に告げたまひし事を記す。

【字義】○達巷 黨の名、周禮に「五百家ヲ黨ト爲ス」と。其の人姓名傳はらず。○執 専ら執ることなり。執禮(三)の執の如し。○射御 禮樂射御書數、之を六藝といふ。射は弓術をいふ。御は人の爲めに馬を御するをいふ。六藝中の卑きものなり。

【直解】達巷といふ郷の人、孔子を歎美していふやう、さても大いなるかな、孔夫子の人物たるや、博く學びて知りたまはざる所なければ、一技一藝を取り出だして名づくべきやうもなしと。深く感歎しければ、孔子之を聞き、之を承くるに謙遜の辭を以てして、門弟子に告げてのたまはく、吾も何か一藝を以て名を成したきものなり。それに就きて何を専ら執り守りて己の藝とせん。御を執ることにせんか、將射を執ることにせんか。寧ろ卑くして誰にても爲し得らるる御を執らんと。蓋し黨人が「無所成名」と、深く歎美せし意を喻らず、反りて之を反對の意に解するもの如く、謙して敢て當りたまはざる所、益孔子の人格の崇高なる所以を觀るに足るべし。蓋し禮樂は道の大なる者にして、君子の事なり。故に謙して敢て當りたまはず。書數は府史胥吏(コヤク)の執る所なり、故に君子は専ら之に任せず。是れ其の射御を取りたまふ所以なり。

【考異】「名ヲ成ス所ナシ」とは、即ち前篇の「民無能名一焉」(八)といふの意に同じく、深く孔子の大を贊美せし言なり。故に孔子の門人此言を援きて以て、孔子の徳の堯舜に同じきことを明かにせしなり。達巷黨の人の言、些も惜む所あるを見ず。朱註に「其ノ學ノ博キヲ美メテ、其ノ一藝ノ名ヲ成サザルヲ惜ムナリ」といへるは謬れり。鄭玄曰く「孔子博ク道藝ヲ學ビテ、一名ヲ成サザルヲ美ムルナリ」と。高拱曰く「名ヲ成ス所ナシトハ、人得テ而シテ名ヅクルナキヲ謂フ。何ヲカ惜ム

ト謂ハンヤ」と。是を正解と爲す。

○子曰麻冕禮也。今也純儉。吾從衆。拜下禮也。今拜乎上。泰也。雖違衆、吾從下。

【譯讀】子曰く、麻冕は禮なり。今や純は儉なり。吾は衆に従はん。下に拜するは禮なり。今上に拜するは泰なり。衆に違ふと雖も、吾は下に從はん。

【章旨】聖人の禮に於ける、義に害なき者は、或は俗に隨はるるも、義に害ある者は、苟も俗に従ひたまはざることを語りたまふ。孔子制作の微意を窺ふに足る章なり。

【字義】○麻冕 緇麻布を以て爲りたる冕なり。即ち緇布冠なり。三十升の麻布を以て之を爲る。一升は八十縷なれば、三十升は其の經(イト)は二千四百縷なり。極めて細緻(カマ)にして容易に成り難し。○純 蠶絲なり。孔安國曰く「絲ハ成リ易シ、故ニ儉ニ從フ」と。○儉 節約の意なり、其の工省けて費寡きなり。○下上 堂の下と上となり。○泰 驕慢なり。

【直解】孔子ののたまはく、古人首服を制するに麻布を以てせしは、本儉素に従ひて禮に合へり。而るに後世漸く之を精緻にして容易に成り難くなりたれば、今は絲を用ひて之を爲ることとなり、其の工も省け、費も寡くして儉素の道にかなへり。されば古禮には違ふと雖も、吾は衆人の爲す所に從ひて絲を用ひんと。又臣が君と禮を行ふときは、堂下に拜するを禮とす。君之を辭すれば、乃ち升りて拜を成す。今や直ちに堂上に升りて拜するは驕泰なり。君臣の義に於て宜しく然るべからず。

されば衆に違ふと雖も、吾は古人の堂下に拜する禮に従はんとなり。慶源輔曰く「君子ノ世俗ニ於ケル、或ハ從ヒ或ハ違フコトアリ」適ナク莫ナク義ト一ナルノミ(一〇)と。

【餘義】古は臣、君と禮を行ふには、堂下に再拜稽首し、君之を辭して、然る後、堂に升りて復再拜稽首せしこと、儀禮の燕禮大射儀聘禮公食大夫禮親禮等の諸篇に詳かなり。左傳、僖公九年に「王、宰孔ヲシテ齊侯ニ昨(祭肉なり)ヲ賜ハシム。曰ク、天子文武ニ事アリ、孔ヲシテ伯舅(天子異姓の諸侯を謂ひて伯舅と曰ふ)ニ昨ヲ賜ハシムト。齊侯將ニ下拜セントス。孔曰ク、且ツ後命アリ、天子孔ヲシテ曰ハシム、伯舅ノ耄(老)セルヲ以テ、加勞シテ一級ヲ賜ヒテ下拜スルコト無カラシムト。對ヘテ曰ク、天威顔ヲ違ラザルコト咫尺ナリ。小白(齊桓公の名)余敢テ天子ノ命ヲ貪リテ下拜スルコトナクンバ、恐ラクハ下ニ隕越(頭墜なり)シテ以テ天子ニ羞テ遺ランコトヲ、敢テ下拜セザランヤト。下り拜シテ登リテ受ク(堂下に拜して而る後、昨を堂上に受くるなり)とあり。桓公の強大にして、加ふるに天子の寵命を以てするも、猶ほ恭敬して敢て分を越えず、此より襄公二十二年、孔子の生を距ること、僅に一百一年にして、臣たる者驕泰にして其の君を輕侮し、徑ちに堂上に拜するに至る。世道の變も亦恐るべきかな。

○子絶四、毋意、毋必、毋固、毋我。

【譯讀】子四を絶つ、意毋く、必毋く、固毋く、我毋し。

【章旨】聖人の心は虚明にして私累なきことを記す。語由に「夫子ノ盛徳、渾淪トシテ跡ナキヲ記ス」と。

【字義】○絶 絶ち棄つるなり。○毋 無なり、禁止の辭にあらず。○意 億度(オシハ)なり、未だ其の事を見ずして妄りに信偽成敗を意ふなり。○必 期必なり、必ず此事は斯く爲さんと期するなり。何晏曰く「之ヲ用フレバ則チ行ヒ、之ヲ舍ツレバ則チ藏ル(一)」故ニ專必スルコトナシ」と。○固 執滞なり、一を執りて通ぜざるなり。何晏曰く「可モナク、不可モナシ(六四)」故ニ固行ナシ」と。○我 私己なり、古義に「毋レ我トハ、善、人ト同ジクシ、己ヲ舍テテ人ニ從フナリ」と。

【直解】孔夫子の心に絶ち棄てて全く無き所の者四あり。一には意なきなり。即ち未だ事を見ずして、妄りに私意を以て信偽成敗を億度することなきなり。例へば人を疑ひて、彼は口には斯く言ふものの、心は必ずしも然らざるべしなどと、妄りに推量するが如きことを爲さざるが如し。二には必なきなり。即ち此事は斯く爲さんと豫め期して必することなく、唯義の在る所に従はるるなり。三には固なきなり。即ち固く一を執りて變通せざることなきなり。例へば己の考に過あれば之を改め、人の意見の方が善ければ、直ちに之に従はるるなり。四には我なきなり。即ち己と人との界を立てず、己を捨てて人に従はるるなり。必固我の三者は事相似たり。但毋レ必は事を爲す上に就いて言ひ、毋レ固は守る所の上に就いて言ひ、毋レ我は人と相接する上に就いて言ふ。是れ其の異なる所なり。

【考異】○毋 朱子は「史記(孔子世家)ニ無ニ作ル、是ナリ」と註したれども、今本の史記には此章と同じく毋に作る。蓋し後人論語に依りて之を改めたるならん。毋無二字は互に相通ず、孰れにてもよろし。○意 何晏は「道ヲ以テ度ト爲ス。故ニ意ニ任セズ」と註したれども、心の發たる意は、聖人と雖も無きこと能はざる所なれば、ここには通じ難し。朱子は「意ハ私意ナリ」と註したれど

も、かくては我即ち私己と別つことなし。皆従ふべからず。

○子畏_ニ於_レ匡。曰、文王既没_ニ文不在_レ茲乎。天之將_レ喪_ニ斯文也、後死者不得_レ與_ニ於_レ斯文也。天之未_レ喪_ニ斯文也、匡人其如_レ予何。

【譯讀】子匡に畏す。曰く、文王既に没したれども、文茲に在らずや。天の將に斯の文を喪さんとす。後死者斯の文に與るを得ざるなり。天の未だ斯の文を喪さざるや、匡人其れ予を如何せん。

【章旨】孔子斯道を以て自ら任せられ、天命を知りて患難に處し、心を動かしたまはざることを記す。

【字義】○畏 戒心あるの謂なり、畏るべき事に遭ひて用心するの義なり。畏とは記者が衆情を以て言ふ、孔子の心に畏れたまひしにはあらず。○匡 地名なり。陽虎嘗て匡に暴虐す。夫子の弟子顔刻、時に又虎と俱に往けり。後に刻夫子の車を御して匡に至る。匡人素より刻を識り、又夫子の容貌、陽虎と相似たり。故に匡人兵を以て夫子を圍むこと五日、弟子懼る。故に夫子弟子の心を安定せんとしてのたまふこと、下文の如し。○文 道の顯れて文を爲すものなり。禮樂制度を問ふ。道といはずして文と曰ふは、上文の文王既没の語を承くるが故なり。修辭の道、自ら然るなり。○茲 此なり、孔子自ら謂ひたまふなり。○後死者 文王既没を承けて後死者といふ、孔子自ら謂ひたまふなり。

【直解】魯の陽虎といふ者、嘗て匡にて暴行を働きし事あり。孔夫子衛を去りて陳に適かんとして匡を過ぎられし時、匡人夫子の容貌、陽虎に似たるを以て、兵を以て夫子を圍みしかば、従ふ所の弟子等懼るる色あり。夫子之を安んぜんとしてのたまはく、古聖人の道統は傳へて文王に在りしが、今

文王は既に没せられたり。然れども文王の傳へられたる文、即ち斯道は、今に傳承して我が此身に存在せるにあらずや。天若し斯文を喪ほさんと欲せば、後死者たる我が身は、必ず斯文に與ることを得ざるべし。今、我既に斯文に與ることを得たれば、天の未だ斯文を喪ほさんとするの意なきことを知るべし。即ち我は天意を奉じて斯文を後世に傳ふるの使命を有する者なり。されば彼の匡人は、必ず天の意に背きて我を如何ともすることを得ず。即ち決して己を害すること能はざるべしと。夫子嘗て「五十ニシテ天命ヲ知ル」(三五)とのたまへり。此時夫子御年五十六歳、患難に處して泰然として心を動かしたまはず、其の天に事へ、命を立つる所以の學、至れりと謂ふべし。仰ぐべきかな。

【考異】後死者 語由に「己ニ後レテ死スル者ヲ指ス、猶_ホ後人ト曰フガ如シ」と。亦通す。

【餘義】仁齋曰く「天道ハ善ニ福シ淫ニ禍ス。是ヲ天ニ必然ノ理アリト謂フ。禍福ハ己ヨリ之ヲ求メザルコト無シ。是ヲ人ニ自ラ取ルノ道アリト謂フ。智者ハ之ヲ信ジ、昏者ハ疑フ。夫子嘗テ曰ヘリ、桓魋其レ予ヲ如何セン」(六頁)ト。此ニ曰ク「匡人其レ予ヲ如何セン」ト。此レ好ミテ自ラ矜ルコトヲ爲スニアラズ。亦姑ク自ラ解クコトヲ爲スニモアラザルナリ。蓋シ天ヲ知ルノ至、命ニ達スルノ極、自ラ之ヲ信ズルコト此ノ如シ。夫レ文王ヨリ孔子ニ至ルマデ、其ノ間幾多ノ聖賢ヲ生ゼリ。然リ而シテ斯文ノ傳ハ、他人ニ在ラズシテ獨リ孔子ニ在レバ、即チ天ノ孔子ヲ生ズルハ、其ノ意如何ト爲スヤ。其ノ之ヲ愛護シ、保全シ、扶翼シ、佑助スルコト、固ニ宜シク至ラザル所ナカルベシ。天ノ視聽ハ我が民ノ視聽ニ自フ。其ノ理之ヲ人事ニ驗シテ可ナリ。陳蔡ニ圍マレ(三頁)匡ニ畏ス。聖人ノ厄ニ遇ヒタマヒシコトヤ、亦屢ナリ。然レドモ卒ニ害ヲ加フルコト能ハズンバ、則チ天ノ聖人ヲ

佑クル、豈信然ナラズヤ」と。

○大宰問於子貢曰、夫子聖者與、何其多能也。子貢曰、固天縱之將、聖又多能也。子聞之曰、大宰知我乎。吾少也賤、故多能鄙事。君子多乎哉、不多也。牢曰、子云、吾不試、故藝。

【譯讀】大宰子貢に問ひて曰く、夫子は聖者か。何ぞ其れ多能なるやと。子貢曰く、固より天之を縱にして將に聖ならんとす。又多能なり。子之を聞きて曰く、大宰我を知れるか。吾少しくて賤し。故に鄙事に多能なり。君子は多ならんや、多ならざるなりと。牢曰く、子云ふ、吾試ひられず。故に藝ありと。

【章旨】大宰、多能を以て聖と爲すかと疑ふ。子貢は之に答ふるに多能は聖人の餘事なり。孔子の聖たる所以は、徳に在りて多能に在らざることを以てす。

【字義】○大宰 官名、陸徳明は左傳、哀公十二年に「公、吳ニ秦臬ニ會ス、吳子大宰嚭ヲシテ尋盟ヲ請ハシム。公欲セズ、子貢ヲシテ對ヘシム」又説苑、善説篇に「子貢大宰ヲ見ル、大宰嚭問ヒテ曰ク、孔子ハ何如ト、對ヘテ曰ク、臣以テ之ヲ知ルニ足ラザルナリ」とあるによりて「吳ノ大宰嚭ナリ」といへれど確據なし。何國の誰たるか、今考ふべからず。○縱 猶ほ肆の如し、是迄と限量を爲さざるなり。○將 漸あるの辭なり、既に聖なりと斷言せずして、之を將來に期するなり、己の

師を問はれしに答ふるの辭、固より宜しく然るべきなり。○牢 姓は琴、字は子開、一の字は子張。○試 用なり。不試 故藝は、世用たらずして暇日多し、故に兼て藝事に通するを得たるなり。

【直解】大宰の官に居る某、多能を以て聖人なりと誤解し、孔子の多能なるを見て、子貢に問ひて曰く、夫子は聖人ならんか、何ぞ其れ藝能の多くして何事にも通じたまはずといふことなきやと。子貢答へて曰く、夫子は固より天縱の徳を有して、是迄と限量を立てず。漸く將に聖域に進まれんとす。而して又其の上に貴殿の日はるるが如く、多能を兼ねたまへりと。孔子二人の問答の言を聞きたまひて、子貢の言には敢て當りたまはず。又聖の字を避け、謙してのたまはく、大宰は能く我を知れるものなるか、吾の少時、卑賤なりき、故に鈞弋などの鄙人の事には習ひて多能なることを得たるも、多能は人を率ふる所以にあらず。故に君子の重んじて貴ぶ所は、多能なるにあらんか、多能は決して君子の重んじ貴ぶ所にあらざるなりと。自ら疑ひて自ら決したまひたるなり。弟子此言を記する時、牢、昔夫子に聞く所の言を聯想し來りて曰く、夫子嘗てのたまはく、吾は世に用ひられず、故に衆藝を習ひて通することを得たりと。

【考異】○將聖 爾雅に「將ハ大ナリ」と。孔安國曰く「天固ヨリ大聖ノ徳ヲ縱シ、又多能ナラシムルナリ」と。一説として存すべし。○注疏本、牢曰以下を別章とす、今は朱本に従ふ。

【餘義】徳は本なり、藝は末なり。君子の貴ぶ所は道德に在りて藝能にあらず。此章を讀む者、宜しく本末先後を審にすべきなり。

朱註に「聖ハ通ゼザルコトナシ。多能ハ乃チ其ノ餘事ナリ、故ニ又ト言ヒテ以テ之ヲ兼ヌ」と。此

の「聖ハ通ゼザルコトナシ」とは、蓋し聖人の徳は全くして具はらざるなく、又事に於ても通ぜざる所なし。故に其の能くする所、自然に多しといふ者の如しと雖も、稍牽強の嫌なき能はず。履軒曰く「君子ハ多能ヲ尙バズ、亦實ニ必ズシモ多能ナラザルナリ。堯舜以來羣聖人ノ多材多藝ナルハ獨リ周公ヲ推スノミ。知ルベシ聖人ノ多材多藝ナラザル者モ亦多キコトヲ。以テ多能ト聖ト元相干（關係ナリ）セザルヲ見ルナリ。學者若シ『聖無レ不レ通』ノ句ヲ以テ先ヅ胸中ニ置カバ、仍ホ是レ大宰ノ癡想ナリ」と。此説是と爲す。

○子曰、吾有知乎哉、無知也。有鄙夫問於我、空空如也。我叩其兩端、而竭焉。

【譯讀】子曰く、吾知ること有らんや、知ること無きなり。鄙夫有り、我に問ふ、空空如たり。我其の兩端を叩きて竭す。

【章旨】孔子、知者を以て自ら居りたまはざるなり。

【字義】○空空如 誠實の貌、空空は慳慳と同じ。博雅に「慳慳ハ誠ナリ」と。○叩 推問する義なり。禮記、學記篇に「善待問者、如撞鐘。叩之、以三小者、則小鳴、叩之、以三大者、則大鳴」の叩の如し。○兩端 事物皆兩端あり、終始木末大小厚薄の類の如し。焦循曰く「此ノ兩端ハ中庸ノ『執其兩端、用其中於民』（七五章）ノ兩端ナリ」と。○竭 窮め盡して其餘を留めざる義なり。

【直解】時人、孔子を以て知りたまはざる所なしと稱す。故に孔子之を承くるに謙を以てしてのたまは

く、我は知る所あるものならんや、知る所なきなり。但嘗て鄙夫の來りて問ふ者あり。其の意甚だ誠なり、我其の愚誠を憫みて其の疑ふ所の兩端を叩問し、而る後に其の是非成敗の理を盡して中庸の宜しき所を得しむるやうに之に告げ教へたり。人或は之を以て我を知らざる所なしと謂ふならんも、我が告げ教へたるは、特に鄙夫の問ふ所の鄙事に答へたるのみ。能く賢者の爲めに發明する所あるにあらざるなりと。編者此章を以て多能鄙事の聖言の次に置きたるは、其の用意の在る所、自ら知るべきなり。

【考異】此章、朱註に據れば「人我ヲ知ラザル所ナシト爲スモ、我ハ知ルコトアラシヤ、知ルコトナキナリ。但鄙人ノ胸中何物モナク、空空トシテ無能ナル者アリテ、我ニ事物ノ理ヲ問ヘバ、至愚ノ人ナリトモ決シテ之ヲ忽ニセズ、必ズ其ノ問ヒタル事物ノ頭ヨリ尾マデノ兩端ヲ明細ニ説明シテ遺スコトナク、叩キ撃チテ他ヲ發動セシムルナリ、此故ニ人、我ヲ知者ナリトイフモノアレドモ、我ハ實ニ知者ニアラズト謙遜セラレタルナリ」といひ、孔子知者を以て自ら居りたまはず、但人を教へて倦まざるの意を語りたまひたるものと爲せり。空空を無知と解し、叩を叩撃發動と解するが如き、古義にあらずと雖も、姑く一説として存すべし。

○子曰、鳳鳥不至、河不出圖、吾已矣夫。

【譯讀】子曰く、鳳鳥至らず、河、圖を出ださず。吾已ぬるかな。

【章旨】孔子、時に明君なきを傷み、自ら其の道の行はれざるを歎きたまひしなり。

【字義】○鳳鳥 鳳皇なり、神靈の鳥にして、舜の時、來儀(來り舞ひて容儀あるなり)し、文王の時、岐山に鳴く。○圖 伏羲の時に、河中の龍馬(馬八尺以上を龍と爲す)圖を負ひて出づ。伏羲之に則りて八卦を畫す、鳳も河圖も皆聖王世に出づるの瑞兆とす。○已矣夫 已は止なり、絶望の辭なり。

【直解】 聖人命を受けて帝王と爲る時は、則ち鳳皇至り、黄河よりは圖を出だす。今や天かかる祥瑞を降すことなし。世に明君なきことを知るべし。明君なき時は、吾が道も亦行ふことを得難し。嗚呼吾が道も、最早此れ限りにて已みなん、歎すべきかなと。

【餘義】 此章、孔子鳳鳥河圖を思ひたまふに非ず。借りて以て明君の出でて大道の行はれんことを思ひたまふなり。彼の後生祥瑞の事を修言して、附會夸大の辭を爲す者と、大いに同じからず。仁齋が「或人曰ク、聖人ハ祥瑞ヲ言ヒタマハズト、此ニ鳳鳥河圖ヲ言ヒタマヘルハ、何ゾヤト。曰ク、此レ祥瑞ヲ説キタマフニアラザルナリ。鳳鳥河圖ヲ假リテ以テ時ニ明主ナキヲ歎ジタマヘルナリ。蓋シ聖人ハ人ト與ニシテ以テ異ヲ立テタマハズ、世ト同ジクシテ敢テ聽カシタマハズ。凡ソ事ノ大ナル得失ナキ者ハ、皆舊套ニ從ヒタマフ。敢テ紛紛ノ説ヲ爲シテ以テ人ノ聽聞ヲ汨シタマハズ。鳳鳥河圖ハ古來相傳ヘテ以テ聖王世ヲ御スルノ瑞ト爲セリ。故ニ夫子之ヲ假リテ以テ其ノ歎ヲ寓シタマヒシノミ」と曰へるは、之を得たり。

○子見齊衰者、冕衣裳者、與瞽者、見之、雖少必作過之必趨。

【譯讀】 子、齊衰者と、冕衣裳者と瞽者とを見る。之を見れば、少しと雖も必ず作つ。之を過ぐれば

必ず趨る。

【章旨】 聖人仁敬の心、感ずるに隨ひて應じたまふことを記す。

【字義】 ○齊衰 喪服なり。斬衰より一等級く、衣服の端を折り返して縫ひたるものにて、母以下の喪に用ふ。斬衰は裁斷したる儘縫ひたるものにて、父の喪に用ふ。すでに齊衰を言へば、斬衰は從ひて知るべし。○冕衣裳 冕は禮冠なり。説文に「大夫以上ノ冠ナリ」と。衣は上の服、裳は下の服、冕して衣裳するは、貴き者の盛服なり。○與 瞽者は卑し、故に與字を加へて貴者と別つなり。○瞽 盲なり。○見之 子見の見は是れ乍ちに見るをいふ。見之は下の過之に對して用ふ。見之は夫子此に在りて、三者を前に見たまふなり。過之は三者此に在りて、夫子其の前を過ぎたまふなり。○作 起立するなり。○趨 疾く小走するなり。作趨は皆之を敬する作法なり。

【直解】 孔子は人の喪中に在りて齊衰の服を衣たる者、及び冕して衣裳する尊貴の盛服せる者と、盲目の不具者とを乍ちに見たまひ、なほよく之を見たまひて、彼が縱令夫子より年少き者なりとも、其の喪あるを哀み、爵あるを尊び、不具者を矜むの至誠禁すること能はず。之を敬愛して、夫子坐したまふ時には、必ず起立したまひ、又彼の前を過ぎ行かる時は、小走に疾く行きて敬意を表したまへりと。蓋し聖人敬愛の誠心、内外一致なれば、其の威儀に發するもの、然ることを期せずして自ら然るなり。

【考異】 雖少必作 朱註に「或人曰ク、少ハ當ニ坐ニ作ルベシ」とあるは非なり。高拱曰ク「雖夜必興(禮記、玉藻篇の語)ハ、寢ト言ハズシテ寢スルコト知ルベキナリ『變色而作』(三三)ハ、坐ト

言ハズシテ坐スルコト知ルベキナリ。今既ニ之ヲ作ト謂ハバ、即チ坐ハ何ゾ言フコトヲ待タン。還リテ是レ「雖レ少必作」トイフヲ、理ニ於テ正ト爲ス、郷黨ニモ亦此レヲ記シテ曰ク「雖レ狎必變」… 雖レ變必以レ貌」(八三)ト。其ノ義一ナリ」と。卷子本皇本、少の下に者の字あり、是と爲す。

○顔淵喟然嘆曰、仰之彌高、鑽之彌堅、瞻之在前、忽焉在後。夫子循循然善誘人、博我以文、約我以禮。欲罷不能、既竭吾才、如有所立卓爾。雖欲從之、末由也已。

【譯讀】 顔淵喟然として嘆じて曰く、之を仰げば彌高く、之を鑽れば彌堅し。之を瞻れば前に在り、忽焉として後に在り。夫子循循然として善く人を誘む。我を博むるに文を以てし、我を約するに禮を以てす。罷めんと欲すれども能はず、既に吾が才を竭せり。立つ所有りて卓爾たるが如し。之に従はんと欲すと雖も、由末きのみ。

【章旨】 顔淵成學の後、深く夫子の盛徳の及ぶべからざることを賛歎し、聖を希ふの意を述べたるなり。
【字義】 ○喟然 喟は歎息の聲なり。○仰之彌高 高山を仰ぎ望めば、高きが上にも彌高くして及ぶべからざるに譬ふ。帆足萬里曰く「規模ノ高大ナルヲ言フ」と。○鑽之彌堅 金石の堅きが上にも彌高くして雖にて鑽り穿てども入るべからざるに譬ふ。萬里曰く「其ノ徳ノ深厚ナルヲ言フ」と。○瞻之云云 恍惚變幻にして形象の摸捉すべからざるを言ふ。○循循然 次序ある貌。○誘 進な

り、此道を以て人を勸進するなり。○博文約禮 教の序あるを言ふ、我が固陋の心を文を以て開き博め、我が放逸散漫なる行を禮を以て約し制するを言ふ。○如有所立卓爾 如とは謙して疑ふの辭なり。卓爾は立つ貌、其の才を竭したる効果を言ふなり。○從 就なり。○末 無なり。

【直解】 顔淵學成るの後、深く孔夫子の盛徳を賛歎して曰く、夫子の御徳の高大にして窮め盡すこと能はざることは、之を物に譬ふれば、高山の之を仰げば彌高くして及ぶべからざるが如く、又金石の鑽りて之を穿たんとすれども、彌堅くして入る可からざるが如し。特に其の高大堅固なるのみならず、又其の形象の審かに定め難きことは、今まで前に在るよと見しに、忽ち又後に在りて、恍惚として摸捉すべからず。則ち夫子の徳行の高大神妙なること、終に學ぶべからざるが如しと雖も、夫子の子弟を教育したまふや、循循然として次第順序ありて、善く斯道を以て人を誘ひ勸めたまふ。其の方たるや、先づ我を開き博むるに文學を以てして、天下古今の事理に通ぜしめ、而る後、我が廣く學びたる智識を制約するに、人の當に準據して履行すべき定則たる禮を以てして、身の行を正したまふ。かくの如く教育の法次第ありて、懇切にして倦むことなく、我を導きたまふによりて、漸くに得る所あり。知らず識らず進み行きて、罷めんと欲すれども罷むこと能はず。すでに吾が才力の有らん限りを竭盡して、其の工夫を用ふるの専一なる効果は、心に立つ所ありて卓然として動かざるが如きを覺ゆるに至れり。乃ち更に歩を進めて夫子の地位に従ひ就かんと欲すれども、我が力足らず、恍惚として終に従ふに路なきなりと。

【考異】 如有所立卓爾 一これ顔淵が既に其の才を竭したる効果を言ふなり。舊註皆以て夫子の卓

立と解して、下に屬して讀むは文理平順ならず。尤も揚子法言にも「顔苦孔之卓」の語あれば、何晏以前、誤解已に久しと雖も、従ふべからず。

○子疾病。子路使門人爲臣。病間曰久矣哉。由之行詐也。無臣而爲有臣。吾誰欺。欺天乎。且予與其死於臣之手也。無寧死於二三子之手乎。且予縱不得大葬。予死於道路乎。

【譯讀】子疾病なり。子路門人をして臣爲らしむ。病間にして曰く、久しい哉、由の詐を行ふことや。臣無くして臣有りと爲す。吾誰をか欺かん、天を欺かんや。且つ予其の臣の手に死なんや。無寧二三子の手に死なんか。且つ予縱び大葬を得ずとも、予は道路に死せんや。

【章旨】聖人、其の位に素しては、其の位に行ふことを述べて、子路の分限に越えたる非禮の行を責めたまひしなり。

【字義】○疾病 病は疾の甚だ重くなりたるなり。○病間 間とは病苦の間隙ある時、即ち少しく差(慮)ゆるなり。○久矣哉 今に始めず、すでに久しきを経たる義。○詐 誠ならざるの謂なり。○無寧 上に無の字あり、下に反語の乎の字あり、故に寧と同じ。俗語の「イツソ、マシヂヤ」と謂ふが如し。○大葬 葬禮の大いに備はれるを謂ふ。君臣の禮葬の類をいふ。古時大夫たる者、皆家臣ありて、其の家事を治む。死せば即ち之が爲めに喪を治むること、臣を以て君に事ふるが如くするなり。

【直解】夫子嘗て大夫たられし頃は、其の家臣もありたることなるが、已に位を去られし後は、祿もなければ家臣も亦無きは當然なり。然るに夫子疾みて御危篤なりしかば、子路心に思へらく、夫子の如き聖人の喪禮は、十分に鄭重にせざるべからずと。豫め門人をして家臣たらしめ、萬一の事ありし時、立派に喪禮を營まんとす。是れ子路聖人を尊ぶ至情は感すべきが如しと雖も、未だ眞に聖人を尊ぶ所以の道を知らざるものなり。夫子の御病氣少しく忘れて快くなりたまひし時、この事を知り子路を咎めてのたまはく、今に始めぬ久しき事なるかな、由(子路の名)が詐を行ふことや。吾は實に家臣なし。然るに、子路は強て家臣あるが如くせんとす。是れ詐を行ふなり。吾の家臣なきは人人の知る所なれば、吾は誰人をか欺かんや、人は欺かれず。されば天を欺かんとするか。天は聰明なれば亦欺くべきにあらず。されば畢竟無益の事なるのみ。且つ予は其の詐りて設けたる家臣の手に掛りて死なんよりは、寧ろ親愛する二三門人等の世話になりて死ぬる方が本懐に思ふなり。且つ予はよしや君臣の大禮を備へて厚く葬らるることを得ずとも、幸に二三子の在るあり。予は決して道路に死し、棄てて葬られざることを憂へんやと。子路は勇氣に富みて、冤角出過ぎたる行あり。述而篇にも夫子の御病氣の時に禱らんことを請ひて、其の理なきことを戒められたる事(二四)あるにても知るべし。

【餘義】此章は古註の如く、三段と爲して解すべし。臣なくして臣ありと爲すは天を欺かんとするかといふを第一段とし、たとひ臣あらしむるも、二三子の手に死するを以て本懐とすといふを第二段とし、又たとひ君臣の禮葬を得ずとも道路に死せずといふを第三段とす。二つの且の字によりて以

て見るべし。范氏曰く「曾子將ニ死セントス、起チテ簀ヲ易ヘテ(簀は簀なり、大夫より賜はりし身分不相應の簀を撤して、他の簀に易へて然る後歿せし故事)曰ク、吾正ヲ得テ斃ルレバ斯ニ已ム(禮記、檀弓上篇に出づ)ト。子路夫子ヲ尊バント欲シテ、臣無キノ臣アリト爲スベカラザルヲ知ラズ。是ヲ以テ詐ヲ行フニ陷ル(原文はここに「罪天ヲ欺クニ至ル」の語あり、穩かならざれば則ち)君子ノ言動ニ於ケル微ト雖モ謹マザルベカラズ。夫子深ク子路ヲ戀ラシタマフハ、學者ヲ警メタマフ所以ナリ」と。すべて禮は身分に相應するを貴ぶ、身分不相應の禮は、外觀如何に盛備を盡すと雖も、君子の爲めに擯斥せられざる者あることなし。慎まざるべけんや。

○子貢曰、有美玉於斯。韞匱而藏諸。求善賈而沽諸。子曰、沽之哉、沽之哉。我待賈者也。

【譯讀】子貢曰く、斯に美玉有り。匱に韞めて諸を藏せんか。善賈を求めて諸を沽らんかと。子曰く、之を沽らんかな、之を沽らんかな。我は賈を待つ者なり。

【章旨】子貢、美玉を以て孔子の徳に喩へ、以て其の出處行藏を問ひたるに對して、孔子、世に用ひらるるの心あるも、苟も世に用ひらるることを爲さざる旨を答へたまひしなり。

【字義】○美玉 孔子の道德に喩ふ。○韞 藏なり、裹み置くなり。○匱 櫃に同じ、匱なり。○諸 助語、之乎なり。○善賈 賈は音「カ」價に同じ、善き直段なり。○沽 賣なり。○待賈 善き價にて買ふ者を待つ義。上に善の字あれば略して單に賈といへるなり。

【直解】子貢、夫子の道德を懷きて仕へたまはざるを見て、比喻を設けて問ひて曰く、斯にすぐれて美しき玉あらんに、之を匱の中に藏めて秘め置かんか、又は善き價を探し求めて之を賣らんかと。言ふ心は天の聖人を生ずるは當に世用たるべきなり、今や夫子聖徳ありて仕へたまはざるは、俗に所謂「寶ノ持チ腐レ」にて、猶ほ徒に寶玉を秘藏して獨り珍重する者の如く、甚だ惜むべきなりと。蓋し暗に孔子に出仕を勧めたるなり。孔子答へてのたまはく、そは固より之を賣るべきなり、我は之を賣らんとして善き直段にて買ふ者を待ちて在るなりと。重ねて沽之哉とのたまひしは、賣らんと欲する心の切なるを示したまひたるなり。蓋し時君の辭を卑くし、禮を厚くして聘用せんことを待つるの意にして、子貢が比喻を以て問ひたれば、孔子も亦比喻を以て答へたまひしなり。

【考異】○求 探し求むるなり、請求の求にあらず。孔子は苟も仕へたまはずと雖も、固より明君を得て出仕せんことを求められたり。故に子貢嘗て夫子の求は、人の求に異なることを言ひて以て子禽に諭せり(貢)されば朱註に「孔子ノ言ハ、固ヨリ當ニ之ヲ賣ルベシ。但當ニ賈ヲ待ツベクシテ、當ニ之ヲ求ムベカラザルノミ」とあるは、非なり。○善賈 徂徠は賈の字を音「カ」に讀みて「善賈ハ賈人ノ善キ者ナリ」と解し、明君の聖徳を知る者に喩へたるものと爲す。されども古人此文を引く者(白虎通後漢書など)賈の字多く價に作れば、邢疏、朱註の如く音「カ」に讀み善賈は高位大祿の義とするに従ふべきなり。○沽之哉 重ねて之を言ふものは、時君に禮聘せられて、其の道を行ふに急なるの意を見る。包咸が「沽之哉、不街賣之辭、我居而待賈」と註せしは「豈之ヲ沽ランヤ」と同じ意に解したるにて、聖人が世用たらんことを望まらるる本意にあらず、従ふべからず。

○子欲居九夷。或曰：陋，如之何？子曰：君子居之，何陋之有？

【譯讀】子、九夷に居らんと欲す。或ひと曰く、陋なり、之を如何と。子曰く、君子之に居らば、何の陋か之有らんと。

【章旨】 道德ある君子は、如何なる外夷の地に行くとも、其の陋風を矯正するが故に、地の中外を分つことなきを語りたまひたるなり。「言忠信、行篤敬、雖蠻貊之邦、行矣」(五三)の章と意同じ。

【字義】 ○九夷 東方の夷の名、九とは詩經、小雅の「鶴鳴、九皋、聲聞于天」の九と同じく、多數の稱にして、必ずしも馬融の註の如く九種と限れるにあらず。○陋 鄙陋なり、風俗の悪しきをいふ。

【直解】 夫子世の衰微して道の行はれざるを憂ひて、中國を去りて東方の夷の地に往きて住居せんと欲したまふ。此亦「道行ハレズ、桴ニ乘リテ海ニ浮バン」(二三)の意と同じく、感慨之餘、偶此歎を發せられたるにて、夫子の素志にあらず。而るに或人未だ之を喻らず、以て夫子真に九夷に居らんと欲したまふと爲し、乃ち問ひて曰く、外夷は禮儀を知らず、習俗鄙陋なり。かかる地に居るとも、之を如何ともすべきやうなからんと。夫子のたまふに、君子が之に住居せば如何なる陋習と雖も、皆化して善良となるが故に、何ぞ習俗の鄙陋を憂ふることか之れ有らんやと。

【考異】 ○九夷 皇侃曰く「東ニ九夷アリ、一ニ玄菟、二ニ樂浪、三ニ高麗、四ニ滿飾、五ニ鳧更、六ニ索家、七ニ東屠、八に倭人、九ニ天鄙」と。後漢書、東夷傳に「夷ニ九種アリ、曰ク、暎夷、于夷、方夷、黃夷、白夷、赤夷、玄夷、風夷、陽夷ナリ」と。馬融曰く「九夷ハ東方ノ夷、九種アルナリ」と。仁

齋は九夷中に倭人國あるによりて疑ひて我が邦を指すと爲して曰く「太祖(神武天皇)開國元年ハ、實ニ周ノ惠王ノ十七年ニ丁ル。今ニ到ルマデ君臣相傳へ、綿綿トシテ絶エズ。之ヲ尊ブコト天ノ如ク、之ヲ敬スルコト神ノ如シ。實ニ中國ノ及バザル所ナリ、夫子ノ華ヲ去リテ夷ニ居ラント欲シタマヒシモノ、亦由アルナリ」と。此説によれば「君子居之」にて句を絶ち、君子九夷に居るあり、九夷は何の陋なることか之れ有られとの意となるなり。淮南子に「東方有君子之國」又山海經に「海外東方、有君子國、其人皆衣冠帶劍、好讓不爭」後漢書、東夷傳に「東方有君子不死之國」とあれば、仁齋の説も一寸面白きやうなれども、夷考すれば諛言たるを免れざるなり。一説に唐書、新羅傳に「新羅號君子國。知詩書ことあるなどによりて、朝鮮國を言ひ、箕子を指して君子といふなりといふも、亦穿鑿の言たるに過ぎず。要するに此章の聖言は前の浮海の歎と同じく、世を憂ひて感慨の意を託せられたるものなり。而るを夫子の實話と爲し、屑屑として其の何の地たるかを的知せんと欲するは、無用の辯といふべし。○君子居之 此句、下に屬して「君子之ニ居ラバ」と讀むときは、孔子自ら稱して君子の位に居りたまふの嫌ありて穩かならずとは、仁齋の説なれども、君子は士大夫の通稱なるのみならず、この位の抱負は孔子の有したまひしことと思はるれば、些の不穩なることも無きなり。

○子曰、吾自衛反魯、然後樂正、雅頌各得其所。

【譯讀】子曰く、吾衛より魯に反りて、然後樂正しく、雅頌各其所を得たり。

【字義】○自衛反魯 鄭玄曰く「魯ニ反リタマヒシハ、哀公十一年ノ冬ナリ。是時道衰ヘテ樂廢セリ。孔子來リ還リ、乃チ之ヲ正シ、雅頌各、其ノ所ヲ得タリ」と。○雅頌 雅は大雅・小雅、頌は周頌・魯頌・商頌なり。雅頌の詩は、朝廷宗廟に用ふる所の樂章なり。

【直解】孔子御年六十八歳の時、道の終に行はれざるを知り、思を政治に絶ち、魯に反りて樂を正したまふ。故にのたまはく、吾衛國より魯國に反りて然る後久しく廢して亂れたる樂を考訂して正しくなり、雅頌も各其所を得るに至れりと。蓋し詩は樂の章にして、樂は詩の聲なり、詩と樂とは本一なり。故に詩棄るれば則ち樂も亦亂る。必ず雅頌各其所を得て、然る後に樂正しきを得。當時蓋し雅頌混亂して倫次(ディ)を失せり。孔子之を別つに類を以てし、之を敍するに義を以てし、雅をして雅の所に、頌をして頌の所に歸せしめたまひたるなり。周南・召南の如き國風の詩を言はざるものは、之を房中に用ひ、之を鄉黨に用ひ、之を宴樂に用ひて、人人皆之を肆ひ、未だ甚だしく其の所を失はざるに由るなるべし。

【考異】皇本、反の下に於の字あり。

○子曰、出則事公卿、入則事父兄、喪事不敢不勉、不爲酒困、何有於我哉。

【譯讀】子曰く、出でては則ち公卿に事へ、入りては則ち父兄に事へ、喪事は敢て勉めずんばあらず。酒の困を爲さず。何ぞ我に有らんやと。

【章旨】能く此四事を行ふの外、他に稱すべきもの無きことを語りたまひしなり。

【字義】○出入 猶ほ内外と謂ふが如し。○酒困 酒に酔ひ苦み、其の性を亂す義。馬融曰く「困亂也」と。

【直解】外へ出でては目上の人たる公卿に能く事へ、内に入りては父兄に能く事へて孝悌の道を怠らず。又喪禮は人生の最も重んずべき事なれば、誠心を盡して能く勉めずんばあらず。又宴會等にて酒を飲み過ごして、それが爲めに苦められ、其の性を亂すことを爲さず。我は止此四事を能く行ひ得るのみ。何ぞ其の他に稱すべきものあらんや、稱すべきものなきなりと。

【餘義】何有於我哉 述而篇の第二章、默而識之云云(二〇)の終にも此語あり。朱子は、此等の事、何とて我が身に行ひ得る者あらんやと自ら謙したまひしなりと説きたれども、なほ心に安んぜざる所ある者の如く、朱子語類に於て「何有於我哉、語ニ兩處アリ、皆曉ルベカラズ。尋常三般ノ説話アリ、一ハ以テ上ノ數事ハ、我皆有ルコトナシト。一説ニ謂フ、上ノ數事ノ外、我皆復何カ有ラント。一説ニ云フ、我ニ於テ何カ有ラント。然レドモ皆安カラズ。某ハ今之ヲ闕ク」といへり。

○子在川上曰、逝者如斯夫、不舍晝夜。

【譯讀】子川上に在して曰く、逝く者は斯の如き夫、晝夜を舍かず。

【章旨】日月逝き、老の將に至らんとするを歎じたまひしなり。

【字義】○逝 往いて返らざるなり。○者 指す所あるの辭なり、逝者とは日月光陰の類。

【直解】春秋の末、天下大いに亂れ、人人其の生を聊んぜず。孔子明君を得て、之を拯はんと欲した

まひたれども、世主之を用ふること能はず。道も亦行はれず、日月逝きて老の將に至らんとするを傷みたまふ。偶川の上（はかり）に在して水流の一たび去りて復反らざるを見てのたまはく、往く者は斯の水の流の如きか、晝となく夜となく、洄洑として流れて舍むことなきなり。あはれ我が年漸く老いて、志業一も成る所なく、空しく此世を辭するに至らんかなと、深く歎息したまひしなり。陳天祥曰く「復夢ニ周公ヲ見ザル（五頁）ト同ジ」と。

【考異】朱註に「天地ノ化、往ク者ハ過ギ、來ル者ハ續グ、一息ノ停ムコトナシ。乃チ道體ハ宋儒ノ所謂理氣混合して一箇の形體を爲すもの」ノ本然ナリ。然レドモ其ノ指スベクシテ、見易キ者ハ、川流ニ如クハ莫シ。故ニ此ニ於テ發シテ以テ人ニ示ス。學者ヲシテ時時省察シテ毫髮ノ間斷ナカラシコトヲ欲スルナリ」とあれども、此經文中に來る者は續ぐといふが如き意を含める者と爲すを得ず。要するに宋儒の所謂大極道體等の説は、一家言たるに過ぎずして、恐くは孔子の未だ想ひ到りたまはざる所なるべし。

○子曰、吾未見好德如好色者也。

【譯讀】子曰く、吾未だ徳を好むこと、色を好むが如くなる者を見ざるなり。

【章旨】徳を好むに誠ある者の少きを歎息したまへるなり。

【直解】世衰へ道微にして誠心もて徳を好む者は鮮し。故に孔子歎息して曰く、人の徳を好むと稱する者多くは虚偽不實にして、未だ女色を好む者の誠心より之を好むが如き者を見しことなしと。

【考異】好徳、祖徠曰く「徳ヲ好ムトハ、有徳ノ人ヲ好ムナリ」と。亦通ず。

【餘義】謝氏曰く「好色ヲ好ミ、惡臭ヲ惡ムハ誠ナリ。徳ヲ好ムコト色ヲ好ムガ如クナレバ、斯ニ誠ニ徳ヲ好ムナリ。然レドモ民之ヲ能クスルコト鮮シ」と。

朱註に「史記（孔子世家）ニ孔子衛ニ居タマヒシ時、靈公、夫人（南子）ト車ヲ同クシ、孔子ヲシテ次乗タラシメ、市ニ招搖シテ之ヲ過グ、孔子之ヲ醜トス。故ニ是言アリ」とあれども、史記のこの記事は信據するに足らず。刪りて可なり。されば語由に「衛靈ノ闇ヲ傷ム也」とあるも亦非なり。

○子曰、譬如爲山、未成一簣、止吾止也。譬如平地、雖覆一簣、進吾往也。

【譯讀】子曰く、譬へば山を爲るが如し。未だ一簣を成さずして、止むは吾が止むなり。譬へば地を平かにするが如し。一簣を覆すと雖も、進むは吾が往くなり。

【章旨】學者の情心を戒め、自強息まず、以て道徳に進まんことを勧めたまひしなり。

【字義】○簣 土を擧ぐるの器、土籠なり「モッコ」の類。○平地 地の凸凹ある者を治めて之を平かにするなり。○往 進みて已まざるなり。

【直解】孔子ののたまはく、學者の業に進むは、譬へば山を築き作るが如し。今一籠の土を運べば、山が成就するといふ處に至りて、氣力衰へ、僅に一籠の功を成就せしめて止まんか、其の止むは吾自ら止みたるにて、是迄骨折りたる功を空しくするなり。又譬へば地面の高き處を削り、低き處を埋めて

平かにするが如し。僅に一籠の土を運びて凹處に覆へすが如き、其の功は微なりと雖も、是より進まんとする者は、吾自ら往くなり。かくして止まざれば遂には地ならしの功を成就するに至るべし。蓋し學者自ら強めて息まざれば、小を積みて大を成す。中道にして止むれば、則ち是迄の功勞は悉く棄つるに至る。其の止むも其の往き進むも、皆我が一念に在りて、人に在るに非ざるなりと。荀子、宥坐篇に「孔子曰、如坳而進、吾與之。如丘而止、吾已矣」と。詞異にして意は同じ。

【考異】朱註に「書(旅葵篇)ニ曰ク『僞山九仞(八尺を仞と曰ふ)功虧一簣』ト。夫子ノ言、蓋シ此ニ出ヅ」とあれども、旅葵は僞古文なれば、反りて論語の此聖言を取りて書の文に湊合せしなるべし。

○子曰、語之而不情者、其回也與。

【譯讀】子曰く、之に語りて情らざる者は、其れ回なるか。

【章旨】顔回の學を好むの篤きを美めたまひしなり。

【直解】顔回は夫子の御言葉聞きて能く心に了解すれば、即ち所謂一善を得れば、則ち拳拳として服膺して之を失はず(八三)造次顔沛も之に違ふことなし(一〇)是れ道を信するの篤きの致す所なり。他の弟子は十分に了解せず、道を信する事も未だ篤からず。故に時に懈怠(情なり)することあり。是れ夫子の獨り顔回を美めて之に道理を語りて懈怠すること無きは、其れ回なるかと曰ひし所以なり。

○子謂顔淵曰、惜乎、吾見其進也、未見其止也。

【譯讀】子謂顔淵を謂ひて曰く、惜いかな、吾其の進むを見る。未だ其の止るを見ざるなり。

【章旨】孔子、顔淵の死後、其の學を好みしことを追思して、其の短命を惜みたまひしなり。

【直解】顔淵の死後、夫子之を評してのたまはく、誠に惜きことにてあるかな、吾は顔淵の學徳の日に進むことあるを見て、未だ其の止ることあるを見ざりき。天若し之に年を假したらんには、機に聖人の域にも入りたらんに、不幸にして短命にして死せしことは、實に歎すべきの至なりと。蓋し此時孔子年老い、斯の道の任は専ら顔淵に在り、而るに今や亡し。痛惜したまふ所以なり。

○子曰、苗而不秀者有矣夫、秀而不實者有矣夫。

【譯讀】子曰く、苗にして秀でざる者あるかな。秀でて實らざる者あるかな。

【章旨】穀物を以て學問に譬へ、人をして時に及びて進修し、其の成るを期せんことを勉めたまふ。

【字義】○苗 穀の始めて生ずるをいふ。始めて學問するに喩ふ。○秀 稻の華を吐くをいふ。學問の次第に發達するに喩ふ。○實 穀物の成熟するをいふ。學問の成就するに喩ふ。

【直解】孔子ののたまはく、すでに芽を出したる穀物の苗にして、華を吐きて秀でざる者あるべきか。又すでに秀でて華の吐きたるに、實の成熟せざる者あるべきか。苗は自ら秀でて且つ實るべき筈なるに、左なき者あるは何故ぞ。蓋し人學びて成るに至らざれば、此の如き者あり。是を以て君子は時に及びて自ら勉むることを責ふなりと。

【考異】漢以下此文を引く者、皆以て顔淵を憐むと爲す。皇侃曰く「又顔淵ヲ歎ズルガ爲メニ譬ヲ爲ス

ナリ。萬物草木、苗稼蔚茂スルモ、秀穂ヲ經ズ。風霜ニ遭ヒテ死スル者アリ。又亦能ク秀穂スト雖モ、而カモ沴焯ノ氣ニ値ヒテ、粒實スル能ハザル者アリ。故ニ竝ニ有矣夫トイフナリ」と。然れども顔子は不幸短命にして死すと雖も、其の學徳は則ち秀でて且つ實れり。故に朱子は此章を以て、人に學を勉めしむるの聖訓と爲す。従ふべきなり。孔安國曰く、「言フ心ハ萬物生ジテ育成セザル者アリ。人モ亦然ルニ喩フ」と。この註、簡にして盡せり。

【餘義】仁齋曰く、「此レ穀ヲ以テ學ニ譬フ。猶ホ周詩ノ所謂比トイフ者ノ如シ。人ノ時ニ及ビテ進修シ、以テ其ノ成ルヲ期センコトヲ勉ムルナリ。言フハ穀ハ必ズ實ルヲ期ス。然ラザレバ則チ苗ニシテ秀ヅルニ至ルト雖モ、美稗(ビエ)ニ如カザルナリ(九〇頁)況ヤ未ダ苗セズシテ以テ既ニ秀ヅト爲シ、未ダ秀デズシテ以テ既ニ實ルト爲ス者ハ、學者ノ通患ナリ。戒メザルベケンヤ」と。

○子曰、後生可畏焉。知來者之不如也。四十五而無聞焉。斯亦不足畏也已。

【譯讀】子曰く、後生畏る可し。焉。そ來者の今に如かざるを知らんや。四十五にして聞ゆる無くんば、斯れ亦畏るるに足らざるのみ。

【章旨】孔子、人に時に及びて學を勉めんことを教へたまひしなり。

【字義】◎後生 年少者を謂ふ、猶ほ後進といふが如し。◎來者 人に就きて言ふ。◎四十五 禮記、内則篇に「四十ヲ強ト曰フ、仕フ。五十命ゼラレテ大夫ト爲リ、官政ニ服ス」と。是れ四十五は身を

立て道を行ふの時なり。◎無聞 善の人に聞ゆるなきをいふ。大戴禮、曾子立事篇に「曾子曰、五十而不以善聞、則不聞矣」と。陽貨篇の「子曰、年四十而見惡焉、其終也已(四三)と互に相發す。

【直解】孔子ののたまはく、年少後進の人は年齢も富み、氣力も強ければ、此の年力を虚くせず。自ら勵みて學問を積み重ねて已まざれば、其の造詣殆ど測るべからず。甚だ畏るべきなり。されば將來この年少の人人が、我が輩の今日の學徳に及ばざることを知らんや。或は我が輩を凌駕する者なきを保せず、是れ其の畏るべき所以なり。然れども若し時に及びて勉勵せず、四十・五十の老年に至りても、更に令聞令望の實なきは、即ち庸人にして、たとひ悔い改むるも、年すでに過ぎ、氣力すでに衰へて、以て爲すことあるに足らず。斯れ亦畏るるに足らざるのみと。先づ畏るべしと言ひて、期望して以て人を勉勵せしめ、後に畏るるに足らずと言ひて、絶望して以て人を警戒したまふ。總て是れ人に時に及びて勉勵すべきことを教へたまふ所以なり。

【考異】斯亦不足畏也已 皇本、已の下に矣字あり。是と爲す。

○子曰、法語之言、能無從乎。改之爲貴。異與之言、能無說乎。繹之爲貴。說而不繹、從而不改。吾末如之何也已矣。

【譯讀】子曰く、法語の言は、能く從ふこと無からんや。之を改むるを貴しと爲す。異與の言は、能く説ふこと無からんや。之を繹ぬるを貴しと爲す。説ひて繹ねず、從而不改めず。吾之を如何ともする末きのみ。

【章旨】人の言を聴く者は、其の言を受けて之を用ふるの實あるを費ふことを教へたまひしなり。

【字義】◎法語之言 正しく之を言ふなり、禮法教誨の言なり。◎巽與之言 婉曲にして之を導くの言なり。巽は遜と同音、恭なり。與は親む義なり。◎說 悅なり、心に悅びて從ふなり。◎繹 「タヅメル」と訓す、其の緒を尋釋するなり。絲を抽く者は、必ず其の緒を尋ぬ。故に之を繹と謂ふ。言を聴く者は、必ず其の言意の在る所を尋ぬ。亦是れ繹なり。

【直解】孔子のたまはく、凡そ人を規し諫むるには、常に先方の人に因りて説き方を異にすべし。若し我人を諫むるに法度によりて嚴正切直に之を言へば、彼能く理の當然なる所に服従することなからんや。必ず服従すべきなり。然れども徒に面従するのみにては不可なり。必ずや心底より悔悟して、翻然として是迄の惡を改むるを貴しと爲すなり。又謙遜婉曲にして親み與する所ある辭の中に、忠告の意を寓したる言は、彼能く悅び服することなからんや。必ず悅び服すべきなり。然れども徒に悅ぶのみにては不可なり。必ずや其の主意の在る所を尋ね求めて、自ら感悟して善に遷ることを貴しと爲すなり。若し巽與の言を悅びて、其の主意の在る所を尋ねず、法語の言に従ひて、其の惡を改めざる者は、是れ終に自ら新にするの心なき者なり。此の如き者は吾は終に之を如何ともすべき術なきなりと「末ニ如レ之何レ也巳矣」とは絶だ之を舍つるの辭にして深く學者を警むる所以なり。

【餘義】仁齋曰く、「法語ニ從ハズ、巽言ヲ說バザル者ハ、與ニ言フ可カラザル者ニシテ、而シテ固ヨリ論ズルニ足ラズ。其ノ或ハ從ヒ且ツ說プト雖モ、而カモ改メ釋メタルコトヲ知ラザレバ、則チ夫ノ從ハズ、說バザル者ト其ノ歸テ同クス。戒メザルベケンヤ」と。

○子曰、主忠信、毋友不如己者。過則勿憚改。

【譯讀】子曰く、忠信を主とし、己に如かざる者を友とすること毋かれ。過ちては則ち改むるに憚ること勿かれ。

【章旨】學者徳を修むるの三要件を語りたまひしなり。

【直解】此章の語は、既に學而篇第八章(一六)に出づ。就いて見るべし。朱子は「重出シテ其ノ半ヲ逸(失なり)ス」と註したれども、非なり。大抵孔子の訓言は、或は人人の性癖に因り或は才徳の高下に因りて説き方を異にす。されば諄諄として反覆之を覺言せらるる者あり。之を約言せらるる者あり。其の同語・類語の疊出散見せる者の如きは、以て夫子の反覆丁寧に垂誨せられし言たるを知るべきなり。

○子曰、三軍可奪帥也。匹夫不可奪志也。

【譯讀】子曰く、三軍も帥を奪ふ可きなり。匹夫も志を奪ふ可からざるなり。

【章旨】人は常に志を立つるを以て先と爲すべきことを語りたまひたるなり。

【字義】◎三軍 天子は六軍、諸侯は三軍なり、一軍は一萬二千五百なれば、三軍は、三萬七千五百人なり。◎匹夫 猶ほ一人といふが如し、必ずしも微賤の者を謂ふに限らず。

【直解】凡そ人に依りて立つ者は頼むに足らず。己に存する者は、獨り頼むべしと爲す。故に孔子の曰く、三軍の衆を以て一主將を衛るが如き、容易に其の主將を奪ひ取ること能はざるが如しと雖も、其の強勇は人に在りて己に在るにあらず。故に人心和せざる時は、其の主將を奪ひ取ることを得べし。

之に反して匹夫の其の志を守るが如きは、力微にして容易に其の志を奪ひ取ることを得べきが如しと雖も、守る所の志、苟も堅ければ、其の身死すと雖も、其の志は得て奪ふ可からず。何となれば守る所己に在りて、人の與る所にあらずればなりと。見るべし士君子は只志を立つるを貴ぶ、志既に定まれば、則ち所謂富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず、威武も屈する能はざる大丈夫の地位に(五解三)至ることも、何ぞ難きことか之れあらん。太宰純曰く「孔子之意重、在二下句こと。之を得たり。」

【考異】徂徠曰く「此レ人君ノ爲メニシテ之ヲ言フ、其ノ匹夫匹婦ヲ侮ラザランコトヲ欲ス」と。亦通す。但「後儒知ラズ、誤リテ學者ノ其志ヲ立テテコトヲ欲スト謂フ。儻側(オロ)ナル哉」と曰ふは過言なり。

○子曰、衣敝緼袍、與衣狐貉者立、而不恥者、其由也與。「不忮不求、何用不臧」子路終身誦之。子曰、是道也、何足以臧。」

【譯讀】子曰く、敝れたる緼袍を衣て、狐貉を衣たる者と立ちて、恥ぢざる者は、其れ由なる與。忮はす、求らず、何を用てか臧からざらん。子路終身之を誦す。子曰く、是の道や、何ぞ以て臧しとするに足らんと。

【章旨】此章はもと一章を合して一章と爲す。前半は、孔子、子路の貧富を以て其の心を動かさざるを稱したまひ、後半は子路を警めて道に進ましめたまひしなり。同じく子路に教へたまひし言なり。故に併せて一章とせしなり。

【字義】○敝 壞なり。○緼袍 緼は菜著(ウケイシ)なり。袍は衣の著(ウケ)ある者なり。緼袍は即ち綿入

の服なり、蓋し衣の賤しきものなり。○狐貉 狐や貉の皮を以て裘と爲したる者にて、衣の貴きものなり。○立 並び立つなり。○忮 害なり、人の有るを嫉みて之を害はんと欲するなり。○求 貪なり、己の無きを恥ちて之を取らんと欲するなり。不忮不求是、詩經、鄘風、雄雉篇の詩の辭にして、子路の平生誦詠せし所なり。猶ほ南容の白圭の詩を三復せし(五解四)が如きなり。○終身 平恆久の意に用ふ。孟子、梁惠王上篇に「樂歲終身飽」(六七頁)の終身に同じ。平日之を誦して以て身を終へんと欲するの意。○是道也 不忮不求の二事を指す。○臧 善なり。

【直解】孔子ののたまはく、凡そ衆人の情は、貧富を以て心を動かし易きものなり。今若し壞れたる綿入の粗服を著て、彼の狐や貉の美しき皮衣を著たる人と並び立ちて、毫も心に恥ぢず、平氣で居る者は、其れ唯伸由なるかと。蓋し子路の志、惡衣惡食を恥ぢず(七頁)能く貧富を以て其の心を動かさず。與に道に進むことを譲るに足れり。故に孔子之を稱歎したまひしなり。

子路は、詩經、鄘風の詩に、人の有する所の善を嫉みて之を害ふことなく、己の無きを恥ちて貪り取らんとする慾心なき者は、外物の爲めに其の心を累はさることなき者なり。以て徳に進み業を修むべし。さればこの不忮不求の心は、何の處に用ひて臧からざることあらんやとある語の、己の志尙と相合ふを以て、深く之を喜び、居常之を口誦し居たり。孔子以爲へらく、不忮不求の道は、もと消極的の修養法にして、衆人(ナヒトミ)を以てして之を能くすれば、亦以て善しと爲すべしと雖も、子路の賢を以てしては、何ぞ之を以て善しと爲すに足らんや。是より更に善き道あり、宜しく進みて其の極に到るべきなりと。何足以臧は、何用不臧を反言して、子路を激して之を進めたまひしなり。

【考異】 敝 皇本、弊に作る、説文、袍字の下に論語を引きて亦弊に作る、弊は敝の俗字なり。
 【餘義】 徂徠曰く「不_レ枝、不_レ求ハ、當ニ別ニ一章ト爲スベシ。子路此詩ヲ誦ス。而シテ孔子之ヲ抑ヘタマフ。是レ別事ノミ。孔子ノ子路ニ於ケル或ハ稱シ、或ハ抑フ。材ヲ成シタマフ所以ナリ。故ニ聯ネテ之ヲ記シ、學者ヲシテ孔子ノ英材ヲ教育シタマフノ意ヲ知ラシム。朱子知ラズシテ、孔子詩ヲ引キテ子路ヲ美メタマフト謂フハ、非ナリ」と。此説従ふべきに似たれども、姑_ク皇本に従ふ。

○子曰、歲寒然後、知松柏之後凋也。

【譯讀】 子曰く、歲寒くして然る後に、松柏の後凋を知るなり。
 【章旨】 君子は事變に遇ひて節操始めて見るべきことを語りたまひしなり。
 【字義】 〇歲寒 例年よりは特に寒き歳の義。〇松柏 柏は「コノデガシハ」檜に似たる常緑樹。〇後凋 凋まざるなり。左傳に人の善を稱するに、往往後亡者と言ふ。此と義を同くす。衆卉の皆凋落するに方りて、獨り松柏は挺然(メキンツ)として色を變ぜず。即ち衆卉の凋落に後れて鬱蒼たるなり。
 【直解】 孔子ののたまはく、凡そ人の節操の有無は、平時に在りては見るに難し。時窮するに至りて、節乃ち見るるなり。彼の松柏の節操は、四時を貫きて變ぜざるなり。然れども春夏萬木鬱蒼たる時に當りては、之を識別すること能はず。唯歲大いに寒くして、萬木凋落する後に至りて、獨り松柏の挺然として其の操を變へざることを知るなりと。以て君子の治世に處するや、衆人と異らざるが如きも、一旦事變に遇ふや、其の節挺然として見るるに喩へたまひしなり。范氏曰く「小人ノ治世ニ

在ルヤ、或ハ君子ト異ルコトナシ。惟利害ニ臨ミ、事變ニ遇ヒテ、然後ニ、君子ノ守ル所、見ルベキナリ」と。謝氏曰く「士窮シテ節義ヲ見シ、世亂レテ忠臣ヲ識ル」と。然後知の三字最も味あり。

【考異】 凋 邢本朱本、彫に作る、是れ假借字なり。今皇本に従ひて凋に作る。
 【餘義】 荀子、大略篇に「歲不_レ寒、無_ニ以_テ知_ルニ松柏」老子十八章に「國家昏亂、有_ニ忠臣」唐書、蕭瑀傳に「疾風知_ニ勁草、板蕩(國家の亂るること)識_ニ誠臣」とは、皆此章の義と同じ。

○子曰、知者不_レ惑、仁者不_レ憂、勇者不_レ懼。

【譯讀】 子曰く、知者は惑はず。仁者は憂へず。勇者は懼れず。
 【章旨】 知仁勇の三達徳を贊したまひしなり。
 【直解】 知者は理を見ること明かにして、是非曲直を辨す。故に惑亂せざるなり。仁者は心寛くして命を知り、仁に安んじて其の樂を改めず。故に憂患なし。勇者は善く果斷にして、義を見て必ず爲し、強禦を畏れず。故に懼れざるなり。
 【餘義】 仁齋が「中庸ニ曰ク『知仁勇ノ三者ハ、天下ノ達徳ナリ』」ト。見ルベシ此ヲ外ニシテハ、更ニ徳ヲ成シ材ヲ達スベキ者ナキコトヲ。故ニ聖人此三者ヲ擧ゲテ、學者ヲシテ此レニ由リテ之ヲ行ハシム。蓋シ知ニ本ヅキ、仁ニ全クシテ、勇ニ決ス。固ニ學ヲ爲スノ次第ニシテ、徳ヲ成スノ全體始終本末盡セリ」と曰へるは、略朱子の説と同じけれども、此章は、此の如く深解せずして、但知仁勇の三徳を具ふる人の性質効果を明かにし、弟子進徳の資とせられたるものと解するを穩當とす。

○子曰、可與共學、未可與適道、可與適道、未可與立、未可與權。

【譯讀】子曰く、與に共に學ぶ可きも、未だ與に道に適く可からず。與に道に適く可きも、未だ與に立つ可からず。與に立つ可きも、未だ與に權る可からず。

【章旨】學問の至極は、權、即ち事の輕重を權りて、宜しきを制するを得るに至るに在るを語りたまふ。【字義】○可與 與に共に此事を爲すべきを言ふなり。即ち其の人に許すの辭なり。○適 往なり。○立 成立する所あるを言ふ。即ち明に道理の當然を知りて、外物の爲めに惑はされず、固く守る所あるなり。○權 稱錘(ハカリノ)なり。物を稱りて輕重を知る所以の者なり。即ち事の輕重を稱りて、變通して義に合はしむるを謂ふなり。中庸の中と同義なり。

【直解】孔子のたまはく、學を爲すには漸を以て進むことを要す。茲に人あり其の人天資忠信にして、道を求むる志あれば、與に共に學ぶことを得べきなり。然れども徒に學に志すのみにして、其の往く所を知らず。心に得る所あらずして、他岐に惑ふことあるときは、則ち與に共に道に適くことは難きなり。已に其の往く所を知りて心に得る所あり、他岐に惑ふことなければ、與に共に道に適くことを得べきなり。然れどもそのみにて、固く道を執り守りて、事物の爲めに心を搖かし移さるることなきに至らざれば、則ち未だ共に道の上に立つべきことは難きなり。已に執り守る所ありて、事物の爲めに搖かし移さるる事なきときは、與に共に立つことを得べきなり。然れどもそのみにて

は、未だ時宜に隨ひ變通し、事物の輕重を權りて義に合はしむることは爲し難きなり。學は能くこの權るといふことを得るに至りて、始めて大成すといふべきなりと。

【餘義】仁齋曰く「漢儒、經ヲ以テ權ニ對シ、經ニ反シテ道ニ合フヲ權ト爲スト謂ヘルハ、非ナリ。權ノ字ハ當ニ禮ノ字ヲ以テ對スベシ。經ノ字ヲ以テ對スベカラズ。孟子曰ク『男女授受不レ親、禮也。嫂溺、援レ之、以レ手者、權也』(八五頁)ト。蓋シ禮ハ一定ノ則アリテ、而シテ權ハ其ノ宜シキヲ制スル者ナリ。故ニ孟子ハ權ヲ以テ禮ニ對シテ言ヒ、經ニ對シテ言ハザリキ。漢儒蓋シ湯武ノ放伐ヲ以テ權ト爲ス、故ニ經ニ反シテ道ニ合フト謂フ。殊ニ知ラズ、經ハ即チ道ナリ、既ニ經ニ反セバ、焉ゾ能ク道ニ合ハンヤ。天下ノ同ジク然リトスル所、之ヲ道ト謂フ、一時ノ宜シキヲ制スル、之ヲ權ト謂フ。湯武ノ放伐ハ、蓋シ天下ノ心ニ順ヒテ之ヲ行フ、一夫ノ紂ヲ誅スルナリ、君ヲ弑スルニ非ザルナリ。乃チ仁ノ至リ、義ノ盡ルナリ、一時ノ宜シキヲ制スル者ニ非ザルナリ。故ニ當ニ之ヲ道ト謂フベクシテ、而カモ之ヲ權ト謂フベカラザルナリ。先儒(胡雲峰を指す)又謂フ『權ハ聖人ニ非ザレバ用フベカラズ』ト。尤モ非ナリ。夫レ權ハ學問ノ至要ナリ。道ノ權ナカルベカラザルヤ、猶ホ敵ニ臨ムノ將ノ、變ニ應ジテ務ヲ制シ、舟ヲ操ルノ工ノ風ニ隨ヒテ柁ヲ轉ズルガ如シ。若シ否レバ、則チ必ズ師ヲ覆シ而シテ溺ヲ致サン。故ニ權ハ輒ク用フベカラズト謂フハ、則チ可ナリ。聖人ニ非ザレバ用フベカラズト謂フハ、則チ不可ナリ。孟子曰ク『執中無權、猶執一也』(一九頁)ト。學ノ權ナカルベカラザルヲ言ヘル也」と。

○唐棣之華、偏其反而。豈不爾思。室是遠而。子曰、未之思也。

夫何遠之有

【譯讀】唐棣の華、偏として其れ反せり。豈爾を思はざらんや。室是れ遠ければなりと。子曰く、未だ之を思はざるなり。何ぞ遠きことか之れ有らんと。

【章旨】孔子、詩の辭を借りて、人は道を思ひて之を得んことを求むべし。遠しとして捨つべからざることを諭したまひしなり。

【字義】○唐棣 郁李なり。唐一に棠に作る、唐と棠と普通、二物にあらず。和名「ニハムメ」。「シデザク」ラ。爾雅に「一名ハ移、凡ソ木ノ華、皆先ヅ合シテ而ル後ニ開ク、惟此レハ先ヅ開イテ而ル後ニ合ス」と。○偏 朱註に「偏ハ晉書(劉喬傳)ニ翻ニ作ル、然ラバ則チ反モ亦當ニ翻ト同ジカルベシ。華ノ搖動スルヲ言フナリ」と。○而 語助なり。○爾 其の思ふ所の人を指す。○唐棣四句 逸詩なり。今の詩經の常棣の詩とは別なり。蓋し興體にして、上の兩句を以て下の兩句を呼び起すのみ。蓋し男女相思の詩ならん。されども辭意婉にして平和、麋狎(ナレク)の態なければ、蘇軾は以て賢を思ふの詩と爲す。未だ其の孰れか是なるを知らず。○夫 疑の辭。

【直解】逸詩にいふ、唐棣は物の情なき者なり。然れども其の花尚ほ翩翩然として搖き、時に感じて開ける者の如し。況や我と汝とは有情の人なり。豈心に感じて汝を思はざることあらんや。但汝を思ふと雖も、居る所の家の隔りて遠きが故に、親しく相及ぶこと能はざるなりと。孔子この詩を借りて其の意を反してのたまはく、詩に「室是遠 而」とあれども、畢竟是れ未だ思はざるのみ、若し果して思ふことの切に至らば、それ何ぞ居室の遠きことかこれ有らんや。人の道を求むるも亦此の如し。道は遠きにあらず、心誠に道を思はば、直ちに道に到ることを得べし。世人の思ふことなくして徒に道を以て遠しと爲すは誤れりと。述而篇の「仁遠 乎哉。我欲仁、斯仁至矣」(二三)の章、又中庸の「人之爲道而遠レ人、不可レ以爲道」(一四)と、其の意相同じ。

【考異】○何遠之有 皇本、有の下に哉字あり。○唐棣之華、偏其反而 履軒曰く、「此レ逸詩ナリ。故ニ強ヒテ解シ難シ。然レドモ文ニ隨ヒテ之ヲ推ストキハ、亦略ニ知ラルベシ。此レ六義ニ於テ比ニ屬ス。花ノ枝下ニ著ク者、兩三相連リテ下垂ス。所謂萼柎離離トハ是レナリ。其ノ枝上ニ著ク者、一ハ仆レテ彼ニ向ヒ、一ハ仆レテ此レニ向フ、所謂偏 其反而トハ是レナリ。莖ハ一處ニ出デテ、而シテ花ハ東西ニ分ル。以テ我ト爾本一處ニ在リテ、而シテ今ハ一東一西、遠ク相離異スルニ喻フルナリ。蓋シ男女ノ際離(ツムキハ)スル者、其ノ情ヲ述ブルナリ。或ハ是レ兄弟朋友タルモ、亦未ダ知ルベカラザルナリ」と。亦一解として存すべし。

○此章は皇本・邢本皆前章と合して一章と爲す。故に何晏曰く、「華反シテ而ル後ニ合ス、此詩ヲ賦スル者、以テ權道反シテ而シテ後ニ大順ニ至ルヲ言フ」と。然れども文意を按するに上文に接せず。今は朱子が分ちて一章と爲すに従ふ。

鄉黨第十

前の子罕篇は、備に孔夫子の聖徳の盛んなることを記せり。故に此篇は備に其の躬行の美を述べて、以て之に次ぐ。即ち夫子平日の一動一靜より、言語衣服飲食の際に至るまで、門人皆審かに視て之を詳記し、以て後世に始したるなり。輔氏曰く、「聖人ノ道、精粗トナク、本末トナク、大ハ治國平天下ヨリ、小ハ容貌辭色ニ至ルマデ、皆此ノ廣大ノ心中ヨリ流出ス。此一篇聖人ノ容貌辭色ヲ記スルコト、是ノ如ク詳カニシテ且ツ悉ス者ハ、聖學ノ正傳ヲ示シテ、以テ後世ニ垂ルル所以ナリ」と。尹氏曰く、「甚ダシ孔門諸子ノ學ヲ嗜ムコトヤ。聖人ノ容色言動ニ於テ、謹ミ書シテ備ニ之ヲ録シ、以テ後世ニ貽サザルコトナシ。今其ノ書ヲ讀ミ、其ノ事ニ即ケバ、宛然トシテ聖人ノ目ニ在ルガ如キナリ。然リト雖モ聖人豈拘拘トシテ之ヲ爲ス者ナランヤ。蓋シ盛徳ノ至、動容周旋、自ラ禮ニ中ルノミ。學者心ヲ聖人ニ潛メント欲セバ、宜シク此ニ於テ求ムベシ。舊說凡テ一章ト爲ス。今分チテ十七節ト爲ス」と。今改めて十一章と爲す。篇を郷黨と名づけたるは、亦篇首に「孔子於郷黨、恂恂如也」とあるに取る。或は以て郷黨中の事を記するに由ると爲すは、非なり。

○孔子於郷黨恂恂如也。似不能言者。其在宗廟朝廷、便便言。唯謹爾。朝與下大夫言、侃侃如也。與上大夫言、誾誾如也。君在

跖如也。與與如也。

【釋讀】孔子郷黨に於ては、恂恂如たり。言ふこと能はざる者に似たり。其の宗廟朝廷に在すや、便便として言ふ。唯謹めるのみ。朝にして下大夫と言へば、侃侃如たり。上大夫と言へば、誾誾如たり。君在せば、跖如たり。與與如たり。

【章旨】孔夫子の郷黨宗廟朝廷に在すや、其の容貌言語の各宜しきに合ふことを記するなり。

【字義】○恂恂如 恭順にして質朴なる貌。○似不能言者 言ふこと能はざるにあらず、恭謹遜順(リクダシム)にして言ふこと能はざるが如く見ゆるをいふ。故に似といふ。○便便 事理を明かに辯ずる貌。○下大夫 孔子の僚輩なり、孔子時に魯の大夫たり、上下は孔子よりして分つ。○侃侃如 和ぎ樂む貌。侃は衍の假借字。○誾誾如 中正にして和ける貌。○君在 君出でて朝を視る(政を聴く)なり。

○跖如 恭敬にして安からざる貌。○與與如 猶ほ容與といふが如し、從容として紆緩なる貌。

【直解】郷黨は父兄宗族の居る所なるが故に、孔子の郷黨に在すや、其の容貌言語は、恭順質朴にして言ふこと能はざる者に似たり。これ己より目上の父兄宗族に對して、謙遜にして己の賢知を以て人に先だつことを爲したまはず。故に然るなり。又宗廟は禮法の在る所、朝廷は政事の出づる所なるが故に、其の言語明かに辯ぜざるべからず。故に夫子の宗廟朝廷に在すや、事詳に問ひ、明かに辯じて遺す所なし。但其の間、唯謹慎して放肆ならざるのみ。又夫子朝廷にて己の僚輩たる下大夫と物言はるる時には、心置きなく和ぎ樂みたまひ、己より上席の上大夫と物言はるる時は、常に中正

を守りて阿り従ひたまふが如きことなし。又君の朝廷に出でて政を聴く位に在す時は、恭敬の至、安からざる所あるが如き中に、自然に「ユツタリ」として、くつろぎたまふ所あり、所謂「恭而安」(四頁)といふが如き御態度にて在すなりと。

【考異】侃侃閑閑 朱子は、許氏(後漢の許慎)の説文に据りて「侃侃ハ剛直ナリ。閑閑ハ和悦ニシテ諍フナリ」と註したれども、剛直は權勢を以て下位の人を凌ぐの嫌あり。且つ和悦は諂諛に近きのみならず、上に事ふるに、何ぞ必ずしも諫諍を以て容儀に發するを用ひん。恐くは共に聖人の氣象にあらず。且つ先進篇に「閔子侍側、聞問如也」(三五頁)の聞問を和悦にして諍ふと解するの穩當ならざるを知らば、孔安國の「侃侃ハ和樂ノ貌、閑閑ハ中正ノ貌」と註せし、極めて允當なるに若かざるを知らん。

○君召使擯、色勃如也、足躩如也。揖所與立、左右手。衣前後襜如也。趨進翼如也。賓退必復命曰、賓不願矣。

【譯讀】君召して擯せしむれば、色勃如たり、足躩如たり。與に立つ所を揖すれば、手を左右にす。衣の前後襜如たり。趨り進めば翼如たり。賓退けば必ず復命して曰く、賓願みずと。

【章旨】孔子が國君の爲めに擯相となりたまひし時の容を記す。第一節は、初めて君命を受けて禮に莅まるるの時を言ひ、第二節は、禮を行ひたまふの時を言ひ、第三節は、禮の畢りし後を言ふ。

【字義】○擯 賓客を迎接するなり、一に楨に作る。切韻に「楨ハ導ナリ、助ナリ、相ナリ」と。凡そ朝聘の禮には賓主ともに各、副あり。賓の副を介と曰ひ、主の副を擯と曰ふ。上公は九介、侯伯は七介、子

男は五介、各、其の命數に隨ふ。擯は命數の半を用ふ。上公九命の如きは五人を用ふ。次序を以て命を傳ふるなり。○勃如 顔色を變ずる貌。○躩如 盤辟(トホモ)の貌。即ち足の進むこと能はざる貌。皆君命を敬するが故に然り。○所與立 本國の臣にて同じく擯となりたる者をいふ。○揖 手を拱き起すをいふ、命を傳ふる時の禮なり。○左右手 次序を以て命を傳ふるが爲めに、左の方の人を揖すれば其の手を左にし、右の方の人を揖すれば、其の手を右にす。一たびは仰ぎ、一たびは俯す。故に衣の前後襜如たるなり、襜如は衣服の整へる貌。○趨進 翼如 疾く趨起して進むときは拱を張る、(兩臂を張る)鳥の翼を舒ぶるが如くするなり。

【直解】國君孔夫子を召して他國より來れる賓客を迎接せしめらるる時は、夫子は之を承りて、御用大事と思召さるる餘りに、必ず顔色を變へ、又足は進まんとして進むこと能はざるが如きなり。これ擯の職たる極めて重きものなるを以て、君命を敬して敢て懈怠したまはず、故に然るなり。いよいよ禮を行ふ場に莅み、擯と爲りて命を傳ふる時、與に立つ所の擯者を揖するに、左に在る人を揖して拱手する時は、手を左にし、右の人を揖する時は、手を右にせらる。其の時、衣の前も後もよく整ひて亂れ動くことなきなり。國君已に賓を延き入れ、擯者其の後に從ひて入る時には、疾く趨りて進むに、拱きたる手を張りて端正なること、恰も鳥の兩翼を張れるが如し。禮畢りて賓の退きて館に歸るを送る時は、孔子必ず君に反命して、賓は後を顧みずして去りぬと告げたまふ。かくて君は路寢に反ることを得るなり。凡そ人情疑ひ慮る所あれば、必ず回顧す。賓の顧みずして去るを見れば、其の賓の心に満足せしを知るに足る。蓋し賓の顧みずして去るは、古の制なり。賓已に退くと雖も、主君の敬は

猶ほ存する者あり。故に賓不顧と告ぐるは、君の敬を紆べ君をして安心せしめたまふ所以なり。

【考異】○左右手 皇本、手の上に其の字あり。是と爲す。○躐如 一説に「速ニ行クナリ、閑歩ニ暇アラザルヲ謂フ」と、非なり。○翼如 説文選字の下に「趨進、趨如也」に作る。今本翼に作るは省畫なり。

○入公門、鞠躬如也。如不容。立不中門、行不履闕。過位、色勃如也。足躐如也。其言似不足者。攝齊升堂、鞠躬如也。屏氣似不息者。出降一等、逞顏色、怡怡如也。沒階趨進、翼如也。復其位、蹶蹶如也。

【譯讀】 公門に入れば鞠躬如たり。容れられざるが如し。立つに門に中せず、行くに闕を履まず。位を過ぐれば、色勃如たり、足躐如たり。其の言は足らざる者に似たり。齊を攝けて堂に升れば、鞠躬如たり。氣を屏めて息せざる者に似たり。出でて一等を降れば、顔色を逞ちて、怡怡如たり。階を沒して趨り進めば、翼如たり。其の位に復れば、蹶蹶如たり。

【章旨】 孔子が朝廷に在す時の容を記す。第一節は、門に入りたまふ時を言ひ、第二節は、君の朝位を過ぎたまふ時を言ひ、第三節は、堂に升りたまふ時を言ひ、第四節は、出でて降りたまふ時をいふ。

【字義】 ○鞠躬如 身を曲むる貌、公門は高大なるに、其の身を曲めて容るること能はざるが如くする

は敬謹の至なり。○不中門 門には兩方に扉ありて、中央の扉の交る處に闕あり。即ち門概あり。又兩旁の門柱に各一木を豎つ、之を楨と名づく。楨は車の出入する時に、門に觸るることを防ぐ爲めに設く、此闕と楨との中央を中といふ。外國の君は西の中を通り、國君は東の中を行き、臣は闕の東邊を通るなり。中は君の出入する所、故に臣は之に當りて立つことを得ず。禮記、曲禮に「大夫士出、君門、由闕右(東を右と爲す)不踐闕」とあるは、是れなり。○闕 「シキミ」と訓す、門限なり。○過位 君の空位を過ぐるなり、門扉の間に、人君立の位を謂ふ。○攝齊 攝は攝(カカ)なり、齊は裳の下の縫なり。即ち裳裙を謂ふ。曲禮に「兩手、攝衣、去齊尺」と、是れなり。○屏氣 屏は藏なり、退なり。氣息を退けひそめて内のみ吸入するが如く、極めて靜肅にするなり。○一等 等は階の級なり。○逞 放なり。○怡怡如 和悅の貌。○沒 盡すなり、沒階とは、階段を降り盡すなり。○其位 來る時に過ぐる所の位なり。

【直解】 孔子公門に入りたまふ時は、肅然として敬を起し、身を曲めて高大なる門なるに、猶ほ容れられざるが如き御様子なり。これ敬謹の至、自ら然るなり。又刻限尙ほ早く、立ちて以て時を待ちたまふには、門の闕と楨との中央に當りて立ちたまはず。これ君の出入せらるる處にして、臣たる者、ここに當りて立つは不敬なればなり。又行くには門限を履むことをなしたまはず。これ一には不遜の行に似たると、一には後より來る人の衣裳を汚す恐あればなり。又治朝にて君の空位の前を過ぎたまふ時は、君在さずとも、敢て之を慢易(アヤ)することなく、必ず之を敬して顔色は勃如として變じ、足の容は躐如として、たちもとほりて進みがてになりたまふ。又門より堂に升る間に、

同朝者に逢ひて已むを得ず談話せらるることあるも、詳かに多く語りたまはず、言ひ足らざる状の如し。これ漸く君に近づくを以て、敢て卑に爲したまはざるなり。又裳裙を掲げて堂に升りたまふは、誤りて其の裳を踏みて、爲めに跌きて容を失はんことを恐れたまへばなり。其の時の御様子の鞠躬如として身を曲めて謹まるるは、追追君の御前に近づけるが爲めなり。其の上鼻息を藏めひそめて、息をせられざるが如くに慎みたまふとなり。已に君の御前を辭し、出でて堂を下らんとして階を降りたまふこと一級なれば、漸く君に遠ざかるが故に、少しく心を安んじ氣を舒べ、顔色を放ち解きて、和ぎ悦びたまふなり。かくて階を下り盡して疾く趨りたまふには、手を拱きて鳥の兩翼を張りたるが如き御様子なり。復君の虚位を過ぎたまふ時は、恭敬の心、なほ盡きずして、蹶踏如として何となく安からざるが如き御様子なりと。

【考異】○趨進 朱註に、陸氏釋文を引きて「趨ノ下ニ本進字ナシ。俗本ニ之レアルハ誤ナリ」とあれども、史記、孔子世家にも「趨進」に作り、また禮記、曲禮の「帷薄之外、不趨」の正義、儀禮、士相見禮疏にも、竝に論語を引きて進の字あり、然れば則ち兩漢より以て唐初に至るまで、皆「没階趨進」に作れるを知るべし。釋文の説、必ずしも従ふべからず。息軒も「進ノ字アルハ、疑フラクハ上章ニ涉リテ誤リ衍スル耳」と註せしも亦臆断たるを免れず。趨進とは趨前の謂なり。○復其位 孔安國曰く「來ル時、過グル所ノ位ナリ」と、従ふべし。宋儒以て人臣朝班の位と爲すは、非なり。李惇曰く「其ノ位ニ復ストハ、君ノ虚位ヲ過グルナリ。若シ其ノ字ニ泥定シテ、以テ己ノ位ト爲サバ、又何ゾ必ズシモ蹶踏タラシヤ」と。

○執圭、鞠躬如也。如不勝。上如揖。下如授。勃如戰色。足踏踏如。有循。享禮。有容色。私覲。愉愉如也。

【譯讀】圭を執れば、鞠躬如たり。勝へざるが如し。上ぐるは揖するが如く、下ぐるは授くるが如し。勃如として戰色あり。足踏踏として循ふこと有るが如し。享禮には容色あり。私覲には愉愉如たり。

【章旨】此章は孔子が、君の爲めに鄰國に聘問せられし時の禮容を記す。第一節は、重器を執る時の敬慎の状を言ひ、第二節は、享禮の時、第三節は、私覲の時の状を言ふ。

【字義】○圭 諸侯の命圭（天子の賜ふ所の符信なり）即ち古者諸侯封を受くる時、天子授くるに圭を以てして瑞節（シル）となすをいふなり。鄰國に聘問する時は、大夫をして執りて以て信を通ぜしむるなり。○如不勝 重くして舉ぐることを能はざるが如きなり。○上 如揖 下 如授 圭を執るに平かなること衡の如く、手と心胸と齊くす。步趨の間、手微く高下するありと雖も、高きも揖するの容に過ぎず、卑きも授くるの容に過ぎざるなり。○戰色 戰は戰慄の戰なり。戰き懼るる色なり。○踏踏 足を舉ぐることを促狭（セマカニ）なるなり。即ち「コマタ」に歩むなり。○如不有循 前の趾を舉げて後の踵を曳きて行くに、地を離れずして物に縁るが如きをいふ。禮記、玉藻篇に「擧前曳踵」とあるは是れなり。○享禮 享は獻なり。聘禮畢りて君命を以て禮物（土産物なり）を鄰國の君に獻する禮なり。○有容色 和ける色あるなり。○私覲 覲は見なり、聘と享とは公事なり。覲は

私事なり、故に私觀といふ。○愉愉如 顔色の和ける貌。

【直解】孔子、君命を受けて鄰國に聘問したまふに、圭を執りたまふ時には、鞠躬として身を曲めて、敬慎し、其の圭を持つこと如何にも重くして擧ぐるに勝へざるが如くに見ゆ。圭を持つこと平かにして、手は心と齊くし、歩行の間、足或は高低するあれば、手もそれに隨ひて微しく上下することあるも、高きも人に掛するが如く、卑きも人に物を授くるが如くするに過ぎず。其の顔色は勃如として變じ、懼れて戦く御様子あり。足の容は踏踏として「コマタ」に歩みて、足、地を離れず、物に縁り循ひて行くが如き御様子なり。又已に聘禮を行ひ畢りて、享禮とて、皮幣與馬の類を獻する時は、和ぎ悦べる容色あり。朱子曰く「聘ハ初メテ見ルノ時ナリ、故ニ恭肅ヲ極ム。既ニ聘シテ享スル時ハ、贈物アリテ其ノ意ヲ行フ。故ニ聘スル時ニ比スレバ、漸ク紓ビテ容色アルナリ」と。又聘と享との禮畢りて、私觀即ち私の禮を以て見ゆる時には、宴禮に醴蓬豆脯醢ありて顔色愉愉如として和ぎて談笑したまふとなり。黃氏曰く「圭ヲ執ルハ禮ノ正ナリ。享禮ハ稍輕シ、私觀ハ又輕シ。故ニ其ノ容節ノ同ジカラザルコト此ノ如シ」と。

【考異】此章、形容親切、假設の語に非ずして、實事たること疑なし。仁齋曰く「按ズルニ孔子鄰國ニ聘セラレシノ事ハ、經傳ニ載セズト雖モ、然レドモ當時門人親シク見テ直チニ之ヲ記シタレバ、則チ郷黨ノ一篇、尤モ信據スベキナリ」と。此説を是と爲す。朱註に「晁氏曰ク、孔子定公九年魯ニ仕ヘ、十二年齊ニ適クニ至ルマデ、其ノ間絶エテ朝聘往來ノ事ナシ。疑フラクハ使レ擯執圭ノ兩條ハ、但孔子嘗テ其ノ禮、當ニ此ノ如クスベシト言ヒタマヒシノミ」と、非なり。按ずるに郷黨一篇、總て

皆聖人の實事にして、門人親炙して善く形容せしものならざるはなし。晁氏の説従ふべからず。

○君子不以紺緇飾。紅紫不以爲褻服。當暑袷絺綌。必表而出。緇衣羔裘。素衣麕裘。黃衣狐裘。褻裘長。短右袂。必有寢衣。長一身有半。狐貉之厚以居。去喪無所不佩。非帷裳。必殺之。羔裘玄冠。不以弔。吉月必朝服而朝。

【譯讀】君子紺緇を以て飾とせず。紅紫は以て褻服と爲さず。暑に當りては袷の絺綌す。必ず表して出づ。緇衣には羔裘し、素衣には麕裘し、黃衣には狐裘す。褻裘は長くし、右の袂を短くす。必ず寢衣あり、長さ一身有半。狐貉の厚き以て居る。喪を去れば佩びざる所なし。帷裳に非ざれば、必ず之を殺す。羔裘玄冠、以て弔せず。吉月には必ず朝服して朝す。

【章旨】此章は、孔子の衣服の制を記するなり。

【字義】○君子 孔子を謂ふ。○紺 深青揚赤色(イロ)なり。○褻服(ノブクイミ)の飾は紺を用ふ。○緇 黧頭色(ウメ)なり、考工記に「三入爲緇、五入爲緇」と。即ち赤色を五度染め上げたる色なり。三年の喪に練服は緇を用ひて飾るなり。○飾 領の縁なり。襟や袖口の如きもの。○紅紫 共に麗きたる間色なり。以て褻服(ツダ)即ち常服と爲さざるは、奢と淫とを防ぐなり。○袷 單なり。○絺綌 葛布の絲の精きものを絺といひ、粘なるものを綌といふ。○表而出 表は上衣なり。上衣を加へて外出するな

り。○緇衣 緇は黒色なり。○羔裘 黒き羊の皮を以て製したる皮衣なり。○素衣 素は白色なり。○麕裘 麕は鹿の子にて色白し。其の皮にて作りし裘。○狐裘 狐の皮にて製したる皮衣なり。其の色黄なり。○褻裘長 其の温かなるを主とす。○寢衣 寢る時に服する衣なり。孔安國曰く「今ノ被ナリ」と「ネマキ」○一身有半 身の丈の上に、更に半身丈長きなり。○去喪 去は除なり。禮記、玉藻篇に「古之君子、必佩玉(中略)故君子在車、則聞鸞和之聲、行、則鳴佩玉。是以非辟之心、無自入也(中略)凡帶、必有佩玉。唯喪否(中略)君子無故、玉不去身、君子於玉比德焉」と。「去喪無所不佩」とは喪を除くの外、朝祭及び賓客を見るに皆佩ふるをいふなり。○帷裳 朝(出仕の時)祭(祭祀の時)の服をいふ。上衣は必ず殺縫あり、下に在る裳は、其の制は正幅(ヒト)にして帷(ヤウ)の如くし、上下共に齊く闊くして、腰に襞積(ヰ)ありて、旁に殺縫なし、これを名づけて帷裳といふ。○羔裘玄冠 黒き羊の皮衣、黒色の冠にて、朝祭の時吉服なり。○吉月 月吉の倒語、月朔(イツキノツ)なり、詩經に「二月初吉」周禮に「正月之吉」とあるは、皆朔日をいふ。○朝服 皮弁服なり。

【直解】孔子は、紺色は齊服(そのいふのみ)に用ひ、緋色(ウヰ)は喪服に用ふる色なるが故に、此二色を以て常服の領の縁と爲したまはず。紅と紫との二色は艶麗にして婦女子の服色に近きが故に、孔子は此二色を以て常服と爲したまはず。これ奢と淫とを防ぎたまひて然り。又夏の暑き時に當りては、單の葛布にて製したる衣を著け、外出せらるる時は、必ず上衣を加へて出でたまふ。寒き時は皮衣を用ひらるるが、皮衣と、衣とは中外の色の相稱はんことを欲せらるるが故に、緇衣即ち黒色の衣を著たまふ時には、下には色の同じき黒羊の皮衣を著たまひ、白色の衣の時には、下には同色の鹿の子の皮衣を著、又黄

色の衣の時には、下には同色の狐の皮衣を著たまふ。常服の皮衣は、温暖を主とするが故に、長く仕立て、又事を作すに便利なるが爲めに、右の袂を引き上げて短くしたまふ。又必ず寢衣がありて其の長さは御身の丈の上に、又半身程もありて、十分に足を覆ふやうに仕立てしめらる(寢衣は誰にも有れども「必有」といふは長さ一身有半のものある義)又平生自宅に居らるる時は、温かなるを貴ぶが故に、狐や貉の毛の厚き皮衣を著て居たまふ。又喪中には、玉を佩びたまはざれども、喪を除くの外は、朝する時、祭る時、及び賓客に接したまふ時に、皆玉を佩びたまはざることなし。朝廷に出仕したまふ時、著らるる帷裳といふ服は、其の方正なるを取るが故に、裳は正幅(ヒト)の帷の如きものを用ひ、上下共に齊く闊くして腰に襞積ありて、旁を殺ぎ縫ふことなけれども、帷裳にあらざる餘の服は、必ず之を殺ぎ縫はるるなり。又黒き羊の皮衣や、玄色の冠を著けては、人の死を弔ひたまふことなし。これ喪服は素を主とし、吉服(キノフクキト)は玄を主とす。吉凶共に其の服色を異にするは、古の禮なればなり。又孔子魯に在して、既に老を告げて致仕せられたる後も、なほ月の朔日毎に、必ず朝服を著けて朝したまふ。これ視朝の禮を重んじたまふに因るなり。蓋し魯は文公より視朝の禮を行はず。故に子貢告朔の餼羊を去らんと欲す(頁三)孔子其の禮の廢するを恐れたまふ。故に月朔毎に必ず此視朝の服を著けて君に朝せらる。所謂我は其の禮を愛むとのたまひし所以なり。

【考異】○緇 考工記に「三入爲緇、五入爲緋」註に「緇ヲ染ムル者三入シテ成ル。又再ビ染ムルニ黒ヲ以テスレバ、則チ緋ト爲ル、爵頭色ノ如キヲ言フ也」と。淮南子、俶眞訓に「以涅染緇則黒ニ于涅」と。此に據れば緇は黒色なり、朱子は疏に因りて緋色(淺紅色)と爲すは、非なり。○必表而出 諸本、

出の下に之の字あるは、非なり。今皇本に従ふ。夏時家に在りては、葛衣の上に、亦別に衣を加ふることなし。若し出で行き、又賓に接するには、皆上衣を加ふ。故に必ず表して出つと言ふなり。朱子は「表シテ之ヲ出ダス」と讀みて、先づ裏衣を著け、單の絺綌を以て製したる衣を表に著けて之を出だすを謂ふと註せしは、誤れり。○袷 單衣なり。唐石經に紵に作るは、互に通するなり。○短三右 袂一 事を作す時に右の方の袂を短くかかぐるなり。片跛の袂の衣を製すと解くは、非なり。

○齊必有明衣、布齊必變食、居必遷坐。

【譯讀】 齊すれば必ず明衣有り、布をす。齊すれば必ず食を變じ、居れば必ず坐を遷す。

【章旨】 此章は、孔子の齋戒を慎みたまふ事を記す。

【字義】 ○齊 一に齋に作る、通ず「モノイミ」と訓す。祭祀の時に潔齋する義なり。○明衣 明潔なる衣の義なり。凡そ神明に接する所以の者は、古は明と名づくる者多し。稷を明粢と曰ひ、水を明

水と曰ひ、祭器を明器といふの類なり。○變食 酒を飲まず、葷即ち臭き野菜(五辛即ち韭(ニ) 薤(ラウキ) 蔥(ギト) 蒜(ニン) 薑(カミ) の類) を茹はざるなり。○遷坐 平日常坐の處に居らざるをいふ。

【直解】 孔子齋したまふ時は、必ず沐浴したまひ、浴し竟りて、即ち明衣とて清潔なる衣を著たまふ。これ其の體を明潔にしたまふ所以なり。其の體を明潔にしたまふは、其の心を明潔にしたまふ所以なり。さて其の明衣は布をもて製せらる。これ布は素きものなれば、潔白にして穢なき心を致す義なり。又齋は神明に交る所以のものなれば、必ず日常の食を改め、酒を飲まず、葷とて臭き野菜類

を茹ひたまはざるなり。又其の居らるる處は、必ず常處を遷し易へて、別の室に居らる。これ皆敬ひ慎む心を盡したまふ所以なり。毎句必の字を疊用するは、慎戒の深きを見はすなり。

【考異】 齊 必有明衣、布の下に、程子は前章の必有寢衣、長一身有半の一節を入るべしといひ、朱子も之に従ひて、然すれば各其の類を以て従ふことを得といへり。蓋し以爲へらく、凡そ人皆寢衣あり、齋時にも亦之を被りて寢す。唯孔子は別に齋時の寢衣を製したまふは、其の褻を嫌ひたまひて然るなりと。これも亦一説として通ぜざるにあらざれども、毛奇齡の説の如く、三禮及び列代の禮志を考ふるに、祭服中に竝に寢衣の名なければ、程子錯簡の説は、必ずしも従ふべからざるに似たり。

○食不厭精、膾不厭細、食饁而餽、魚餕而肉、敗不食、色惡不食、臭惡不食、失飪不食、不時不食、割不正不食、不得其醬不食、肉雖多、不使勝食氣、唯酒無量、不及亂、沽酒市脯不食、不撤薑食、不多食、祭於公、不宿肉、祭肉不出三日、出三日、不食之矣、食不语、寢不言、雖蔬食菜羹瓜祭、必齊如也。

【譯讀】 食は精を厭はず、膾は細を厭はず。食の饁して餕し、魚の餕して肉の敗れたるは食はず。色の

悪きは食はず。臭の悪きは食はず。飢を失ひたるは食はず。時ならざるは食はず。割正しからざれば食はず。其の醬を得ざれば食はず。肉は多しと雖も食氣に勝たしめず。唯酒は量なし、亂に及ばず。沽酒市脯は食はず。薑を撤せずして食ふ、多く食はず。公に祭れば肉を宿せしめず。祭肉は三日を出ださず。三日を出づれば之を食はず。食ふに語らず。寝ぬるに言はず。蔬食菜羹瓜と雖も祭る。必ず齊如たり。

【章旨】此章は孔子の飲食を謹みたまひし事を記す。

【字義】○食 音「シ」飯なり。○精 精白にする義。朱註に「鑿(ダウ)ナリ」とあれども、説文に「糠米(玄米なり)一斛ヲ九斗ニ舂クテ鑿ト曰フ」とあり。又釋名に「糠米一斛ヲ八斗ニ舂クテ精米トス」とあれば、鑿と精とは異り。○膾 「ナマス」と訓す。牛羊と魚との脛(ニク)は、垂(ウスケ)して、又かへして横に切るを膾と爲す。内則に「肉腥細者爲膾」と。○不厭 是を以て善しと爲す、必ず是の如くせんと欲するには非ざるをいふ。○餼 音「イ」飯の熱濕に傷みて腐臭せるをいふ。俗にいふ「スエル」なり。○餽 音「アイ」久しきを経て、味の變りて悪しくなりたるなり。○餼 音「タイ」魚の爛(カサ)れたるをいふ。○敗 獸肉の腐れたるをいふ。○色惡臭惡 魚肉未だ腐敗に至らざれども、色臭の先づ變する者を謂ふなり。○飪 朱註に「烹調生熟ノ節ナリ」とあり。料理烹加減の節に適して程よきをいふ。○不時 飲食物の其の時節に合せざる物をいふ。冬日の梅李の實の類なり。○割 切り目なり。古人は肉を割くに必ず方正にするなり。墨子、非儒篇に「哀公迎三孔丘、席不端、弗坐、割不正、弗食」とあり。○不得其醬 魚肉を食ふに、醬を用ふる各宜しきに適するものあり。禮記、内則

篇に「濡(ハ)雞醢醬、實(ハ)蓼。濡(ハ)魚卵醬、實(ハ)蓼。濡(ハ)鼈醢醬、實(ハ)蓼。(中略)魚膾芥醬、麋腥醢醬」といふの類なり。其とは食ふ所の魚肉を指していふ。其の魚肉に適當する所の醬を得ざればといふ義なり。○食氣 飯の氣なり。○沽酒市脯不食 賣物の酒や脯は、清潔ならずして、或は人を害せんことを恐る。故に食はざるなり。古は衣服飲食は必ず家にて造作す、皆婦女の職と爲す。王制に「衣服飲食、不粥(ハ)於市」とある、以て證すべし。沽或は酤に作る。邢疏に「賣也」と訓するを是と爲す。市も亦同じ。○不撤薑食 撤は去るなり、薑は姜と同じ、薑は能く口喉を爽かにす。故に他の食物は下けても、獨り薑を留めて食はるるなり。○祭於公 公廟の祭を助け行ふをいふ。○不宿肉 賜りたる豚肉(ヒモ)は、歸れば即ち直ちに家人に頒ち、一宿を越さしめざるなり。○齊如 嚴敬の貌。【直解】孔子平常召し上らるる飯は精けたるを善しとし、精けたるは、如何程精けたりとも厭はるることなし。又膾は細く切りたるを善しとす。如何程細くとも嫌はるることなし。不厭とは只これを善しとして厭はれずとの義にて、必ず此の如くせんことを欲すといふにはあらず。又飯のむれ傷みて味の變り臭くなりたると、魚の爛れ肉の腐りたるとは食ひたまはず。又ただれ敗るるに至らずとも、色や臭の悪しく變じたる物は、食ひたまはず。又煮過ぎたるものや、生煮のものなど、すべて煮熟の善き程を失へる物は食ひたまはず。時節に合はざるもの、所謂旬外の物は食ひたまはず。以上に擧げたる食物は、人をそこなはんことを恐れたまへばなり。又肉を割くに切り目の正しからざるは食ひたまはず。これ孔子造次にも正しきを離れたまはざればなり。漢の陸績の母、肉を切るに方ならずんばあらず。葱を斷つに一寸を以て度とせしが如きは、蓋し其の性質の美なること、此と暗合せ

り。又魚肉を食ふには、其の品によりて宜しきに適ふ所の醬あり。其の適當する醬を得ざる時は食ひたまはず。又食は穀物を以て主と爲すが故に、副食物たる肉は澤山ありて味も旨くとも、飯の氣に勝たしむる程に多く食ひたまはず。唯酒は獨酌したまふこともあり、人と會飲したまふこともあり、又筵席の時間に長短もあるが故に、之が分量を限りたまはざれども、唯心の亂るるまでに大醉に及びたまはず。又市店にて賣る酒や脯は、或は清潔ならず、或は何の肉たるかを辨じ難きが故に、食飲したまはず。又薑は能く口喉を爽かにし、毒を解く功あるを以て、他の食膳は下けても、獨り薑を留めて食ひたまふ。然れども多く之を食ひたまはず。又魯君の祭を助けられし時、賜はる所の胙肉(神に供へし下りの牲體)は、家に歸らるれば、即時に家人に班ち賜ひて、一宿を經るを俟たず。これ神の惠を留めずして、亟に人に及ぼさんことを欲したまひてなり。又家の祭に供へし肉、又は親戚朋友などより饋り來りし祭肉は、三日を出ださずして皆分ち賜ふ。蓋し三日を過ぐれば、肉は腐りて人之を食はず。是れ鬼神の餘を饗せばなり。但君の賜ひし祭肉に比すれば、少しく緩くせらるるのみなり。又食する時は、食物口に在りて、語るべき時にあらず。故に語りたまはず。寝ぬる時は静黙を主として、言ふべき時にあらず。故に自ら言ひ出ださるることなし。人と言を交ふるを語といひ、偏言するを言といふなれども、ここは互文なれば、食する時、寝ぬる時に、己より語りたまはず、言ひたまはずとの義なり。又食するに當りては、粗飯や野菜の羹や、瓜の如き薄物(ソマツナ)と雖も、之を祭るに必ず嚴かに敬ひたまふとなり。蓋し古人飲食する時、毎種の食品を少許づつ豆間(タカツキトノヒダ)に置いて、以て先代始めて飲食を爲りたる人を祭るは、本を忘れざる

誠の心に出づ。孔子其の祭に於て必ず敬を致したまふとなり。

【考異】○不_レ時不_レ食、不_レ時に凡そ三説あり、鄭玄は「時ナラズトハ朝夕日中ノ時ニ非ザルヲイフ」と。張栻も「食時ニ非ザルヲ謂フ」と。是れ一説なり。此説によれば閑食(クヒダ)を戒むる義となるなり。朱註には「五穀成ラズ、果實未ダ熟セザルノ類ナリ」と。是れ二説なり。此説は禮記、王制篇に「五穀不_レ時、果實未_レ熟、不_レ粥_ニ於市」とあるに本づく。江熙は「時ナラズトハ、生ズルコト其ノ時ニ非ザルヲ謂フ、冬ノ梅李ノ實ノ若キナリ」と。是れ三説なり。今經文を按ずるに、食饗より失_レ任に至るまで、食味の正を失して食ふに堪へざるが爲めに食はざるをいふなり。穀果の未だ成熟せざる者の食ふべからざるが如きは、何ぞ必ずしも掲げ出だして言ふことを用ひんや。三食時の説の如きは、食時に關して食物に關せず、前後の文例に類せず。竝に従ふべからず。故に第三説を以て正解と爲す。○不_レ及_レ亂、醉ひて性を亂すに至らざるをいふ。子罕篇の「不_レ爲_二酒困_一(三九)と同じ。程子曰く「亂ニ及バズトハ、唯志ヲ亂サシメザルノミニアラズ、血氣ト雖モ、亦亂サシメズ、但淡洽(酒氣があまねくうるほふ)スルノミニシテ可ナリ」と。是れ自ら道學先生の説のみ。それ醉顏紅を發し、怡怡談笑す。この時、人身血氣亂れずといふべからず、これ亦酒の徳なり、何ぞ害せん。唯昏醉狂醜、乃ち亂と爲すのみ。○不_レ撤_レ薑食、不_レ多_ク食、此二句宜しく相連讀すべし。孔子薑を嗜みて食ひたまふ。然れども多く食ひたまはず、これ君子たる所以なり。下の「唯酒無_レ量、不_レ及_レ亂」と一例の語のみ。孔安國朱熹諸家、俱に「不_レ多_ク食」を以て上句と分ち、すべての食物を多く食ひ食はずと解するは、非なり。○雖_二蔬食菜羹瓜_一祭、陸德明曰く「魯瓜ヲ讀ミテ必ト爲ス。今、古ニ從フ」と。朱熹亦之に従ふ。陸説其の何に

據るかを知らず。解すべからず。何休の公羊傳注に論語を引きて「雖疏食菜羹瓜祭」に作る。是と爲す。皇本、蔬を蔬に作るは、非なり、又瓜を瓜に作る、瓜は俗字なり。

○席不正不坐。郷人飲酒杖者出。斯出矣。郷人饑朝服而立於阼階。

【譯讀】席正しからざれば、坐せず。郷人の飲酒に、杖者出づれば、斯に出づ。郷人の饑には、朝服して阼階に立ちたまふ。

【章旨】此章は、孔子が郷に居たまふ時の雜儀を記するなり。

【字義】○席不正。凡そ席を設くるの禮は、天子の席は五重、諸侯の席は三重、大夫は再重にす。席の南郷（郷は向に同じ）北郷の時は、西方を以て上と爲し、東郷西郷の時は南方を以て上と爲す。此の如きの類は、是れ禮の正しきなり、此禮に合はざる席は、正しからざるなり。○郷人飲酒。今の所謂同郷人の懇親會の如き者にて、郷校にて行ふを例とす。最も禮儀を重んじ、老者を尊ぶを主とすること、禮記、郷飲酒義篇に詳かなり。○杖者。老人をいふ。禮記、王制篇に「五十杖於家、六十杖於郷」とあり。故に老人を呼びて杖者と爲す。○饑。疫鬼を驅り逐ふ式（オヒヤ）なり。天子の饑は、方相氏之を掌ること、周禮、夏官に見ゆ。方相氏、熊皮を蒙り、黄金を以て四目を作り、腰より上は玄き衣を被、下は朱き裝束し、戈を執り、盾を掲げ、百隸及び童子を率ゐて、以て室中の疫鬼を驅逐す。一年三過之を爲す、三月八月十二月なり。按ずるに季春の饑は、天子諸侯之を爲すを得、仲秋の饑は、唯天子のみ

之を爲すを得、此は則ち季冬の大饑を指す。邦俗に行ふ所の厄拂なり。即ち郷人大饑の禮を行ひ、以て疫鬼を逐ひて、孔子の家に至るをいふ。○阼階。先祖の廟の東方の階にして主人の位なり。

【直解】聖人の御心は、何事も正しきに安んじたまへば、少しにても席位の禮に違ひて正しからざることあれば、安んじて坐したまはず。又郷黨にては齒を尊ぶが故に、老者は之を先にし、少者は之に従ふを禮とす。されば郷人の相聚りて飲酒する時などは、最も老者を敬ひ養ふを主とするが故に、杖者即ち老人が既に出つれば、即ち孔子もそれに繼ぎて直ちに出でらる。斯の字、尤も味あり。老人未だ出でざれば、敢て先だちて出でたまはず。老人既に出つれば、敢て後れたまはず。蓋し老人未だ出でざるに、先だちて出つれば、徐行して長者に後るるの道（五解八）にあらず。老人既に出でたるに、後れて残り居るは、又長者に隨行するの道にあらざればなり。又饑は古禮なれども戲に近し。然れども孔子郷人の饑する時は、己獨り習俗に違ふことを欲せず。必ず朝服即ち大夫の祭服を着けて、阼階即ち主人の位に立ちたまふは、聖人の何事にも誠敬を致したまはざる事なきを見るべきなり。

○問人於他邦。再拜而送之。康子饋藥。拜而受之。曰。丘未達。不敢嘗。廩焚。子退朝。曰。傷人乎。不問馬。

【譯讀】人を他邦に問はしむれば、再拜して之を送る。康子藥を饋る。拜して之を受く。曰く、丘未だ達せず。敢て嘗めずと。廩焚けたり。子朝より退く。曰く、人を傷へるか。馬を問ひたまはざりき。

【章旨】 此章は、孔子家に居たまふ時の雜儀を記す。

【字義】 〇問 訪問せしむるなり。邢昺曰く、「問ハ猶ホ遺ノ如キナリ、問フニ因リテ物アリテ之ヲ遺ルヲ謂フナリ」と。〇再拜 使者を拜するにあらず、問ふ所の人を拜するなり。〇康子 季康子なり。〇未達 未だ薬性に通達せざるなり。〇應 孔子の家の馬屋なり。

【直解】 孔子、使者をして他國に在る人を尋問せしめらるる時は、再拜して使者を送りたまふ。是れ使者を拜するにあらず、尋問せしめらるる先方の人を拜し、自ら其の人を見るが如く恭敬の誠を致したまふなり。孔子の御病中に、季康子より藥を饋り來しぬ。孔子拜して之を受納し、其の厚意を謝したまふ。是れ大夫より物を賜はる時、拜して受くるは禮なればなり。さて使者に告げてのたまはく、賜ふ所の藥品は、丘未だ其の性の果して病に適するや否やの理に明通すること能はざれば、敢て嘗め申さずと。これ藥は病によりて調劑を異にす。妄りに服用すべきものにあらず。亦以て聖人の疾を慎みたまふを見るべし。但人より賜ひし藥を受けて飲まざるは、人の厚意を虚しくするの嫌あり。故に其の情を匿さず明かに實を告げたまふは、亦以て聖人の至誠を見るべきなり。或時孔子の家の馬屋火災ありたり。孔子朝廷より退きて此事を聞きて、のたまはく、人を傷ひしことはなかりしか、怪我はなかりしかと問ひたまひて、馬には問ひ及びたまはざりき。これ馬を愛したまはざるにはあらざれども、人は貴く馬は賤し。これ先づ人の怪我なかりしや否やを問ひて、馬を問ひたまふの暇なかりしなり。蓋し廢焚けて馬を問ふは人の常情なり。孔子急遽匆卒の際、人を問ひたまひて馬に及ばざりしは、人を傷はんことを恐れたまふ情の急切なるに因る。聖人の心、廻に常情の表に出づるを見るべし。

【餘義】 仁齋曰く、「宋ノ楊簡、嘗テ書ヲ作リテ人ニ與ヘ、楊某再拜ト書シテ之ヲ附ス。僕既ニ發ス。忽チ自ラ思ヘラク、親ヲ拜セズシテ而シテ拜ト書スルハ、是レ僞ナリト。急ニ僕ヲ呼ビ返シテ、書ヲ案上ニ置キ、拜ヲ設ケテ而ル後ニ遺ル。暗ニ孔子拜シテ使者ヲ送リタマヒシ意ニ合ス。學者此ノ若キノ忠信アリ、而ル後ニ以テ學ヲ言フベシ。然ラザレバ則チ高ク性命ヲ談ズルモ、益ナキナリ」と。

○君賜食、必正席先嘗之。君賜腥、必熟而薦之。君賜生、必畜之。侍食於君、君祭先飯。疾、君視之、東首加朝服、拖紳。君命召、不俟、駕行矣。入大廟、每事問。

【譯讀】 君食を賜へば、必ず席を正して先づ之を嘗む。君腥を賜へば、必ず熟して之を薦む。君生を賜へば、必ず之を畜ひたまふ。君に侍食するに、君祭れば、先づ飯したまふ。疾むときに、君之を視れば、東首して朝服を加へ、紳を拖く。君命じて召せば、駕するを俟たずして行きたまふ。大廟に入れば、事毎に問ひたまふ。

【章旨】 此章は、孔子の君に侍食し、及び君に事へたまふ禮を記するなり。

【字義】 〇賜食 食は熟食とて料理したる食なり。〇腥 生肉。〇生 生きたる雁鴨の類。〇畜之 之を飼ひ養ひて祭祀の時の用を待つなり。〇侍食 食事の御接伴をすること。〇東首 東の方を枕にして寝ぬるなり。以て天地の生氣を受けんがためなり。禮記、玉藻篇に「君子之居、恆當戶、寢恆東」

首」と。○拖紳 紳は大帶、大帶を其の上に引くをいふ。○不俟駕 車を馬に加へて繋ぎ馬車の用意の出来るを俟たずして急ぎ出でたまふなり。荀子、大略篇にも「諸侯召其臣、臣不俟駕」とあり。

【直解】君より食物を賜はりし時は、必ず席を正しくし、君の前にて食するが如く、敬ひて先づ之を嘗め、餘は家人に頒ち賜ふ。其の祖考の廟に薦めたまはざる者は、君の餼餘(コリ)ならんことを恐れたまへばなり。又君より生肉を賜はりし時は、必ず、煮て之を祖考に薦めたまふ。是れ君の賜を光榮として然したまふなり。又君より生きたる鳥獸の類を賜はりたる時は、殺すことなく、必ず飼養して他日祭祀の時の用を待ちたまふ。又君に御接伴して食事する時、君が祭らるる時は、君に先だちて先づ飯したまふ。蓋し周禮に「王ノ食スル時、膳夫(食官の長)王ニ授ケテ祭ラシメ(古は飲食必ず祭る、王に祭る所の物を授くるなり)食ヲ品嘗(品物毎に皆先づ之を嘗めて、以て毒なきことを示す)シ、王乃チ食ス」とあり。故に君祭れば先づ飯したまふものは、膳夫の事を以て自ら處り、君の爲めに試み嘗むるが如くし、敢て客の禮に當らずして、謹み敬ふことを致さるるなり。又孔子の御病中に、魯の君が見舞に來られし時は、東の方に枕して、東方の生氣を受くるやうにし、病臥の身なれば、衣を著け束帶すること能はず。さればとて褻服のままにて君に見ゆるは無禮なり。故に朝服を寢ねて居る上加へ、又大帶を引きて其の上に置きたまふ。又君の命ありて召さるる時は、馬車の用意の出来るを待たず、急ぎて徒歩にて行きたまひ、馬車の用意の出來次第追ひ驅けて來らしめ、途中にて之に乗りたまふ。又大廟即ち周公の廟に入りて、君の爲めに祭を助けらるる時は、事毎に先輩に問ひ、謹を致して行ひたまふ。此一節は、前の八佾篇(八)にも出でたれども、前のは是れ孔子が成

人に對して答へられし言を記し、此は是れ孔子平生常行の事を記す、故に兩出するなり。

【考異】○厪 說文字林並に厪に作る、通す。○駕 車を馬に加ふる義にて、即ち馬車の用意を爲すなり、動詞として讀むべし、名詞として讀むは、非なり。

○朋友死無所歸、曰於我殯。朋友之饋、雖車馬、非祭肉、不拜。

【譯讀】朋友死して、歸する所無ければ、曰く、我に於て殯せよと。朋友の饋は、車馬と雖も、祭肉に非ざれば拜せず。

【章旨】此章は、孔子が朋友交際の義を記するなり。

【字義】○朋友 遠方より來れる友を謂ふ。○無所歸 親族の依るべき者なきなり。○殯 「カリモガリ」と訓す。入棺して未だ本葬を爲さざる間を謂ふ。支那にては葬禮を重んじ、天子は七ヶ月、諸侯は五ヶ月、大夫は三ヶ月、士は二ヶ月の間、殯するなり。○饋 食物を贈るを本義とすれども、ここは廣く物を贈る義に用ひたり。

【直解】遠き他國より來りし朋友の死して、親族の依るべき者なき時には、曰く、我が家に於て假葬せよと。古人は死すれば必ず其の郷に歸葬す。故に葬といはずして殯といふ。檀弓上篇に「賓客至、無所館、夫子曰、生於我乎館、死於我乎殯」とあるに同じ。又朋友の間は、有無相通するの義あり。故に孔子朋友より贈り來りし物に在りては、車馬の如き價貴きものと雖も、神の肉を除く外は、拜せらるることなし。獨り祭の肉を拜したまふは、人の祖考を敬ふこと、己の親に同じくしたまふ所以なり。

○寢不尸居不容見齊衰者雖狎必變見冕者與替者雖褻必以貌凶服者式之式負版者有盛饌必變色而作迅雷風烈必變升車必正立執綏車中不內顧不疾言不親指。

【譯讀】寢ぬるに尸せず。居るに容つくらず。齊衰者を見れば、狎れたりと雖も必ず變ず。冕者と替者とを見れば、褻れたりと雖も必ず貌を以てす。凶服者には之に式す。負版者に式す。盛饌有れば、必ず色を變じて作つ。迅雷風烈には、必ず變ず。車に升れば必ず正しく立ちて綏を執る。車中には内顧せず。疾言せず。親指せず。

【章旨】孔子の容貌坐臥の雜儀を記す。

【字義】○尸 四體を偃臥し、手足を布展(シキノ)すること、死人に似たるなり。○居 閒居なり、家にて燕居せらるる時なり。○容 容貌威儀なり。○齊衰者 喪服を著けたる者、既に前(七八)に解せり。○狎 平生心易く親み狎るる義。○褻 數、相見て心易き義。○以貌 禮貌を以て接するなり。○凶服 喪服(五服を包ねていふ)を著けたるもの、一説に喪服を持ち運ぶ者をいふと。亦通す。○式 車前の横木なり。車上に在りて敬する所あれば、俯して之に憑るなり。○負版者 邦國の圖籍、即ち今の戶籍を持ち行く者を謂ふ。周禮、秋官籍に「司民掌登萬民之數、自生齒以上、皆書於版(男は八月、女は七月にして齒を生ず)歲登下其死生、及三年、大比以萬民之數、詔司寇、

司寇獻其數於王、王拜受之」とあり。○變色而作 作は起なり、主人の厚意を敬し、容色を變じて起つは、敢て當らざるが如くするなり。○迅雷風烈 迅は急疾なり、烈は猛なり。風烈は倒語なり。古者陰陽の變を言へば、必ず雷風並び擧ぐ、書經、虞書の「烈風雷雨」是れなり。易經、説卦傳にも「雷風相薄」とあり。雷が急に振動すれば、風が烈しく起るは常なり。君子の必ず容を改むる者は、其の變を敬する所以なり。王字泰曰く「天ニ事フルノ誠ヲ見ル」と。鄭玄は「天ノ怒ヲ敬スルナリ」と。禮記、玉藻篇にも「若有疾風迅雷甚雨、則必變、雖夜心興、衣服冠而坐」と。○綏 挽きて以て車に上るの索なり。○内顧 回視するなり、曲禮に「顧、不、過、轂」とあり。轂は車の轂なり。○疾言 高聲に急がしく物言ふなり。○親指 指は指點なり、親ら指さすをいふ。朱註に「内顧・疾言・親指ノ三者ハ、皆容ヲ失ヒ、且ツ人ヲ惑ス」と。

【直解】孔子、寢ねらるるには、偃臥して兩手兩足を展べて死人の如く爲したまはず。これ寢息の時と雖も、惰慢の氣を身體に設けたまはざるなり。又家に閒居せらるる時は、祭祀に參じ、賓客に接したまふ時の如くに、容貌威儀を嚴格に爲したまはざるなり。述而篇に「子之燕居、申申如也。夭夭如也」とあるは是れなり。又人の齊衰の重き喪ある者を見たまへば、平生親み狎れたる者となし、雖も、必ず常の容を變じて哀み敬ふ意を表せらる。又冠冕を著けたる大夫以上の貴き者、及び不便なる盲人を見たまへば、數、相見て心易き者と雖も、必ず敬を加へて、禮貌を以て之に接したまふ。是れ冕者の如く爵位ある者を敬ひて、敢て忽に爲したまはざるのみならず、盲人の如き不成人(成人)をば矜みて亦敢て忽にしたまはざるなり。又途中にて喪服を著けたる者に逢へば、車上にて必ず車

の前の横木に俯して敬禮したまふ。又國の戸籍を負ひたる者に逢へば、亦必ず式して之を敬ひたまふ。これ喪ある者を哀み、民數を重んぜらるるに因るなり。蓋し人は萬物の靈にして、王者の天と爲す所（王者民を以て天と爲すの語、管子に見ゆ）なり。故に周禮にも「民數ヲ王ニ獻ズレバ、王拜シテ之ヲ受ク」とあり。王者さへ且つ然り、況や其れより下なる者は、敢て敬せずして可ならんや。又盛んに鄭重なる馳走を以て孔子を饗應する者あれば、必ず顔色を變へて坐を起ち、敬意を表せらるるなり。是れ主人の厚意を敬ひ禮せらるるなり。徒に其の馳走の盛んなるが爲めにせらるるには非ざるなり。又迅疾なる雷鳴や、猛烈なる風の異變ある時は、必ず常の容を變ぜらる。是れ天の怒を敬せらるるのみならず、農作物又は人畜を害し、家屋を顛覆する等の虞あればなり。又孔子車に升りたまふ時は、必ず正しく立ちて、綏即ち人をして怪我なからしめん爲めに、車上より垂れ下される繩を執りたまふ。是れ容貌を正しくし、頭仆を戒めらるるに由るなり。又車中にては頭を左右に回轉して視たまふことなく、又急疾にいそがはしく物言はるることなく、又親ら指點（サズ）せらるることなし。是れ此三者は容儀を失ひて見苦しきのみならず、且つ人の視を驚かし惑はすことあればなり。

○色斯舉矣、翔而後集。曰、山梁雌雉、時哉、時哉。子路共之。三嗅而作。

【譯讀】色みて斯に舉り、翔りて而る後に集る。曰く、山梁の雌雉、時なるかな、時なるかなと。子路之に共す。三たび嗅ぎて作つ。

【章旨】此章は孔子の盛徳を贊する所以なり。孔子の舉止動作、一一其の可に當るは、雉の一舉一集其の時を得たと相同じ。郷黨の一篇、聖人の言貌衣食、君に事へ友に交るの道、曲に盡さざるなし。而して之を要するに一語一默一舉一動、時に隨ひて節に中らざるなく、唯一の時中（中庸に「君子之中庸也、君子而時中」）あるのみ。篇中既に時の字の義を寓せり。故に此に到りて乃ち時の字を拈出し以て一篇の結穴と爲し、又以て上論語十篇の總收と爲す。孔門屬辭比事の妙、是を以て見るべし。

【字義】○色、斯舉矣、翔而後集。色は顔色なり、舉は飛び舉りて去るなり。翔は空中を回翔（マケル）するなり。朱註に「鳥、人ノ顔色ノ善カラザルヲ見レバ、則チ飛び去リテ回リ翔リ、審視シテ後ニ下リ止ル。人ノ幾ヲ見テ作チ、審カニ處ル所ヲ擇ブモ、亦當ニ此ノ如クナルベシ」と。徂徠は此兩句を以て「逸詩ナリ、曰以下ハ詩ヲ解スルノ言、孔子ノ事ヲ引キテ以テ之ヲ解ス。韓詩外傳ニ此類多シ、疑フベカラズ」といへり。或は當に然るべし。○山梁、梁は橋なり。山路に架けたる橋をいふ。○共、供なり、雉に食物を與へたるなり。○作、易經、繫辭下傳の「君子見レ幾而作」の作の如し。ここは飛び去るを謂ふなり。

【直解】鳥が人の顔色の悪しと見れば、即時に飛び舉りて去り、空中を回り翔りて、下の安んずべき地を審かに視定めて後に下り止まるは、人の機を見て作ち、安んじ處るべき所を審かに擇びて居ると相似たり。故に此語を引きて發端と爲し、以下に孔子御門人と出遊せられし時の事を引きて之を解く、故に曰の字を下せり。さてのたまふやう、彼の山の谷間に架けたる橋の上に居る所の雌雉は、舉り去るも、下り集まるも、皆其の宜しき時を得たる者なるかなと。時哉時哉と重ね言ふは、深く

之れを歎稱したまへるなり。蓋し君子の亂世に處り、機を見るの識深くして、能く危を去りて安に就くものに類するあるを稱したまへるなり。時に子路從遊して在りしが、孔子の深く雉を美めたまひしを聞きて、更に其の舉動を見んと欲し、乃ち齋らす所の糧を投じて之に供し與へたるに、雉は敢て食はず、三たび其の氣を嗅ぎたるのみにて、作ちて飛び去りぬ。亦君子の利の爲めに留まらざるの意に似て、以て美するに足る者あり。故に門人并せて之を記するなり。

【考異】子路共之、三嗅而作 朱註に「邢氏曰ク『時哉時哉』トハ、言フ心ハ雉ノ飲啄、其ノ時ヲ得ルナリ。子路達セズ、以テ時物ト爲シテ之ヲ共具ス。孔子食ヒタマハズ、三タビ其ノ氣ヲ嗅ギテ起チタマフ」とあり。即ち子路は孔子の時哉とのたまひし意に達せず、誤りて時に當れる食物なりとの意に解して、雉を調味して供したるに、孔子食はず、其の氣を三たび嗅ぎて起ちたまふとなり。されども孔子が三たび嗅ぎて食はずとは、附會の説にて笑ふべし。従ふべからず。又共は一に拱に作る、向ふなり「衆星共之」(三)の共の如しといひ、又集註に晁公武の石經考異を引き「石經ニ嗅ヲ憂ニ作ル、雉ノ鳴クヲ謂フナリ」とあり。其の他諸説紛紛たれども、未だ以て是となさず。

【餘義】中村敬子曰ク「色斯學矣、翔而後集トハ、何物タルヲ言ハズ、讀ミテ下段ニ至リテ、方ニ是レ雌雉タルヲ知ル。絶世ノ妙文、天衣縫フ無シ。朱子乃チ上下必ズ闕文アラント疑フ者ハ何ゾヤ。蓋シ郷黨ノ一篇ハ、門人カヲ極メテ描寫シ、聖人ノ聲音笑貌、躍然トシテ現出シ、行往坐臥八面俱ニ到ル。儀禮檀弓考工記皆及ブコト能ハズ。知ルベシ周人ノ文、精妙絶倫、而シテ論語ノ文ハ則チ又類ヲ出デ萃ヲ抜ク者ノミ」と。此説之を得たり。

先進第十一

前篇は孔子の言貌動作を記す。此篇は弟子及び賢人の行を論ず。聖賢相次するは、亦編者用意の在る所なり。凡そ二十五章。郷黨篇以上は俗に之を上論語といひ、此篇以下は之を下論語といふなり。

○子曰、先進於禮樂、野人也。後進於禮樂、君子也。如用之、則吾從先進。

【譯讀】子曰く、先進の禮樂に於けるは、野人なり。後進の禮樂に於けるは、君子なり。如し之を用ひば、則ち吾は先進に従はん。

【章旨】孔子、當時の禮樂、繁文に流れて、本質を失へるを歎き、之を正に反さんとするの意を述べたまふ。

【字義】○先進、後進 猶ほ先輩後輩といふが如し。即ち我より先に生れたる先輩と、我より後に生れたる後輩とを謂ふなり。○野人 田舎の質朴の人なり。○君子 位に在る士大夫を謂ふ。○如 若しと同じ。○用之 吾をして選びて用ひしめばといふ意なり。

【直解】孔子のたまはく、周時代の初に當りて先輩の士の禮樂に於けるを見るに、質朴の方が勝ちて、野人即ち田舎者の如くなり。而るに時遷りて今の後輩の士の禮樂を見るに、文飾の方が勝ちて、質朴

なる誠の方足らず。君子即ち在位者の如くなり。凡そ禮樂は敬と和とを以て本とする者なるに、世降りて禮は玉帛を論じ、樂は鐘鼓を論じ(六六)徒に文飾の末にのみ流れて、其の本旨を失ふに至りぬ。吾若し先進後進の二の者の禮樂を選び用ひて、今の禮樂を制定せんには、寧ろ先進の禮樂に従はんとなり。息軒曰く「周公ノ禮ヲ制スル、文ヲ尙ビテ以テ殷ノ質ヲ變ゼリ。則チ周公ノ俗ハ、必ズ質、文ニ勝テリ。周道已ニ衰ヘテ、孔子ノ時ニ至リテハ、文日ニ勝チテ質衰フ。孔子之ヲ周初ノ盛ニ反サント欲シタマフ。故ニ此言ヲ發シタマヒシナリ(中略)此君子、野人ト對スレバ、則チ在位者ヲ指シテ之ヲ言フ。大抵士大夫ハ、衣冠端正、威儀閑習、一見シテ其ノ在位者タルヲ知ル。即チ此章ノ所謂君子ナリ。周初ハ質勝ツ。在位者ト雖モ、或ハ未ダ朴野ノ狀アルヲ免レズ、野人ノ目アル所以ナリ。此章專ラ外貌威儀ヲ説キテ未ダ心術ヲ論ズルニ及バズ」と。此説是なり。

【考異】先進後進 孔安國は「仕ノ先後輩ヲ謂フ」と註し、皇侃は「先輩トハ、五帝以上ヲ謂ヒ、後輩トハ、三王以還ヲ謂フ」と。江永は「時人、殷以前を指シテ野人ト爲シ、周以後ヲ君子ト爲ス」と。皆非なり。

【餘義】語由に「先進ノ禮樂ニ於ケル、儉ニシテ泰ナラズ、時人以テ野人ト爲ス。後進ノ禮樂ニ於ケル、泰ニシテ儉ナラズ、時人以テ君子ト爲ス。如シ吾ヲシテ禮樂ヲ用ヒシメンカ、將ニ其ノ儉ニシテ泰ナラザルモノニ從ハント欲スルナリ。子ノノタマハク『麻冕禮也。今也純儉。吾從レ衆。拜スルニ禮也。今拜ニ平上ニ泰也。雖違レ衆、吾從レ下』(二七)又曰ク『奢則不孫。儉則固。與其不孫一也、寧固』(三四)又曰ク『禮與ニ其奢一也、寧儉』(六七)ト。此數者ハ豈皆所謂儉ニシテ泰ナラザル者ニ從フニ非ズヤ。云云」と。

○子曰、從我於陳・蔡者、皆不及門也。德行顏淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓。言語宰我・子貢。政事冉有・季路。文學子游・子夏。

【譯讀】子曰く、我に陳・蔡に從ひし者は、皆門に及ばざるなり。德行には顏淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓。言語には宰我・子貢。政事には冉有・季路。文學には子游・子夏。

【章旨】此章は分ちて二節と爲す。前節は、孔子晩年に、昔陳蔡の厄に從ひし御門人を思ひ出だされ、今は皆門に在らざることを感じ慨かれたる也。後節は、記者夫子の言に因りて、御門人中傑出せし十人を擧げて、冠するに四科(德行・言語・政事・文學)の目を以てせし也。皇本、別に一章と爲すは非。

【字義】○陳・蔡 二國の名なり。魯の哀公の四年に、孔子時に年六十一、蔡に居られしが、楚の昭王の聘に應じて、楚に往かんとしたまひし時、陳・蔡の大夫相謀りて曰く、孔子は賢者なり、大國の楚に用ひらるれば、我等は危きに至らんと。是に於て乃ち相與に兵を發して、孔子を野に圍みて行くことを得ざらしむ。是に於て糧を絶ち、從者病みて能く興つ者なし。乃ち子貢をして楚に至らしむ。楚の昭王師を興して孔子を迎へしむ。是に由りて危難を免れて楚に達することを得たり。○不及門 門に在らざるを謂ふ。○德行 心に得る所ありて、之を實行に見す義。○言語 事理を説き得て明達なるを謂ふ。賓客に接して言辭を失はざる類なり。○政事 施設宜しきに適して、治國安民の才あるを謂ふ。○文學 古今に博通して、知らざる所なきなり。

【直解】孔子昔時陳・蔡の厄に患難を共にせられし御門人を思ひ出だされたのたまはく、吾に陳・蔡の間

に従ひし門人共は、今は或は去りて他國に仕へ、或は郷里に歸り、或は死亡して、皆吾が門に在らざるなりと。蓋し孔子の尙ほ未だ老いたまはざるや、世を憂ひ民を救はんとして四方を周遊し、爲めに陳・蔡の厄に遭ひたまふ。時に從遊せし御門人は、卿相の才を抱ける者なるに、今や或は離散し、或は死亡して皆門に在らず。夫子も亦頽然として老衰したまひ、往事空しく一夢となりぬ。是に於て俯仰感慨の餘、此歎を發したまひしなり。記者夫子の御言葉に因りて、當時に於ける傑出せる御門人十人を其の所長に由りて擧げて曰く、德行に長じたるは、顔淵・閔子騫・冉伯牛・仲弓の四人あり。言語に長じたるは、宰我・子貢の二人あり。政事に長じたるは冉有（哀公三年に、季康子に召されて魯に在り、陳・蔡には從はざりしも、當時の御門人の籍に在れば加へたるなり）季路の二人あり。文學に長じたるは、子游・子夏の二人ありと。

【考異】史記、弟子列傳に、政事二人を前に列し、言語二人を後に列す。鹽鐵論殊路章引く所亦同じ。義に於て長するに似たり。今の論語は傳寫せし者、或は其次を失せしならんか。一説に言行相對用す、故に言語を以て德行に次けるなりと。亦通す。

【餘義】唐の開元の時、此章に據りて十哲の目を立つ。唐會要に「開元二十七年詔ス、十哲並ニ宜シク褒贈スベシ」と。程顥が十哲を世俗の論と爲すは、曾子の與らざるが故なり。孔門の賢者を擧ぐれば、十哲の外に曾子・有子あり、公西赤・漆彫子開・澹臺子羽・顓孫子張・南宮子容・公冶子長・原子思・宓子賤等も亦賢を以て顯るる者なり。孔門人材の盛んなること、固より十哲に止まらずと雖も、恐くは十哲の右に出でざるべし。但曾子は年最も少くして、十哲に後れて老死せり。故に與らざるの

み。曾子を遺したるを以て世俗の論と爲すは、從ふべからず。後節は記者の言なり。各其の所長に従ひて四科に分ちしのみ。後世、是に據りて四科の目（後漢書、鄭玄傳）を立て、孔子人材を養成したまふの科目、此四者に出でずと爲すは、非なり。孔子門人を誨へたまふや、毎に仁を求めしめたまふ。未だ宰我・子貢に誨うるに、言語の方を以てせられしことを聞かざるのみならず、論語中、唯其の言を抑へて德行を勵まされしを見るのみ。政事・文學も亦德行に本づかざるなければ、四者を並列して孔門教育の四科目と爲すは、非なり。仁齋曰く「德行ハ聖學ノ全體ニシテ、言語・政事・文學ノ三者ヲ兼ヌ、豈一科ト作シテ之ヲ言フベケンヤ。而カモ三者亦德行ニ本ヅカザレバ、言語聽クベシト雖モ、徒辯ノミ。政事觀ルベシト雖モ、徒法ノミ。文學取ルベシト雖モ、徒ニ博キノミ。以テ學ト爲スニ足ラザルナリ。孟子稱セリ『冉牛・閔子・顔淵ハ則チ體ヲ具ヘテ微チリ』（孟解一）ト。而シテ三子皆德行ノ科ニ在レバ、則チ聖人ノ學トイフ者知ルベシ。後世ノ學ヲ論ズル、或ハ此ニ異リ。知ラズ所謂學トイフ者ハ、果シテ何事タルカ」と。此説之を得たり。

○子曰、回也、非助我者也。於吾言、無所不說。

【譯讀】子曰く、回、や我を助くる者に非ざるなり。吾が言に於て説ばざる所無しと。

【章旨】顔回の賢にして道を聞けば、隨ひて悟り、復疑ふ所なきを美めたまひしなり。

【字義】○回也、強く顔回を指す。○助、猶ほ益の如し、朱註に「助、我トハ子夏ノ予ヲ起スガ若シ（八佾篇）起予者商也（註）とあるを指す」疑問ニ因リテ以テ相長ズルアルナリ」と。○說悦（ヨブ）なり。

【直解】孔子のたまはく、師は弟子の疑ひ問ふによりて、これまで氣の付かざりしことに氣付くこともあり、反りて己を助け益することあるものなるに、顔回のみは、我を助け益する者にあらず。何となれば我が言に於て默識心通して疑ひ問ふ所なく、直ちに悦びて悟らざる所なければなりと。表面慇懃する所あるが如く言ひ做して、其の實は深く之を喜びたまひたるなり。

○子曰、孝哉、閔子騫、人不閒、其父母昆弟之言。

【譯讀】子曰く、孝なる哉閔子騫、人其の父母昆弟の言を聞せず。

【章旨】閔子騫の至孝を賛歎したまひしなり。

【字義】○孝哉 深く孝を賛美せし詞なり。蔡虛齋曰く「孝哉ノ二字、友ヲ兼テ其ノ中ニ在リ。友ハ實ニ孝中ノ一事ナリ」と。孝子傳に「閔子騫、事親孝、後母生三子、衣之絮、衣之絮以蘆花、父察知、欲出後母、騫告父曰、母在、一子寒、母去三子寒、父遂不出、其母亦化而慈」と。○閒 非閒なり「禹ハ吾間然スルナシ」(二七)の間と同じ。其の然らざるを非議するなり。○昆 兄なり。

【直解】孔子曰く、實に孝行者にてあるかな、閔子騫は、其の父母兄弟は皆子騫の孝友を美め稱せり。さて父母兄弟の美むる詞は、或は他人に信ぜられざることとあれども、子騫に至りては、他人も皆父母兄弟の美むる所は、決して褒め過ぎに非ざることを知りて、誰も批難して異議を唱ふる者なしと。

【考異】孔子の弟子に於ける、未だ嘗て其の字を稱したまふ者あらず。閔損獨り字を稱したまふは、蓋し其の名當時避くる所ありて、字を以て行はれたるならんか。一説に「孝ハ大徳ナリ。而シテ閔子

ハ至孝ナリ。故ニ特ニ其ノ字ヲ稱シテ之ヲ褒メタマヒシナリ」と。然れども顔淵の亞聖さへも、なほ名を以て稱せらるるを觀れば、此説未だ首肯すべからざるなり。

○南容三復白圭。孔子以其兄之子妻之。

【譯讀】南容白圭を三復す。孔子其の兄の子を以て之に妻はす。

【章旨】南容の言語を謹むを美めて、孔子、兄の女を以て之に妻はしたまひし事を記す。

【字義】○南容 公治長篇(六頁)に出づ。○三復 詩を誦して此詩に至る毎に、再三反復して玩味するなり。○白圭 詩經、大雅抑の篇に「白圭之玷、尚可磨也。斯言之玷、不可爲也」とあるを謂ふ。玷とは玉の缺損するなり。抑と曰はずして、白圭と曰ふは、慎言を主とすればなり。

【直解】南容詩を讀みて抑の篇に白圭の玷けたるは、尙ほ磨きて其の瑕を除くべけれど、一旦口より出でたる言語の玷けたる、即ち過は、如何にしても爲め改むることは出來ずとある語に至りて、幾度となく反復玩味して、深く言語の謹まざるべからざるを感悟せり。孔子見て思ひたまはく、能く言を謹むこと此の如くなれば、必ず禍を免るべしと。遂に己が兄の女を以て之に妻はせたまへり。南容に此心掛ありたればこそ「邦有道不廢。邦無道、免於刑戮」(六頁)ことを得たるなれ。范氏曰く「言ハ行ノ表、行ハ言ノ實ナリ(中略)南容言ヲ謹ム此ノ如シ、必ズ能ク其ノ行ヲ謹マン」と。

【考異】三復 朱註に「南容一日此言ヲ三復ス」とありて、日日此を三復すと爲すは、家語、弟子行篇に據りたるなれども、非なり。孔安國の「南容詩ヲ讀ミテ此ニ至リテ、三タビ之ヲ反復ス。是レ其ノ

心、言ヲ慎ムナリ」といへるに従ふべし。

○季康子問、弟子孰爲好學孔子對曰、有顏回者、好學不幸短命死矣、今也則亾

【譯讀】季康子問ふ、弟子孰が學を好むと爲すかと。孔子對へて曰く、顏回といふ者あり、學を好めり。不幸短命にして死せり。今や則ち亾しと。

【章旨】學を好むの人の得易からざるを歎じたまへるなり。

【直解】季康子問ふ、羣弟子の中にて孰か學を好むと爲すかと。孔子對へてのたまはく、顏回といふ者ありて、能く學を好みたるが、不仕合にして短命にて死せり。今は則ち其の人なし、惜いかなと。

【考異】皇本、亾の下に、未聞好學者の五字あり。今は那本朱本に従ふ。

【餘義】此章は魯の哀公の問(四)と其の問同じくして、孔子の御答に詳略あるは、哀公は君にして尊し。故に具に之に答へ、康子は臣にして卑し。故に略して、更に再問を待ちて詳かに告げんとしたまへるなり。是れ教誨の道なり。一説に哀公は遷怒武過の病あり、故に孔子答ふるに因りて之を箴めたまへるなり。康子は此事なし、故に煩言せざるなりと。或は然らん。

○顏淵死、顏路請子之車以爲之椁子曰、才不才、亦各言其子也、鯉也死有棺而無椁吾不徒行以爲之椁以吾從大夫之後、

不可徒行也。

【譯讀】顏淵死す。顏路、子の車以て之が椁を爲らんと請ふ。子曰く、才も不才も亦各其の子と言ふなり。鯉や死せしとき、棺ありて椁無かりき。吾徒行して以て之が椁を爲らざりしは、吾が大夫の後に從ひて、徒行す可からざるを以てなりと。

【章旨】葬禮は常に家の有無に稱ふべきことを語りて、顏路を慰諭したまひしなり。

【字義】○顏路 名は無繇、淵の父。○椁 皇本椁に作る、同じ。外棺なり。孔安國曰く、路ハ家貧シ、故ニ孔子ノ車ヲ請ヒ、賣リテ以テ椁ヲ作ラント欲ス」と。○鯉 孔子の子、伯魚の名。○徒行 徒は歩なり。

○從大夫之後 孔子時に致仕すと雖も、尙ほ大夫の列に從ひたまふ。故にいふ。後とは謙辭なり。

【直解】顏淵死せり。父の顏路は、淵の德行を以て世に稱せられ居たるを思ひ、深く惜みて、せめて葬式丈にても立派に爲しやらんと欲すれども、家貧しくして外棺を爲る力なし。よりて孔子の乗用の車を乞ひ受けて、之を賣りて外棺を作らんとす。孔子のたまはく、子に才不才の別はあれども、父より之を視れば、各其の子といふものなれば、之を愛する情は異なることなし。されば鯉の才は顏淵に及ばすと雖も、己と顏路と、即ち各の父より視るときは、則ち皆子なり。鯉の死せし時も、亦棺ありて椁即ち外棺はなかりしが、吾は徒歩して車を賣り拂ひ、其の代價にて外棺を作ることば爲さざりき。是れ葬式は家の有無に稱ひて分限相應にすべきものなるのみならず、吾が大夫の末席に從へるを以て、禮に於て車を捨てて徒歩すべからざるを以てなり。今汝の家も貧しければ、外棺な

くとも可なり。必ずしも備はらんことを求むるに及ばじと、慰め諭したまひしなり。

【考異】史記孔子世家、竝に仲尼弟子列傳に據れば、顔淵は鯉に先だちて死せし如く、此章と合はず。故に鯉也死を「鯉ヤ死ストモ」と讀みて、假設の辭と爲すとの説あれども、父としてかかる言を爲すは、不情を免れず。従ふべからず。公羊傳の説に従へば、淵の没年は、哀公十四年即ち孔子の七十一歳の時にして、鯉は淵に一年ばかり先だちて死せしこととなりて、正に此章と合す。従ふべきに似たり。

【餘義】仁齋曰く、「顔路ノ車ヲ請ヒシハ、想フニ其ノ必ズ請フベカラザル者ヲ請ヒシニ非ズ。而シテ夫子ノ顔子ニ於ケル、奚ゾ一車ヲ惜マン。蓋シ喪ハ以テ家ノ有無ニ稱フベシ（禮記檀弓上篇に「子游問ニ喪具、夫子曰、稱ニ家之有無」と）而シテ朝廷ノ威等（位相當の威儀）ハ、少シモ損スベカラズ。此レ夫子ノ其ノ請ヲ許シタマハザリシ所以ナリ。顔路ノ請ヒシト、夫子ノ許シタマハザリシト、一毫モ顧慮スル所ナシ。蓋シ師弟子ノ間、其ノ誠心實行此ノ如シ。後世ノ見ザル所ナリ」と。

○顔淵死。子曰、噫、天喪予、天喪予。

【譯讀】顔淵死す。子曰く、噫、天子を喪ほせり、天子を喪ほせり。

【章旨】孔子、顔淵の死を悼み、道を繼承する者なきを歎じて、是れ天の直ちに我を亡ほすに同じとのたまひしなり。

【字義】○噫、歎息の辭なり。○喪、亡なり、重ねて之を言ふ者は、痛惜の甚だしきなり。

【直解】孔子は、大聖人なれども、道を天下に行ふには、必ず吡輔（タス）の士を俟たざるを得ず。顔淵

は即ち其の人なり。顔淵の死は、孔子の道の天下に行はれざるのみならず、又後世に繼ぐ者なきなり。されば深く其の死を悼み歎きてのたまはく、噫我が頼とせし顔淵は既に死せり。淵の死は天の我を亡ほすが如きなりと。再び之を言ひたまひたるは、痛み惜まるるの甚だしきなり。

【考異】噫、歎息の辭なり。包咸は「痛傷ノ聲」と註したれども、此章には可なれども、他處には通ぜず。以て訓詁と爲すべからず。

【餘義】此章は「鳳鳥不至、河不出圖。吾已矣夫（五）」と、其の義、相表裏せり。孔子此時御年七十を過ぎ、身後の託、獨り顔子に在り。既にして顔子死す。孔子の深く痛みて此歎を發したまふ所以なり。次章と參觀して、其の義益明かなりと謂ふべし。

○顔淵死。子哭之慟。從者曰、子慟矣。曰、有慟乎。非夫人之爲慟、而誰爲。

【譯讀】顔淵死す。子之を哭して慟す。從者曰く、子慟せりと。曰く、慟する有るか。夫の人の爲めに慟するに非ずして、誰が爲めにせんと。

【章旨】孔子、顔淵の死を悲みて慟哭せられし事を記す。

【字義】○哭、哀む聲。大聲にて涙なきを哭といひ、細聲にて涙あるを泣といふ。○慟、哀の過ぎて、身をゆり動かして泣く。○從者、孔子が顔氏の家へ悔に行かれし時の御供の門人。○夫人、顔淵を斥す。

【直解】顔淵死せり。孔子之を哭して哀傷の至、身をゆるがして氣絶せんばかりに歎きたまふ。されど

も御自分には御氣付なかりき。御門人の従ひし者、之を見て申し上ぐるやう、只今夫子は御哀の餘に働したまへりと。孔子のたまはく、汝の氣付け呉れしが如く働せしことありや。吾は哀傷の過ぎて自ら働せしことを覺えざりき。さりながら吾彼の人即ち顔回の爲めに働するにあらずして、又誰の爲めに働せんやと。深く其の死を痛惜したまへり。

【考異】皇本「子働矣」の下に子の字あり「誰爲」の下に働の字あり。

○顔淵死門人欲厚葬之。子曰不可。門人厚葬之。子曰回也視予猶父也。予不得視猶子也。非我也。夫二三子也。

【譯讀】顔淵死す。門人厚く之を葬らんと欲す。子曰く、不可なり。門人厚く之を葬る。子曰く、回や予を視ること猶ほ父のごとくせり。予視ること猶ほ子のごとくするを得ざるなり。我に非ざるなり。夫の二三子なり。

【章旨】孔子、顔淵の門人が其の師を厚く葬むりしは、禮に非ざることを責めたまひしなり。

【字義】門人、顔子の門人。息軒曰く「二三子トハ孔子常ニ衆門人ヲ斥ス、此門人モ孔子ノ門人也」と。

【直解】顔淵死せり。淵の門人其の師を尊び、手厚く之を葬らんと欲して、先づ之を孔夫子に問ひけるに、夫子の曰く、それは不可なりとて聽したまはず。蓋し葬式は家の貧富に稱へて宜しきを得るを貴ぶ。家貧しきに厚く葬るは禮に非ざるなり。而るに門人遂に夫子の教に従はずして厚く之を葬れり。蓋し淵の父顔路が孔子の車を請ひて厚く葬らんとせし意をうけたるならんか(三十五)夫子の曰く、

回は平生予を視ること父の如く、我が言に信賴したりしに、予は反りて回を視ること、我が子の如く爲すことを得ざりしは残念なり。前年鯉の死せし時は、棺ありて柳なし。而るに此度は即ち厚く回を葬る。是れ回を視ること子の如く、吾が思ふやうに正しき禮を以て葬ることを得ざりしなり。然れども是れ我の爲したるにはあらざるなり。夫の回の門人等二三子が、我が教に背きて、かかる非禮の葬を爲したるなりと。回の靈に向かひて之を告げられ、深く門人の不心得を責めたまふ。

【餘義】許白雲曰く「顔淵死ノ四章、次第ヲ以テ之ヲ言ヘバ、當ニ是レ「天喪予」ハ第一「哭之慟」ハ

第二、「請車」ハ第三、「厚葬」ハ第四ナルベシ。蓋シ門人夫子ノ言ヲ雜記ス。故ニ前後ヲ計ラザルナリ」と。黃氏曰く「喪予ノ歎、有レ慟ノ哀ハ、顔子ニ厚クスルニ非ズ。道ノ爲メナリ。車ヲ請ヘバ之ヲ却ケ、厚ク葬レバ之ヲ責ムルハ、顔子ニ薄クスルニ非ズ。亦道ノ爲メニスルナリ。聖人ノ心ハ適クトシテ道ニアラザルコトナキナリ」と。

仁齋曰く「以上ノ五章ハ、門人之ヲ記シテ以テ顔子ノ夫子ノ道ニ默契スルコト、他人ノ比ニ非ザルコトヲ見スナリ。蓋シ喪ノ具ハ家ノ有無ニ稱フ(檀弓上篇に「子游問ニ喪具、夫子曰、稱ニ家之有無」と)「禮ハ其ノ奢ナランヨリハ寧ロ儉セヨ(六七)ト。君子ノ人ヲ愛スルハ徳ヲ以テシ、細人ノ人ヲ愛スルハ財ヲ以テス。門人徒ニ顔子ヲ愛スルコトヲ知りテ、顔子ヲ愛スル所以ヲ知ラズ、惜シイカナ。顔子ノ門人ダニ猶ホ厚葬ノ非ヲ免レザレバ、則チ後ノ禮ヲ行フ者ハ、其レ鑑ミザルベケンヤ」と。墨子の薄葬説は、固より之を極端に失すれども、厚葬の弊に至りては、輒近益甚だしきを見る。豈猛省せざるべけんや。

○季路問事鬼神。子曰：「未能事人，焉能事鬼。」曰：「敢問死。」曰：「未知生，焉知死。」

【譯讀】季路鬼神に事ふることを問ふ。子曰く、未だ人に事ふること能はず、焉ぞ能く鬼に事へんと。曰く、敢て死を問ふ。曰く、未だ生を知らず、焉ぞ死を知らんと。

【章旨】孔子、子路を戒めたまふに、先づ力を現實界の事に竭すべく、妄りに幽遠不急の事を意ふべからざることを以てしたまへるなり。陳羣曰く、「鬼神及死事、難明、語之無益、故不答也」と。

【字義】○鬼神 専ら祖先の神靈を謂ふ。鬼は歸なり。人の生るるや魂魄を天地より受く。其の死するや、魂は天に、魄は地に歸す。其の歸せし所の魂魄は即ち神なり。問事鬼神とは、蓋し祭祀に奉ずる所以の意を求むるなり。○事人 親を親とし、長を長とし、貴を貴び、賢を尊ぶの類をいふ。

【直解】子路、孔子に鬼神即ち祖先の神靈に事ふる道は、如何にと問ふ。孔子のたまはく、未だ人に事へて父母長上の心を得ること能はずして、安ぞ能く鬼に事ふることを得んやと。子路又推して問ひけるは、死は人の必ず免れざる所なるが、さて其の死の情状は如何なるものにて候ふぞやと。孔子のたまはく、未だ生れて此世に在る道理を知らずして、安ぞ能く死の理を知ること求むることを用ひんやと。蓋し孔子の教は他の宗教と異りて、現世を主として、來世を説かず。即ち此世に處して人道を完全に履行することを得ば、それにて十分なりとす。當面の務を怠りて、妄りに未來の事を考慮するが如きは、所謂無用の辯、不急の祭(荀子、天論篇に「無用之辯、不急之祭、棄不(レ)治」とあり)にて

君子の取らざる所なりとす。此章「務民之義、敬鬼神而遠之」(八八)と、其義を同じくす。

【考異】朱註に「鬼神ニ事フルコトヲ問フハ、蓋シ祭祀ニ奉ズル所以ノ意ヲ求ムルナリ。而シテ死ハ人ノ必ズ有ル所ニシテ知ラザルベカラズ。皆切問ナリ。然レドモ誠敬以テ人ニ事フルニ足ルニアラズンバ、則チ必ズ神ニ事フルコト能ハズ。始テ原ネテ生ズル所以ヲ知ルニ非ズンバ、則チ必ズ終ニ反リテ死スル所以ヲ知ルコト能ハズ。蓋シ幽明始終(幽明は人と鬼とを以て言ひ、始終は生と死とを以て言ふ)初ヨリ二理ナシ。但之ヲ學ブニ序(次第なり)アリ、等ヲ躡ユベカラズ。故ニ夫子之ヲ告ゲタマフコト此ノ如シ」といへるは非なり。陳天祥之を駁することにして且つ盡せり。曰く「集註ニ云フ『死ハ人ノ必ズ有ル所ニシテ知ラザルベカラズ。皆切問ナリ』ト。又イフ『幽明ニ二理ナシ、但之ヲ學ブニ序アリ、等ヲ躡ユベカラズ』ト。此レ迂闊ノ甚ダシキ、何ゾ切問ト謂ハン。二帝三王周孔ノ道、生民日用須臾モ離ルベカラザル者ハ、之ヲ經典ニ載セテ詳カニ且ツ備レリ。然レドモ皆綱常彝倫ノ間ニ出デズ。未ダ嘗テ人ニ幽明ノ次序ヲ教ヘ、必ズ死ヲ知ラシムルコトヲ聞カズ。必ズ日用人道ノ外ニ於テ、幽冥ノ中、不急ノ務ヲ推シ究メテ、死スル所以ノ由ヲ知ルコトヲ求メントスルハ、迂闊ニアラズヤ。縦ヒ之ヲ知ルトモ亦何ノ用フル所アラシヤ。今季路ヲ以テ切問ト爲スハ、誠ニ未ダ其ノ切タルヲ見ズ。夫子ハ正ニ其ノ問フ所ノ迂闊ニシテ、實用ニ切ナラザルガ爲メニ『未能事人』マタ『未知生』ト云ヒタマヒシナリ。生ヲ知ルトハ、生ニ處スルノ道ヲ知ルヲ謂フ。徒ニ其ノ始ヲ原ネテ生ズル所以ヲ知り、晝夜ハ生死ノ如キノ生ヲ知ルヲ云フニ非ズ。此レ大要之ニ教ヘテ、人事ノ當ニ爲スベキ所ノ者ヲ盡サシメタマフノミ。鬼神ニ事フルコトヲ教ヘ、死ヲ知

ルコトヲ告ゲタマフ所以ニアラザルナリ」と。此説従ふべきなり。

○閔子侍側、闇闇如也。子路行行如也。冉有、子貢侃侃如也。子樂若由也、不得其死然。

【譯讀】閔氏側に侍す、闇闇如たり。子路行行如たり。冉有、子貢侃侃如たり。子樂む。由やが如きは其の死を得ざらんと。

【章旨】孔子に侍坐する諸弟子の氣象を記せしなり。

【字義】闇闇侃侃 既に郷黨篇(三)に於て解せり。○行行 剛強なる貌。○不得其死然 孔安國曰く「壽ヲ以テ終ルコトヲ得ザルナリ」と。邢昺曰く「然ハ猶ホ焉ノ如シ」と。憲問篇にも「羿善射、舞邊舟。俱不得其死然」とあり。

【直解】孔子間居したまへる時、閔子騫は子路等の諸弟子と御側に坐せり。さて閔子の様子を見るに、闇闇如として中正にして和けり。子路は行行如として剛強の氣象あり。冉有、子貢の二人は侃侃如として和ぎ樂む狀あり。孔子は此四人の秀でたる氣象あるを見たまひ、天下の英才を集めて教育し、各其の性に因りて其の材を成すことを、深く欣び樂みたまへり。唯由即ち子路の如きは、剛強に過ぐれば、天命を全くして死することを得ざらんとて、子路を戒められたるが、果して後日子路は衛國の難に死せり(事は左傳、哀公十五年に出づ)若由也の一句は、蓋し孔子他日の御言葉なり。記者が子路の行行如たる氣象あるに就きて、係くるに此御言葉を以てし、殉難の事を實にしたるなり。

【考異】○閔子 皇本、子の下に騫の字あり。○若由也 皇本、若の上に曰の字あり。○朱註に「尹氏曰ク、子路剛強ニシテ其ノ死ヲ得ザルノ理アリ。故ニ因リテ以テ之ヲ戒ム」と。以て一時の事と爲すなり。然れども孔子現に英才を得て教育の効果あるを樂みたまふに方りて、卒然として由也が若きは其の死を得ずとのたまふことは、樂悲忽ちに境を異にし、聖人の氣象に似ず。是を夫子他日の御言葉と爲し、子路の行行如たるに因りて記者併せ録して其の殉難の事を實にすと爲すを正解とすべし。一説に、子樂の樂字は曰の字の轉訛せしものなりと爲す。即ち孫奕の示兒編に「子樂ハ必ズ當ニ子曰ニ作ルベシ。聲ノ誤ナリ。始メ聲相近キヲ以テ、曰ヲ轉ジテ悅ト爲シ、繼テ又義相近キヲ以テ、悅ヲ轉ジテ樂ト爲ス。知ル由也其死ヲ得ザレバ、則チ何ノ樂カ之レ有ラン」とあり。今按ずるに文選の幽通賦及び座右銘の兩注に竝に引きて「子路行行如也、子曰、若由也、不得其死然」とありて、正に孫説と相合せり。一説として存すべきなり。

○魯人爲長府。閔子騫曰、仍舊貫、如之何、何必改作。子曰、夫人不言、言必有中。

【譯讀】魯人長府を爲る。閔子騫曰く、舊貫に仍らば之を如何、何ぞ必ずしも改め作らんと。子曰く、夫人の言はず、言へば必ず中る有り。

【章旨】閔子の沈黙にして容易に言はず、言へば必ず理に當ることを贊したまひしなり。

【字義】○魯人 魯國の要路に居る官人なり。○爲 改め作るなり。○長府 藏の名、貨(金玉なり)を

藏むるを府といひ、甲兵を藏むるを庫といふ。○仍 因なり、俗にいふ元の儘に据置くといふが如し。○舊貫 貫は事なり。舊き事例なり。○夫人 彼人に同じ、ここは閔子を指す。

【直解】魯國には古より長府とて貨を納むる藏ありたるが、要路の人人之を改め作りて廣くせり。これ徒に民力を勞し金錢を費すのみならず、衆斂(多く年貢を取り立つること)の端を開く嫌あり。故に閔子は之を見て曰く、凡そ物を新規に改むるといふことは、容易の事にあらず。長府は古びたりと雖も、未だ甚だしく破壊し居らざれば、其の元の儘によりて修繕を加へたらば如何にぞや、それにて何の不可かあらん。されば何ぞ必ずしも民を勞して新に作り直すには及ぶまじと。孔子、閔子騫の言を御聞き遊ばされ、感歎してのたまはく、夫の人は平生妄りに言を發せざる人なれども、偶一たび言を發すれば、必ず道理に適當せりと。王肅曰く「言必有中トハ、其ノ民ヲ勞シテ改作スルヲ欲セザルヲ善トスルナリ」と。

○子曰、由之鼓瑟、奚爲於丘之門。門人不敬子路。子曰、由也升堂矣、未入於室也。

【譯讀】子曰く、由の瑟を鼓する、奚爲れぞ丘の門に於てせんと。門人子路を敬せず。子曰く、由や堂に升れり、未だ室に入らざるなりと。

【章旨】此章、子路の爲めには、其の短を斥け、門人の爲めには子路の長を表す。亦以て孔子人を教育したまふ法を見るに足るなり。語由に「英才ヲ教育スルニ、抑揚方ナキヲ記スルナリ」と。

【字義】○瑟 樂器なり。庖犧氏之を作る。本五十絃、後二十五絃を用ふ。○堂室 堂は廳堂なり、賓客に接し、禮樂を行ふの處。室は其の奥に在り。堂と室とは學に入るの淺深に喻ふ。

【直解】音樂の道は、人の性情をあらはすものにて、心の中に中和の氣あれば、音聲も亦中和になり、剛強にして中和の氣乏しきときは、其の音聲に發するものも、中和なることを得ず。さて子路の氣質は剛強なるが故に、其の瑟に發する者も、中和なること能はず(馬融曰く「子路ノ瑟ヲ鼓スル、雅頌ニ合セザルヲ言フ」と)因りて孔子之を戒めてのたまはく、由の瑟は中和を失して、聲調に合せず。何ぞ丘の門に於いて彈することを爲さんや。聞き苦しければ、丘の門にては彈ぜざるやうすべしと。是れ子路の剛強の氣を抑へて、中和の道に進ましめんとの御心なり。而るに門人共は、夫子の此御言葉を聞きて、單に子路を賤めたまひしものと誤解し、是より以後は兎角子路を敬はざるやうになりぬ。故に孔子亦門人共を賤し抑へてのたまはく、汝等は何ぞ由を輕んじ侮ることを爲すや、由の學問は、すでに堂に升れる者なり。即ち其の學識は高明正大の域に至れるものなり。唯未だ室に入らざるのみなり。即ち精微深奥の處に至らざるのみ。一事の失を以て輕んじ賤むることを爲さんやと。聖人の御言葉は時に隨ひて變じ、施すとして當らざることなし「由之鼓瑟、奚爲於丘之門」は、子路の爲めに其の短所を指摘して警め告げられたるなり「由也升堂云云」は、門人の爲めに子路の長所を表して曉されたるなり。皆教育の活法にあらざるはなきなり。

【考異】○由之鼓瑟 諸本鼓の字なし、今皇本に従ふ。○集註に、家語(辨樂解篇)を引きて「子路瑟ヲ鼓スル、北鄙殺伐ノ聲アリ」とあれども、家語は偽書のみ、據るに足らず。

○子貢問、師與商也孰賢。子曰、師也過、商也不及。曰、然則師愈與。子曰、過猶不及。

【譯讀】子貢問ふ、師と商とは孰れか賢れると。子曰く、師や過ぎたり。商や及ばず。曰く、然らば則ち師は愈れるかと。子曰く、過ぎたるは猶ほ及ばざるがごとしと。

【章旨】道は中庸を以て至れりと爲す。過不及ともに中を失ふことは一なることを教へたまふ。

【字義】○師 子張の名。○商 子夏の名。○愈 猶ほ勝れるといふが如し。

【直解】子張と子夏とは、孰れも孔門に在りて其の人品の賢きことは等しけれども、其の才質は相反せり。故に子貢此兩人の名を擧げて問ひけるは、師と商とは、孰れか勝り孰れか劣れるやと。孔子答へてのたまはく、其の言ふ所、行ふ所に因りて見れば、師は常に中庸を過ぎ、商は常に中庸に及ばずと。蓋し子張は才高く意廣くして、苟も能くし難き事を爲すことを好む。故に過ぎたりとのたまひ、子夏は篤く道を信じ謹み守りて、規模或は狹隘なり。故に及ばずとのたまふ。子貢は孔子の御言葉の旨を曉らず、但過ると、及ばざるとを較ぶれば、過ぐる方を差勝りたるやうに思はるるによりて、重ねて問ひて申すやう、然れば師は商より勝り候ふにかと。孔子答へてのたまはく、學問の道は中庸に合ふことを貴ぶ。中庸に及ばざる者は、固より之を卑陋に失すれども、中庸に過ぎたる者も、又之を誇張に失ふ。皆等しく中正を得ざるものなれば、行き過ぎたるは、猶ほ到り及ばざると同様なりと。蓋し學者をして各其の過ぎたる所を抑へ、其の及ばざる所を勉めて、中道

に歸せしめんとの思召なるべし。

【考異】皇本、問の下に曰の字あり。賢の下に乎の字あり。また末の及の下に也の字あり。

【餘義】此章、中庸の至徳たる所以を説きたまふ。正に雍也篇の「子曰、中庸之爲徳也、其至矣乎。民鮮久矣」また中庸第三章の「子曰、中庸其至矣乎。民鮮能久矣」とを、參觀すべし。

師也過、商也不及と、二子の才質の相反すること此の如し。姑く論語中に載する所を以て之を考ふるに、孔子の子張に告げたまふに「多聞闕疑、慎言其餘、則寡尤。多見闕殆、慎行其餘、則寡悔」といふを以てしたまひしが如き、子張の闕略にして疑殆を闕くこと能はざるを戒めたまひしを知るべく、其の自ら「在邦必聞、在家必問、我之大賢與、於人何所不容。我之不賢與、人將拒我」といへるが如き、所謂中庸に過ぐるの氣象を見るべし。又孔子の子夏を戒めたまふに「女爲君子儒、無爲小人儒」とのたまひ、また「無欲速、無見利、無見小利」とのたまひしが如き、子夏の篤く信じて謹み守り、其の規模の狹隘なりしことを知るべく、其の自ら「可者與之、其不可者拒之」「君子信而後勞、其民未信則以爲厲、己也。信而後諫、未信則以爲謗、己也」といへるが如き、所謂中庸に及ばざるの氣象を見るべきなり。

○季氏富於周公、而求也爲之聚斂、而附益之。子曰、非吾徒也。小子鳴鼓攻之、可也。

【譯讀】季氏、周公よりも富めり。而るに求や之が爲めに聚斂して之に附益す。子曰く、吾が徒に非ざるなり。小子鼓を鳴らして之を攻めて可なりと。

【章旨】冉求が季氏の家宰となりて、平生學びし道を行ふこと能はず、苟も主君の意に稱へて聚斂を事とするを責めたまひたるなり。

【字義】◎周公 名は旦、武王の弟にして、成王の叔父なり。天下を安定せし大功あり。冢宰(六卿の長)の位に居り、魯國の始祖たり。季氏は魯侯よりも富めるなり。然れども孔子は正しく之を言ふことを欲したまはず、故に其の祖先たる周公よりも富めりとのたまひたるは、辭を婉曲にしたまへるなり。◎聚斂附益 賦税即ち年貢を急にして其の富を増し加ふるなり。國語の魯語に「季康子欲用田賦、使冉有訪諸仲尼、仲尼不對、季氏卒用田賦」とあり。即ち聚斂附益の事なり。冉有家宰として之を匡救すること能はず、又引退せず。自ら聚斂の計を爲さずと雖も、其の君の罪は即ち亦臣の罪なり。故に直ちに冉有を罪したまひしなり。◎非吾徒也 吾徒は吾が弟子なり。吾が弟子にあらずとして之を絶ちたまひしなり。◎小子 門人なり。◎鳴鼓而攻之 公然と其の罪を聲明して之を責むるに喩ふるなり。春秋に「師有鐘鼓曰伐」とあり。鼓を鳴らすは罪を攻むる所以なり。故にかくのたまふ。必ずしも眞箇に鼓を鳴らすにはあらざるなり。攻は責なり。之を責讓するなり。

【直解】季氏は魯國の大夫の身分なるに、反りて其の國君の周公よりも富めり。これ其の君の物を攘み奪ひ、其の民の物を刻剝(ハギ)するに非ずば、何を以てかかる富を得ることあらんや。而るを冉求は季氏の家宰となりて之を匡(た)救ふこと能はざるのみならず、又之が爲めに年貢を急しく取り立てて、

富めるが上に更に富を増し加へしめぬ。求の爲す所、此の如し。是れ吾が弟子にあらざるなり。汝等門人共よ、鼓を撃ち鳴らして其の罪を公衆に宣示し、以て之を攻めて可なりと。首節の季氏以下の十七字も、亦孔子の御言葉なることは、求也の二字にても明かなり。況や「季氏富於周公」の一句は一章の斷案たるをや。但子曰の二字を中間に挿入せしは、非吾徒也の語氣を強めんが爲めなり。古文には時に此法あり。

【考異】周公 孔安國曰く「周公ハ天下ノ宰、卿士ナリ」と。即ち當時周室の政を輔佐せる卿大夫と爲せり。然れども當時季氏の富は、公室三分の二を有せり。而して周室は微弱甚だしければ、恐くはこの周公は、天下の宰を指したるにはあらざるべし。皇侃曰く「周公ハ天子ノ臣、采ヲ周二食ミ、爵ハ公タリ。故ニ周公ト謂フ、蓋シ周公且ノ後ナラン」と。亦非なり。故に朱説の周公且と爲すに従ふ。況や凡そ周公と稱する者、皆周公且を指して言ふをや。

【餘義】仁齋曰く「孟子曰ク『政事ナケレバ、則チ財用足ラズ』(孟解九)ト。夫レ國家ノ財用ヲ足ラス所以ノ者ハ、亦民ノ爲メニスルノミ。冉有政事ヲ以テ稱セラル(三四)其ノ季氏ノ爲メニ聚斂シテ附益セシ處置調度ハ當ニ其ノ方アルベシ。未ダ必ズシモ後世ノ貪吏ノ爲ス所ノ如クナラジ。然レドモ季氏周公ヨリモ富メルトキハ、則チ冉有タル者、宜シク之ガ爲メニ粟ヲ散ジ財ヲ施シ、其ノ民ヲ救フチ以テ急ト爲スベシ。而ルニ反リテ之ヲ附益ス。此レ夫子ノ深ク之ヲ責メタマヒシ所以ナリ。夫レ下ヲ損シテ以テ上ニ益スハ、適ニ夫ノ上ヲ損スル所以ナリ。冉有ノ意ハ、本季氏ノ爲メニスルニ在リテ、而カモ季氏ノ爲メニスル所以ヲ知ラズ。亦惜ムベカラザランヤ」と。

○柴也愚參也魯師也辟由也騶

【譯讀】柴や愚なり。參や魯なり。師や辟なり。由や騶なりと。

【章旨】孔子、柴・參・師・由、四子の性質の偏する所を挙げ、四子をして自ら反省し、其の病を知りて修治する所あらしめたまふ。亦對症の藥石なり。

【字義】○柴 孔子の弟子、姓は高、字は子羔、衛の人なり。○愚 愚直の愚なり。俗にいふ馬鹿正直なり。○魯 魯鈍なり。性質の遲鈍なるなり。○辟 偏僻なり。考のかたよりて横道に入り易きなり。○騶 駁騶(粗暴なり)にして禮容を失するなり。

【直解】孔子柴等四人の御門人の性質を評してのたまはく、柴は謹厚なることは餘りあれども、變通の才に乏しく、所謂馬鹿正直なり。又參(曾子の名)は性質如何にも魯鈍にして敏捷ならず。又師(子張の名)は偏僻にして中正なること能はず。又由(子路)は粗暴にして行儀惡しと。四子の材質偏する所あるを免れず、夫子に非ずんば、孰か能く指摘して之を正さん。

【考異】辟 皇本僻に作る、通ず。朱註「辟ハ便辟ナリ。容止ニ習ヒテ誠實少キヲ謂フ」とあるは非なり。【餘義】本章には子曰の二字なければども、柴也參也等の語によりて孔子の御言葉たることを知るべし。吳才老曰く「此章ノ首ニ子曰ノ二字ヲ脱ス」と。従ふべし。一説に、次章の子曰の二字、當に此章の首に在り、通じて一章と爲すべしと。然れども二章の語勢類せず。恐くは非なるべし。僖魯曰く「四者(愚魯辟騶を指す)ハ、皆其ノ偏ナル所ヲ指ス。惟曾子ハ能ク其ノ偏所ニ於テ功ヲ

用フ。故ニ後來至鈍反リテ至敏トナレリ。其ノ功ヲ用フル所以ハ、人一タビスレバ、己ハ之ヲ十タビスシ、人百タビスレバ、己ハ之ヲ千タビスルノミシ(附解二)と。

○子曰回也其庶几乎空。賜不受命而貨殖焉。億則屢中。

【譯讀】子曰く、回や其れ庶からんか。屢空し。賜は命を受けずして貨殖す。億れば則ち屢中る。

【章旨】孔子、顔回と子貢とを比較して、回の道に近きを稱したまひしなり。

【字義】○其庶乎 庶は近なり。猶ほ庶幾と曰ふが如し。道に近きなり。易經、繫辭下傳に「子曰、顔氏之子、其殆庶幾乎」と、語同じ。○屢空 屢、空置に至るなり。屢、空置に至るとも、其の樂む所を改めざるを言ふなり。○命 天の運命なり。天の賦する所の貧富貴賤の命をいふ。○貨殖 貨財殖殖するなり。富むをいふ。殖は生なり。中庸の「貨財殖焉」(附解二)の殖と同じ。仁齋曰く「命ハ天命ヲ言フ。子貢ハ富ヲ求ムルコトヲ務メズト雖モ、然レドモ其ノ才自ラ能ク富ヲ致ス。故ニ命ヲ受ケズト曰フ」と。○億 意度(ハカシム)なり。○中 理に中るなり。其の才識亦能く事を料りて多く中るを言ふ。

【直解】孔子ののたまはく、顔回は其れ道に近く、殆ど道と一と爲るに近きか。貧乏なること甚だしく、屢米糧が空になることあるも、泰然として貧に安んじ、其の樂を改めざるなり。賜(子貢)は天命を受けず、即ち命運の至るを待たずして、貨財を生殖して富を致す。固より回の貧に安んじて道を樂むに若かずと雖も、其の才識の明かなるが故に、心に意ひ料る所あれば、毎理に中ることを得る

なりと。蓋し其の貨殖することを得たるも、才明かにして「億則屨中」に由るなるべし。左傳、定公十五年に「仲尼曰、賜不幸、言而中。是使賜多言者也」とあるを參考すべし。

【餘義】仁齋曰く、「人ノ貧富ニ於ケルハ、義アルノミ、苟モ義ニ合スレバ、則チ以テ富ムベク、以テ貧シカルベシ。然レドモ亦命アリ。貧富ノ表ニ超ユル者ニ非ザレバ、則チ泰然トシテ自ラ安ンズルコト能ハズ。夫レ之ヲ致スコトナクシテ至ル者ハ命ナリ。苟モ致ス所アリテ至ル者ハ、義ト雖モ而カモ命ニ非ザルナリ。子貢ノ貨殖ノ若キハ、固ヨリ世ノ財ヲ豊カニスル者ノ比ニアラズ。然レドモ致ス所アリテ至ルコトヲ免レズ。故ニ之ヲ不受命ト謂フベク、而シテ義ナシト謂フベカラザルナリ。是レ子貢ノ顔子ニ及バザル所以ナリ」と。

○子張問善人之道。子曰、不踐迹。亦不入於室。

【譯讀】子張、善人の道を問ふ。子曰く、迹を踐まず。亦室に入らず。

【章旨】孔子、善人の生質の善美なることを論じ、之を進むるに學を以てしたまへるなり。

【字義】○善人 生質美にして、未だ學に由りて成れる者にあらざるを謂ふ。善人之道とは其の道として奉持する所をいふ。○不踐迹 踐は循なり、古人の成したる跡に循ふことを爲さざるなり。迹一本に跡に作る。阮元曰く「按ズルニ跡ハ乃チ迹ノ俗字」と。○不入於室 聖賢の道の深奥なる所に入ることを務めざるなり。室の字は、前の「未入於室也」(三六)の室の字と同じ。

【直解】子張、孔子に善人の奉持して行ふ所の道とは、如何なるものにて候ふかと問ふ。孔子答へての

たまはく、凡そ人は氣質或は外物に蔽はるるときは、自ら善道に合ふこと六つかしく、大抵古聖賢の爲されたる事跡や法度を守りて、而る後に漸く道に合ふことを得るものなるが、唯善人のみは然らず。生質醇美にして偏雜(カタヨリ)の患なければ、必ずしも古聖賢の成されたる迹を踐みて、それに循ひ行かざるも、自然に善道に合ひて、悪しきことをば爲さぬものなり。然れどもたとひ生質は醇美なるも、學問の功を積むことなければ、亦聖人の道の奥義、即ち室に入ること能はざるなりと。蓋し道の字よりして下の迹の字、室の字を下し、道途、轍迹、居室を借りて論じたまひしなり。其の古人の成跡に循はざるは、即ち古人の奥室に入ること能はざる所以なり。亦の字尤も味あり。

○子曰、論篤是與。君子者乎、色莊者乎。

【譯讀】子曰く、論の篤きにはれ與せば、君子者か、色莊者か。

【章旨】言論のみを以て輕しく人に與すべからず。必ず其の行を考ふべきことを論されたるなり。

【字義】○論篤 言論の篤實深切なるを謂ふ。○與 許與なり。○色莊 顔色の莊嚴なるなり。外に莊にして内必ずしも莊ならざるなり。色莊者は、陽貨篇に所謂「色厲ニシテ内在ナル者」(七六)なり。莊は猶ほ厲の如し。○乎 疑辭なり、半信半疑にして其の必ずしも然ることを定めざるの意あり。

【直解】孔子曰く、凡そ人の心の中程、容易に知れざるものはあらず。されば其の人の言論の如何にも篤實深切なるを見て、容易に許與して、彼は有徳者なり、君子なりなどと信する時は、大いに誤を生ずることあり。故に其の言論の篤實なるを見たるのみにては、其の人果して言行一致せる君子者なる